

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第136集

こ ば り
小 針 遺 跡

2005

財団法人愛知県教育サービスセンター

愛 知 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

序

愛知県岡崎市は、県東部にあたる三河地域の中央やや西側に位置し、市の中心部は三河湾から20kmほど内陸に入ります。岡崎藩五万石の城下町時代から、西三河地域の中心的都市として、現在までその役割を担ってきました。

小針遺跡が位置する岡崎市周辺では、原始の時代より、我々の祖先による生活が営まれてまいりました。このことは、周辺地点で確認されている遺跡、過去の発掘調査結果が物語っています。

岡崎市小針町地内では、このたび愛知県建設部道路建設課によって、県道名古屋岡崎線が建設されることとなりました。(財)愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センターでは、愛知県教育委員会を通じて、愛知県建設部からの依頼を受け、建設工事に先立つ事前調査を行いました。その結果、古墳時代・古代を中心とした遺構や遺物を検出することができ、この地の歴史に新たな資料を提供することができました。

調査にあたりまして、愛知県建設部、愛知県教育委員会、岡崎市教育委員会をはじめとする関係諸機関、周辺地域の皆様から多大な御協力をいただきましたことを、深く感謝申し上げる次第です。

最後に、本書がこの地域の歴史理解と、埋蔵文化財研究の一助となれば幸いと存じます。

平成17年 8 月31日

財団法人 愛知県教育サービスセンター
理事長 古池庸男

例 言

- 1 本書は愛知県岡崎市小針町地内に所在する、小針遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、愛知県建設部道路建設課による県道名古屋岡崎線建設工事に伴う事前調査として、財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センターが、愛知県教育委員会を通じて委託を受けて実施した。調査面積は2100㎡である。
- 3 発掘調査は平成15年7月から12月にかけて実施した。さらに平成16年度には調査報告書作成のため、整理作業を実施した。
- 4 現地における発掘調査は、愛知県埋蔵文化財センター調査課主査・小嶋廣也(現知立東高校教諭)、同主任・松田 訓が担当し、玉野総合コンサルタント株式会社に調査事業の支援を依頼した。
- 5 調査にあたっては、愛知県建設部道路建設課、愛知県教育委員会文化財保護室、愛知県埋蔵文化財調査センター、岡崎市教育委員会をはじめとして、多くの関係諸機関の御協力を得た。
- 6 本書の編集は松田 訓が担当し、執筆分担は以下の通りである。
第Ⅰ～Ⅴ・Ⅶ章＝松田 訓、第Ⅵ章＝鬼頭 剛・(株)パレオ・ラボ
- 7 報告書整理作業については松田 訓が担当し、実測、トレース作業には次の方々の参加を得た。
平野昌子(調査研究補助員)、今田清美・野中栄子(整理補助員)
遺物のトレースは、株式会社ウエルオンに作業を委託した。
- 8 本書掲載の遺構写真は西村匡広(調査補助員)、遺物写真は永井宏幸(本センター調査課)の協力を得た。
- 9 本書に示す座標数値は、国土交通省告示に定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠し、新基準「世界測地系」で表記した。また、海拔表記は、東京湾平均海面高度(T.P.)の数値である。
- 10 本書で示す土色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』による。
- 11 本書中の素焼き遺物については、「土器」として統一した。
- 12 遺物の整理番号と登録番号の対象は、表として添付のCDに収録した。
- 13 遺構写真や図面類などの調査記録は、本センターにて保管する。
- 14 出土遺物は、愛知県埋蔵文化財調査センターにて保管する。
- 15 本書の作成にあたり、城ヶ谷和広氏・藤澤良祐氏・野口哲也氏には出土遺物の時期的解釈において、多くのご指導を得た。さらに本遺跡の報告にあたって、次の諸氏、諸機関にご指導、ご協力をいただいた。記して感謝したい。(五十音順、敬称略)

荒井信貴 小幡早苗 斎藤嘉彦 内藤高玲 山崎純男

岡崎市教育委員会

目 次

第Ⅰ章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置	2
第2節 歴史的環境	4

第Ⅲ章 調査の概要 6

第Ⅳ章 遺 構

第1節 基本層序	7
第2節 遺構	9

第Ⅴ章 遺 物

第1節 概要	38
第2節 主要遺構別出土遺物	38

第Ⅵ章 自然科学分析

第1節 放射性炭素年代測定	47
第2節 堆積環境	49

第Ⅶ章 まとめ 55

挿図目次

第1図	遺跡位置図	2	第24図	S B 1006・S X 401平面図及び	
第2図	遺跡周辺地形図	3		S K 436・440断面図	32
第3図	周辺遺跡分布図	5	第25図	S K 552・801平・断面図	33
第4図	調査区配置図	6	第26図	S D 103平・断面図	33
第5図	調査区基本層序模式図	7	第27図	S D 802平・断面図	34
第6図	調査区北壁土層断面図	8	第28図	S D 803平・断面図	34
第7図	調査区主要遺構全体図	10	第29図	S D 807・808平・断面図	35
第8図	A・B区遺構位置図	11	第30図	S Z 801・802平・断面図	36
第9図	C区遺構位置図	12	第31図	S X 811平・断面図	37
第10図	S K 599平・断面図	19	第32図	出土遺物実測図(1)	42
第11図	S B 101・102・108平・断面図	20	第33図	出土遺物実測図(2)	43
第12図	S B 103平・断面図	21	第34図	出土遺物実測図(3)	44
第13図	S B 104平・断面図	22	第35図	出土遺物実測図(4)	45
第14図	S B 401・402平・断面図	23	第36図	出土遺物実測図(5)	46
第15図	S B 403・404平・断面図	24	第37図	03 C 区北壁における柱状図	53
第16図	S B 405平・断面図	25	第38図	テフラ分析結果	53
第17図	S B 406平・断面図	26	第39図	調査地点周辺地域の等高線図	54
第18図	S B 407・408・409平・断面図	27	第40図	岡崎平野の地形と地質図	54
第19図	S B 801・802平・断面図	28	第41図	小針遺跡主要遺構図	58
第20図	S B 803・804・807・808		第42図	小針遺跡遺構変遷図	59
	平・断面図	29			
第21図	S B 1001平面図及び				
	S K 288・289断面図	30			
第22図	S B 1002・1003平面図及び				
	S K 129・200断面図	30			
第23図	S B 1004・1005平面図及び				
	S K 510・512断面図	31			

表目次

表1	調査工程	1
表2	測定および較正の結果	48

第Ⅰ章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

小針遺跡は、愛知県岡崎市小針町地内に位置する。愛知県教育委員会が1995年に発行した愛知県遺跡分布地図の知多・西三河地区版によると、小針町地内には、猿投塚古墳をはじめとする古墳、小針城跡のような城館跡、小針西遺跡のような弥生土器散布地とともに、今回調査を行った小針遺跡も、縄文～中世にかけての集落跡として記載されている。この地区は現在、雑種地、畑地がひろがる中に民家がならぶ。今回調査を行った地点は、近年まで遺跡としての範囲が確定されていなかった。

平成10年、県道名古屋岡崎線バイパスの建設に伴い、予定地が遺跡等に近接するため、工事予定地の確認調査が、愛知県教育委員会文化財課、岡崎市教育委員会社会教育課によって行われた。この結果、若干の遺物・遺構が確認され、平成14年に再度試掘調査を行った結果、古墳時代・古代・中世等の遺物が確認された。この範囲確認地点は、平成5～7年度にかけて岡崎市教育委員会が調査を行った小針遺跡調査地点東端から、直線距離で約100m東の地点に位置し、同一の台地状に立地する。先の調査によって確認された遺構、遺物は、今回の確認結果と時期的に整合性をもつ。したがって、両地点は一連の遺跡と判断され、小針遺跡として調査されることとなった。

財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センターでは、愛知県教育委員会を通じて、愛知県建設部からの依頼を受け、平成15年7月より発掘調査を実施した。調査面積は2100㎡である。

第2節 調査の経過

調査区は、県道建設予定地を3分割して、A～C区として設定した。調査期間は5ヶ月強を要し、平成15年7月15日よりA区の表土剥ぎを実施し、12月22日にC区の埋め戻し作業を終了した。この間、各調査区ごとに、A区＝8月21日、B区＝10月8日、C区＝12月12日に航空測量を実施した。

出土遺物の整理作業は、調査中に洗浄・注記作業を行い、引き続き平成16年4月より、報告書作成までの作業を行った。

表1 調査工程

	H.15							H.16						
	7	8	9	10	11	12	...	4	5	6	7	8	9	
作業員説明会	●													
資材搬入														
A 区	 7/15～8/25													
B 区		 8/27～10/20												
C 区			 10/21～12/22											
航空測量		● A区 8/21		● B区 10/8		● C区 12/12								
資材搬出														
報告書作成														

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置



第1図 遺跡位置図

愛知県は日本列島のほぼ中央、太平洋側に位置し、旧国名では尾張および三河にあたる。小針遺跡の位置する岡崎市は、愛知県東部を占める三河地域の中央やや西側に位置し、三河湾にそぐ矢作川の中流域まで遡った左岸を中心に、市域を展開する。市域は豊田市・下山村と北で、額田町とは東で、音羽町・蒲郡市・幸田町・西尾市とは南で、安城市とは西で接する。

小針遺跡は、岡崎市域の大部分を占める矢作川左岸とは対岸の、右岸台地上に所在する。この矢作川右岸に展開する台地は、碧海台地と呼ばれる。調査地は、沖積平野を介して東に位置する矢作川に向かって、台地の平坦地が下がり始める地勢で、旧態は宅地、畑地等である。調査地付近の地表高は、標高20.4～16.7mを測る。



第2図 遺跡周辺地形図（国土地理院1/20万地勢図「豊橋」）

第2節 歴史的環境

小針遺跡は、縄文時代から近世にいたる遺構・遺物が確認された複合遺跡であるが、出土遺物は古墳時代、古代を主体とする。

『愛知県遺跡地図(2)－知多・西三河地区－』によれば、岡崎市内に分布する埋蔵文化財包蔵地は、324ヶ所が掲載されている。本節では、周辺に分布する遺跡の中で、小針遺跡が位置する矢作川右岸の碧海台地段丘崖を中心に概観してみる。

調査地点周辺で確認できる遺跡は、古い時期では西側に隣接する舌状台地上に、下り坂遺跡、和志取神社遺跡、仏供田遺跡といった縄文土器の散布が確認できる地点がある。さらに西方向約1.3kmの地点には、安城市教育委員会によって調査が行われた御用地遺跡があり、ここでは多量の縄文土器片と共に、土器棺墓、土坑が確認されている。また、岡崎市教育委員会による小針遺跡調査地点では、縄文時代中期後葉及び晩期中葉の遺物、小土坑が確認されている。したがって、調査地点近隣の碧海台地上では、狩猟・採集活動を生業とした人々の生活が成立する環境であったと思われる。しかし現在までに、住居跡など集落跡の具体的な痕跡は見つかっていない。

弥生時代に入っても、現認される状況は縄文時代と大きく変わることがない。周囲において、弥生時代の土器片が確認できる地点は、調査地点から東へ約1kmの位置に山伏遺跡、開析谷をはさんだ西隣の台地上には、小針西遺跡などが見られる。散布地以外で集落跡と判断できる遺構は、岡崎市教育委員会による小針遺跡調査地点のみである。ここでは後期前半の住居跡4、土坑などが確認されており、後期後半とされる方形周溝墓も検出された。また、報告書においては、調査区間に後期後半の集落跡が存在する可能性が提示されている。弥生時代において確認されている時期は、後期に集中していて遺構もわずかである。したがって弥生時代のどの時期から、この地に人々が安定した生活を展開していたのか、現段階では解明できていない。

古墳時代では、調査地点から南西方向約2kmの地点には、中期の前方後円墳である和志山古墳、宇頭大塚古墳があり、北西方向にはかつて小針古墳群を形成し、滅失を逃れた小針1号墳などがある。後期のものとしては、調査地点から南西方向約2kmの宇頭町周辺に群集墳が展開し、滅失したものも含めると碧海台地の段丘崖に沿って、かなり多くの後期古墳が群を成して展開していたようである。

古墳時代から古代にかけての時期で集落と思われる遺跡は、調査地点から西方向に約1.3kmの地点に40以上の竪穴住居跡が検出された御用地遺跡、南西方向約2kmの位置には25以上の竪穴住居跡が確認された楮山遺跡、南西約1.7kmの位置には平安時代の集落と考えられる正万遺跡がある。また、岡崎市教育委員会による小針遺跡調査地点では、竪穴住居跡、掘立柱建物跡が群を成して確認され、拠点集落の様相が確認された。さらに、調査地点から北東方向約1.1kmの地点には、白鳳期建立と比定された国指定史跡である北野廃寺がある。

戦国時代には、小針遺跡の範囲内に重なる位置に、小針城跡の存在が確認できる。近世において徳川幕府の安定支配が続くと、この地は整備された東海道に近接し、宿場町、城下町の発展に寄与しながら、現勢の基礎が築かれていったものと思われる。



1. 小針遺跡 2. 小針西遺跡 3. 小針城跡 4. 御用地遺跡 5. 小針1号墳 6. 小針2号墳
7. 猿投塚古墳 8. 北野廃寺 9. 山伏遺跡 10. 宮前遺跡 11. 長田遺跡 12. 下り坂遺跡
13. 和志取神社遺跡 14. 仏供田遺跡 15. 八蔵塚遺跡 16. 柿崎古屋敷遺跡 17. 荒子古墳
18. 宇頭大塚古墳 19. 正万遺跡 20. 和志山古墳 21. 楮山遺跡

第3図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

第Ⅲ章 調査の概要

調査区は、県道名古屋岡崎線バイパス建設予定地に設定した。したがって調査地点は、建設予定の道路形状に合わせたため東西に細長く、これを排土処理の関係から東西に2分割し、周辺住宅への進入路確保の関係から、西側をさらに南北に分割し、この北側をA区、南側をB区、東側半分をC区として、AからC区へと順に調査を進めた。

調査地点は、舌状台地の端に立地し、湧水層は地表面から比較的浅く、まとまった降水量を受けた後には深度のある遺構基底部や、攪乱などからの湧水が認められた。したがって、調査地点の排水除去対象は雨水及び湧水で、トレンチを排水利用し、攪乱部分に枡を設けて水中ポンプ設置用とし、一次排水先に浄化タンク（鋼製水槽）を設け、ここから悪水路に排出した。

調査区内の表土除去は、機械（バックホウ）掘削によって行った。この調査地に排土処理のためにベルトコンベヤーを配し、A区用の排土置き場及び周辺住宅への進入路にB区をあて、B・C区調査時にはそれぞれの調査区を交互に排土用地にあて、この間のA区は周辺住宅への進入路とした。

各調査区では、遺物包含層掘削から遺構検出作業に入り、遺構掘削、写真撮影、測量を行い、最終的に基盤層の確認を行って調査を終了した。



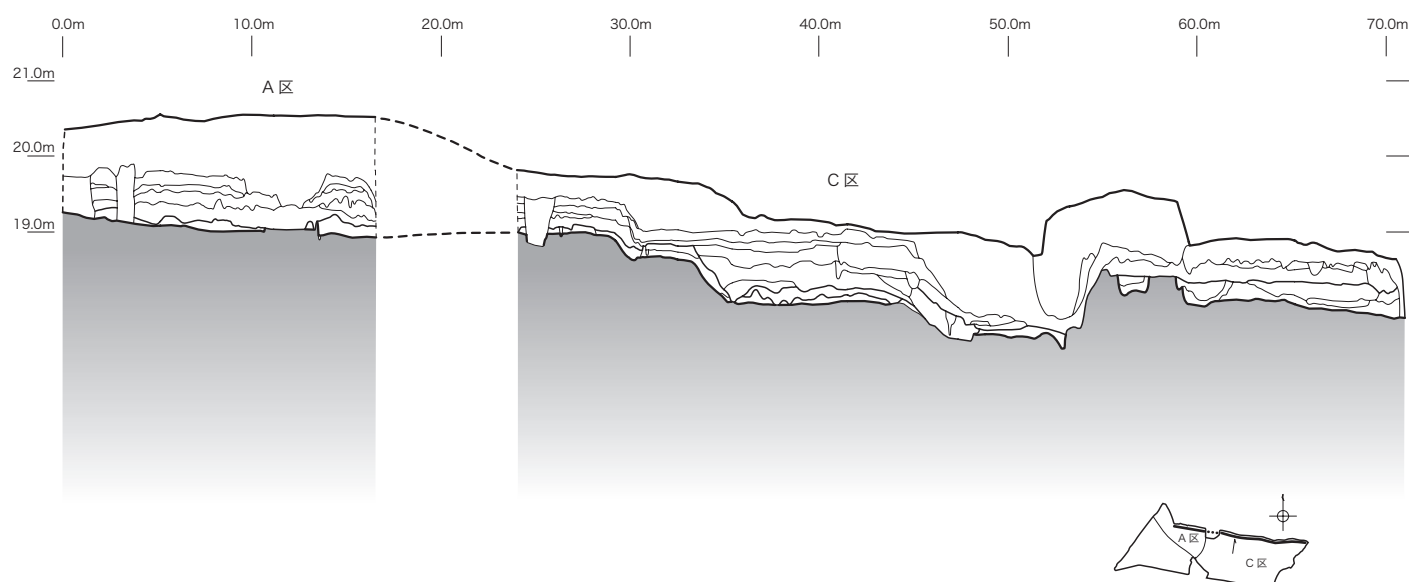
第4図 調査区配置図

第Ⅳ章 遺 構

第1節 基本層序

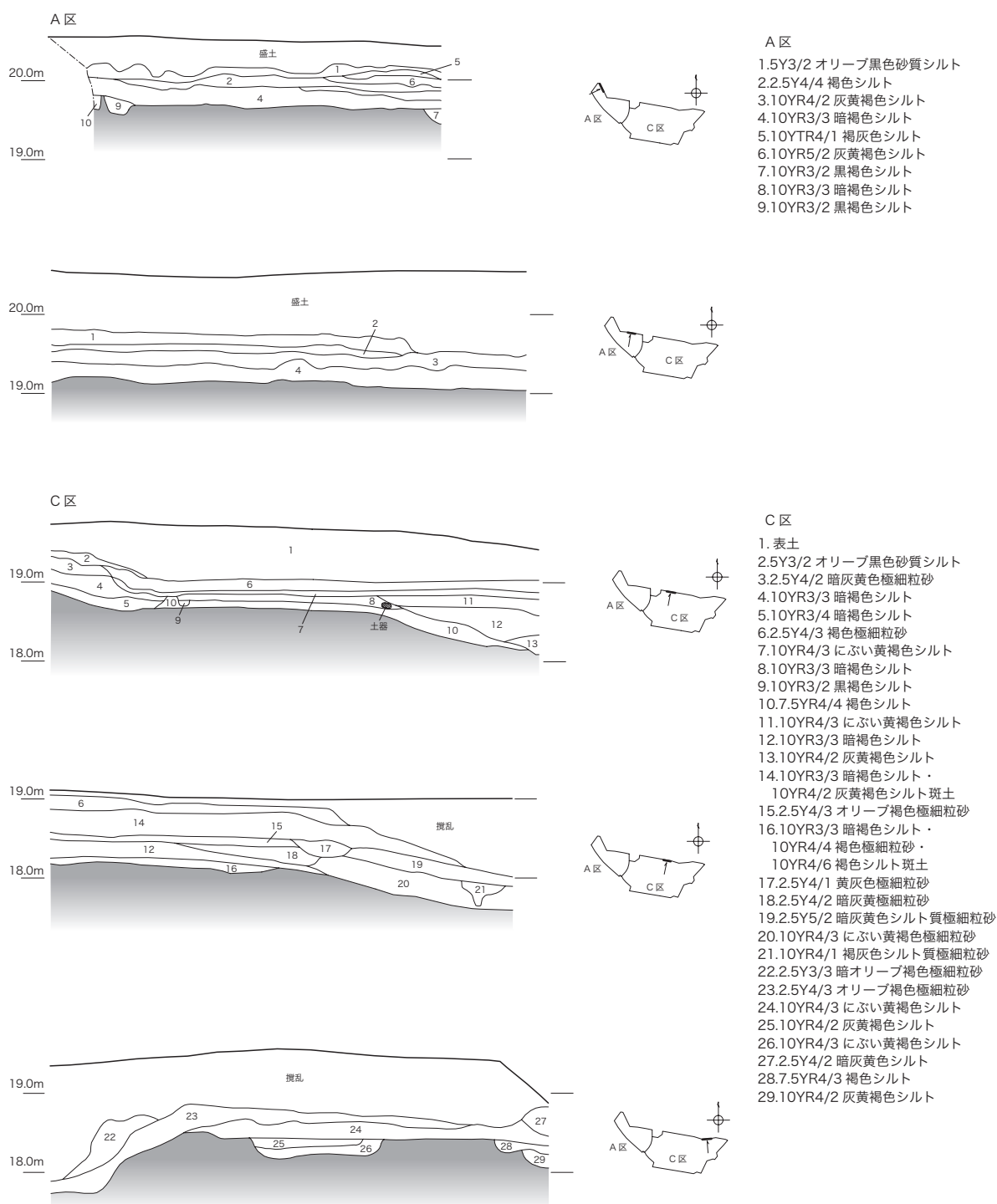
小針遺跡における基本層序を概観すると、第5図のような状況がみてとれる。調査地点は南北方向にのびる舌状台地の東端で、A、C区の東西方向に位置する壁面にて断面観察を行っても、東に向かってゆるやかに落ちているのがみとめられた。地表面は標高20m前後で、耕作土または客土が敷かれた部分に覆われていた。A～C区内は、部分的に削平を受けたり盛土が成されていて、各区に共通した堆積状況がとらえられなかった。この中でA区北壁では、比較的安定した堆積状況が観察できたため、この部分を例にとって土層の平均的な堆積状況を述べる。

盛土の下には、オリーブ黒色砂質シルトが約20cmほど層を成すが、しまりも悪く斑土も観察できたため、近年までの耕作に伴うものと判断した。この下には褐色シルトが約10cm見られ、さらにその下に灰黄褐色シルトが、A区東側を中心として広がっていた。この層の中からは、わずかに戦国期、中世の遺物が確認できた。したがって、この層の上部を目安として機械掘削を行い、この時期を面としてとらえようと検出作業を試みたが、明確な遺構はA区内の脆弱な掘り込みの溝（S D101）のみであった。この下には、少ないながら古墳時代から古代の遺物を含む暗褐色シルトが、15～30cm堆積しており、この下位には基盤層として扱った褐色シルトが確認できた。調査は、少量の遺物を含む暗褐色シルト層を主体とし、この層では遺構面を確認しながら掘り下げ、結果として基盤層直上にて全体の掘り込み面を確認し、遺構検出面とした。



第5図 調査区基本層序模式図

小針遺跡



第6図 調査区北壁土層断面図 (1/80)

第2節 遺構

第1項 概要

今回の調査地点で検出した遺構は、主として竪穴住居跡、土坑、円形小穴、溝、火葬墓、その他の掘り込みなどであった。これらの遺構は、その密度と比較して遺物を伴うものが極端に少ない。また、包含層における遺物の密度もかなり薄いことが、この調査地点の特徴であった。したがって、遺構の時期が判断できたものは、わずかであった。この出土遺物のなかで、今回の調査地点全体で確認できた時期を概観すると、縄文時代後・晩期、古墳時代後期、平安時代、戦国時代～近世に大分できそうである。

遺構の時代別比較では、古墳時代後期が主体であり、縄文時代、平安時代、戦国～近世の遺構は、小規模なものが見られるものの、数は少ない。こうした状況を、西側に位置する岡崎市教育委員会調査地点（以下、市教委調査地点）と比較すると、時代別では縄文時代がもっとも古い時期であること、古墳時代後期が主体を成すことは共通しているが、市教委調査地点では弥生時代後期、奈良時代の遺構も一定数検出された点が異なる。この検出状況の違いは、集落規模の変容を知る上で参考となるが、本調査地点が市教委側と比較して、より台地の縁辺側に位置し、調査面積も数分の一であることを考慮した上で、比較しなければならないであろう。

遺構の内容としては、検出遺構の主体を成すものが竪穴住居跡であり、その多くが切り合い関係をもつことは共通している。しかしその密度においては、市教委調査地点の方が圧倒的に密である。さらに、市教委調査地点では、総柱の掘立柱建物跡が多く検出され、古墳もみつかったのに対し、今回の調査地点では、側柱建物以外には、明確にこれらの遺構と判断できるものがみられなかった。以上が、今回の調査地点と市教委調査地点を概観して、気付かされた点である。

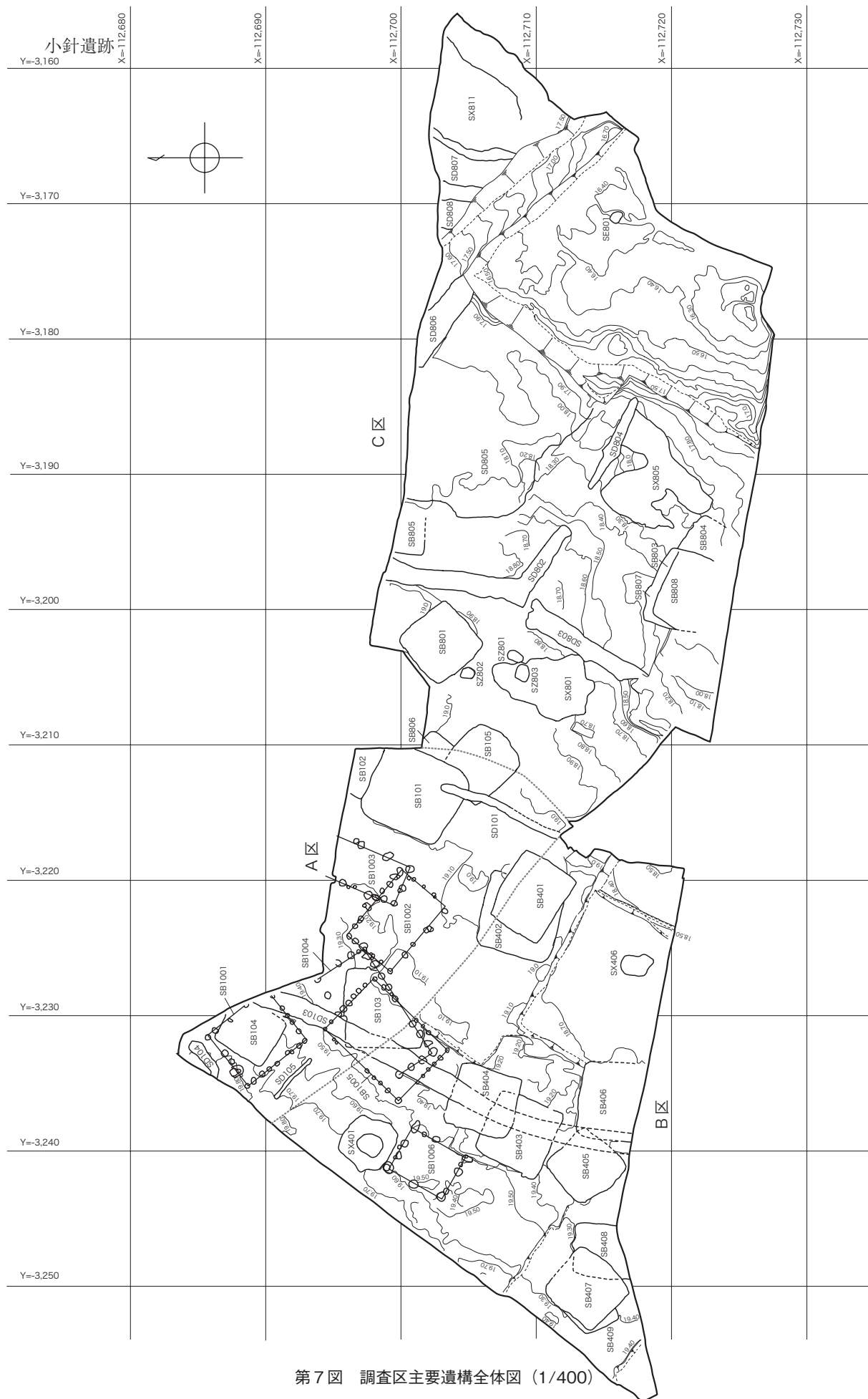
遺構検出面は、概ね18～20m（T.P.）である。この検出面は、基本層序の節でも述べたように、削平された部分が多く含まれていた。調査は、時期の異なる遺構を同一の面で検出する結果となり、時期別の生活面を土層からは見出し得なかった。

第2項 縄文時代の遺構

今回の調査地点で、縄文時代の遺物を伴う遺構は、土坑2基のみである。その他に古墳時代の竪穴住居から、混入品としてわずかに土器片が含まれていた程度であった。したがって、この地点における縄文時代の遺構は、かつて存在したとしてもその後の削平行為などによって滅失する程度の深さで、遺物の混入状態からみても密度は薄かったように思われる。

・土坑

S K 599 A区南東隅に位置する。平面形態は不整な楕円形を呈するものと思われ、検出高は18.45mを測り、長径0.65m、残存短径0.4m、深さ0.1mを測る。埋土は黒褐色シルトを基調とし、南東側はS B 404によって切られている。遺物は、縄文時代のものと考えられる薄手の土器体部細片がわずかに出土しているが、¹⁴C年代測定（AMS法）の暦年代範囲は、B C 1000-910（100%）を示した。



第7図 調査区主要遺構全体図 (1/400)



第8図 A・B区遺構位置図 (1/250)



第9図 C区遺構位置図 (1/250)

S K 696 B区南端に位置する。平面形態は不整円形を呈し、検出高は19.3mを測り、直径0.64m、深さ0.76mを測る。埋土は褐色シルトを基調とし、S B 405に切られている。遺物は、縄文時代後期と思われる深鉢片が出土している。

第3項 古代から中世の遺構

・ 竪穴住居

S B 101 A区東側に位置する。平面形態は方形を呈し、検出高は19.1mを測る。下端における南北径は6.3m、東西径5.7m、残存する深さは0.25mを測り、上部は削平されたものと思われる。重複関係では、S B 102、S D 102に切られ、S B 108を切っている。平面形における主軸の方向は、N-27°-Eを示す。主柱穴は明確に検出されず、壁溝は東壁側を除いて検出された。カマドと考えられる焼土は、北側壁際のほぼ中央に位置する。埋土は黒褐色シルトを基調とし、遺物は須恵器片等が出土している。

S B 103 A区中央やや西側に位置し、南西隅はB区に入る。平面形態は方形を呈し、検出高は19.3mを測る。下端における南北径は5.7m、東西径5.6m、残存する深さは0.2mを測り、上部は削平されており、南東隅は残っていない。重複関係では、S D 103に切られている。平面形における主軸の方向は、ほぼ正方位を示す。主柱穴はP480、S K 321などにその可能性を見出せるものの明確ではなく、壁溝は検出状況からは認められなかった。カマドと考えられる焼土は、北側壁際のほぼ中央に位置する。埋土は暗褐色シルトを基調とし、遺物は土器甕片等がわずかに出土している。

S B 104 A区北端に位置する。平面形態は方形を呈し、検出高は19.7mを測り、下端における南北径は、4.2m、東西径3.8m、残存する深さは0.1~0.2mを測り、上部はかなり削平されたものと思われる。重複関係では、S D 103、S X 101などに切られている。平面形における主軸の方向は、N-32°-Eを示す。主柱穴は、P 166・167・168・169によって構成されるものと思われる。明確な壁溝は、この遺構では確認できなかった。カマドと考えられる焼土は、北側壁際のやや東寄りに位置する。埋土は黒褐色シルトを基調とし、遺物は須恵器片、土器片等が出土している。

S B 401 B区東側のA区との境に位置する。平面形態は長方形を呈し、長軸は東西方向に設けられ、検出高は19.0mを測る。下端における南北径は4.4m、東西径5.5m、残存する深さは0.15mを測り、上部は削平されたものと思われる。重複関係では、S B 402を切っている。平面形における主軸の方向は、N-57°-Wを示す。明確な壁溝、カマドと考えられる焼土は認められなかった。埋土は黒褐色シルトを基調とし、遺物は、土器甕、須恵器坏坏身、坏蓋、高坏等の破片が出土している。¹⁴C年代測定（AMS法）の暦年代範囲は、床面から採取した炭化物では、A D 645-690（100%）を示した。

S B 402 B区東側のA区との境に位置する。平面形態は方形を呈し、検出高は19.15mを測る。下端における南北径は5.6m、東西径5.9m、残存する深さは0.18mを測り、上部は削平されたものと思われる。重複関係では、S B 401に切られている。平面形における主軸の方向は、N-14°-Eを示す。主柱穴は、壁溝はする。カマドと考えられる焼土は、北側壁際のほぼ中央に位置する。埋土は暗褐色シルトを基調とし、遺物は須恵器高坏、土器甕の破片がわずかに出土している。¹⁴C年代測定（AMS法）の暦年代範囲は、カマドから採取した炭化物では、A D 595-640（67.2%）を示した。

S B 403 B区中央やや西側に位置する。平面形態は方形を呈し、検出高は19.4mを測る。下端にお

小針遺跡

ける南北径は5.0m、東西径5.0m、残存する深さは0.3mを測り、上部は削平されたものと思われる。重複関係では、S B 404、S D 103に切られている。平面形における主軸の方向は、N - 24° - Eを示す。主柱穴はP 465・466・495などによって構成される可能性があり、壁溝は南東隅を除いて全周する。カマドと考えられる焼土は、S B 404によって切られているのか、重複しない部分では認められない。埋土は暗褐色シルトを基調とし、遺物は須恵器坏身・埴等の破片が出土している。¹⁴C年代測定（AMS法）の暦年代範囲は、カマドから採取した炭化物では、A D 615-660（95.5%）を示した。

S B 404 B区中央やや西側に位置する。平面形態は方形を呈し、検出高は19.5mを測る。下端における南北径は4.8m、東西径4.6m、残存する深さは0.28mを測り、上部は削平されたものと思われる。重複関係では、S B 403を切っており、S D 103に切られている。平面形における主軸の方向は、N - 15° - Eを示す。主柱穴はS K 600・604・606・608などによって構成される可能性があり、壁溝は全周する。カマドと考えられる焼土は、S D 103によって切られているのか認められない。埋土は黒褐色シルトを基調とし、遺物は須恵器坏身・蓋等の破片とともに、縄文晩期と考えられる深鉢片が混じっていた。

S B 405 B区南側に位置する。平面形態は方形を呈し、検出高は19.35mを測る。下端における南北径は4.0m、東西径4.1m、残存する深さは0.35mを測り、上部は削平されたものと思われる。重複関係では、S B 406・S D 103に切られている。平面形における主軸の方向は、N - 42° - Wを示す。主柱穴はS K 613・615・619・681などによって構成される可能性があり、壁溝は全周する。カマドと考えられる焼土は、北西側壁際のほぼ中央に位置する。埋土は暗褐色シルトを基調とし、遺物は須恵器坏蓋、土器把手付鍋等の破片がわずかに出土している。¹⁴C年代測定（AMS法）の暦年代範囲は、カマドから採取した炭化物では、A D 560-620（85.9%）およびA D 600-655（100%）、A D 595-650（100%）を示した。

S B 406 B区中央南側に位置する。平面形態は方形を呈するものと思われ、検出高は19.2mを測る。下端における東西径はおよそ5.5m程と思われ、残存する深さは0.1mを測り、上部は大部分が削平され、南東側は残っていない。重複関係では、S D 103に切られ、S B 405を切っている。平面形における主軸の方向は、N - 7° - Eを示す。主柱穴はS K 648・650などによって構成される可能性があり、壁溝は残存部内には全て巡る。カマドと考えられる焼土は認められなかった。埋土は暗褐色シルトを基調とし、遺物はわずかに須恵器埴等が出土している。¹⁴C年代測定（AMS法）の暦年代範囲は、カマドから採取した炭化物では、A D 595-650（92.9%）を示した。

S B 407 B区西端に位置する。平面形態は方形を呈し、検出高は19.4mを測る。下端における南北径は4.8m、東西径4.6m、残存する深さは0.2mを測り、上部は削平されたものと思われる。重複関係では、S B 408・409を切っている。平面形における主軸の方向は、N - 41° - Eを示す。主柱穴はS K 627・636・637などによって構成される可能性があり、明確な壁溝は認められない。カマドと考えられる焼土は、北東側壁際のほぼ中央に位置する。埋土は暗褐色シルトを基調とし、遺物は須恵器坏身・蓋、高坏、土器甕の破片が出土している。¹⁴C年代測定（AMS法）の暦年代範囲は、カマドから採取した炭化物では、A D 535-615（100%）を示した。

S B 408 A区西端に位置する。平面形態は長方形を呈し、検出高は19.3mを測る。下端における東

西径は3.8m、残存する深さは0.28mを測り、上部は削平されたものと思われる。重複関係においては、S B 407に切られている。平面形における主軸の方向は、N - 3° - Eを示す。明確な主柱穴、壁溝は認められない。カマドと考えられる焼土は、北側壁際のほぼ中央に位置する。埋土は暗褐色シルトを基調とし、遺物はわずかに土器甕片等が出土している。¹⁴C年代測定（AMS法）の暦年代範囲は、カマドから採取した炭化物では、A D 560-640（100%）を示した。

S B 801 C区北西隅に位置する。平面形態は方形を呈し、検出高は19.0mを測る。下端における南北径は4.7m、東西径4.6m、残存する深さは0.34mを測り、比較的残りは良いものの上部は削平されたものと思われる。重複関係では、S B 802を切っている。平面形における主軸の方向は、N - 38° - Wを示す。主柱穴はP 902・903・904・905によって構成されるものと思われ、壁溝は全周する。カマドと考えられる焼土は、北西側壁際のほぼ中央に位置する。埋土は黒褐色シルトを基調とし、遺物は須恵器坏蓋、坏等の破片が出土している。¹⁴C年代測定（AMS法）の暦年代範囲は、カマドから採取した炭化物では、A D 645-690（85.7%）を示した。

S B 807 C区南側に位置する。平面形態は方形を呈するものと思われ、検出高は18.4mを測る。下端における東西径は5.8m、残存する深さは0.34mを測り、上部および南側は後世の整地行為によって削平されたものと思われる。重複関係では、S B 804・808を切っている。平面形における主軸の方向は、N - 18° - Eを示す。主柱穴は検出されず、壁溝は北側残存部では全て巡る。カマドと考えられる焼土は、北側壁際のほぼ中央に位置する。埋土は暗褐色シルトを基調とし、遺物は土器の細片がわずかに含まれていた。

・掘立柱建物

S B 1001 A区北西隅に位置する。平面形態が円・楕円・不整円形を呈する小規模な掘り込みが、「口」の字状に並ぶ。検出高は19.5～19.8mを測る。直径は0.3～0.5mといずれもS B 1003・1004・1006と比較して小規模で、検出高からの深さは、0.2～0.7mを測る。埋土は黒褐色シルトを基調とするものが多く、土層断面の状況ではS K 260・261・265・267・288・289などに柱痕が認められた。列の配置から想定した主軸の方向は、N - 39° - Wを示す。規模は梁間4.8m、桁行5.5mで、柱穴と思われる掘り込み間の間隔は0.7～1.2mを測り、側柱建物である。推定面積は26.4m²である。土器、須恵器、灰釉陶器細片がわずかに含まれているもの以外は、各掘り込みに遺物は含まれていなかった。したがって掘削時期を確定するまでには至らなかったが、細片の中には平安時代に属する灰釉陶器と思われるものが出土しているため、この時期以前にさかのぼる可能性は低いものと思われる。1.5～2m西側には、近似する方向性を持つS D 106が検出されているが、この溝状遺構は、基底部にほぼ等間隔で小穴が確認され、塀など上部構造の基礎であった可能性も考えられ、この建物との関連性も否定できない。

S B 1002 A区ほぼ中央に位置する。平面形態が円・楕円・不整円形を呈する小規模な掘り込みが、「口」の字状に並ぶ。検出高は19.1～19.3mを測る。直径は0.2～0.55mといずれもS B 1003・1004・1006と比較して小規模で、検出高からの深さは、0.2～0.7mを測る。埋土は暗褐色シルトを基調とするものが多く、土層断面の状況では柱痕等は認められなかった。列の配置から想定した主軸の方向は、N - 50° - Wを示す。規模は梁間4.2m、桁行6.4mで、柱穴と思われる掘り込み間の間隔は1.0～2.0mを測り、

小針遺跡

側柱建物である。推定面積は26.88㎡である。土器、須恵器、灰釉陶器細片がわずかに含まれているものの以外は、各掘り込みに遺物は含まれていなかった。したがって掘削時期を確定するまでには至らなかったが、細片の中には平安時代に属する灰釉陶器と思われるものが出土しているため、この時期以前にさかのぼる可能性は低いものと思われる。重複関係では、北西辺のS K 227がS K 226を切っている。このS K 226は、規模の大きい掘り込みによって構成されるS B 1004の柱穴と思われる。S K 227は、S B 1002を構成する柱穴の平均的規模であるため、新旧関係においてS B 1002はS B 1004より新しいものと判断した。

S B 1003 A区中央やや東側に位置する。平面形態が円・楕円・不整円形を呈する掘り込みが、「コ」の字状に並び、開口部は調査区外（北側）に続く。検出高は19.0～19.2mを測る。直径は0.5～0.8mいずれもS B 1001・1002・1005と比較して大きく、検出高からの深さは、0.3～0.6mを測る。埋土は黒褐色・暗褐色シルトを基調とするものが多く、土層断面の状況ではS K 129・200などに柱痕が認められた。列の配置から想定した主軸の方向は、N-24°-Eを示す。規模は梁間3.1mで、柱穴と思われる掘り込み間の間隔は、1.5～2.1mを測り、側柱建物と思われる。土器、須恵器甕片がわずかに含まれているものの以外は、各掘り込みに遺物は含まれていなかった。したがって掘削時期を確定するまでには至らなかった。推定床面の南側は、重複する掘り込みは見られないものの、S B 1002の推定床面と重なる。

S B 1004 A区中央やや西側からB区北側にかけて位置する。平面形態が円・楕円・不整円形を呈する掘り込みが、「コ」の字状に並ぶ。検出高は19.4mを測る。直径は0.9～1.3mいずれもS B 1001・1002・1005と比較して大きく、検出高からの深さは、0.35～0.8mを測る。埋土は黒褐色シルトを基調とするものが多く、土層断面の状況ではS K 510・512に柱痕が認められた。列の配置から想定した主軸の方向は、N-56°-Eを示す。規模は梁間4.2m、桁行9.2mで、柱穴と思われる掘り込み間の間隔は、0.8～2.1mを測る側柱建物と思われる。推定面積は38.64㎡である。須恵器坏蓋片がわずかに含まれているものの以外は、各掘り込みに遺物は含まれていなかった。したがって掘削時期を確定するまでには至らなかったが、須恵器坏蓋片は7世紀に属するものが出土している。重複関係では、S D 103に切られ、南東隅のS K 226が、S K 227に切られている。このS K 227は、規模の小さい掘り込みによって構成されるS B 1002の柱穴と思われる。S K 226は、S B 1002を構成する柱穴の平均的規模であるため、新旧関係においてS B 1004はS B 1002より古いものと判断した。さらに、推定床面の西側は、重複する掘り込みは明確ではないものの、S B 1005の推定床面と重なる。

S B 1005 A区中央やや西側からB区北側にかけて位置する。平面形態が円・楕円・不整円形を呈する小規模な掘り込みが、「ロ」の字状に並ぶ。検出高は19.3～19.5mを測る。直径は0.3～0.6mいずれもS B 1003・1004・1006と比較して小規模で、検出高からの深さは、0.25～0.7mを測る。埋土は暗褐色・黒褐色シルトを基調とするものが多く、土層断面の状況では柱痕等は認められなかった。列の配置から想定した主軸の方向は、N-44°-Eを示す。規模は梁間5.3m、桁行7.6mで、柱穴と思われる掘り込み間の間隔は0.6～1.9mを測り、側柱建物である。推定面積は48.23㎡である。土器、須恵器細片がわずかに含まれているものの以外は、各掘り込みに遺物は含まれていなかった。推定床面の東側は、重複する掘り込みは明確ではないものの、S B 1004の推定床面と重なる。

S B 1006 B区西側に位置する。平面形態が円・楕円・不整円形を呈する掘り込みが、「ロ」の字状

に並ぶ。検出高は19.5～19.7mを測る。直径は0.6～0.9mといずれもS B 1001・1002・1005と比較して大きく、検出高からの深さは、0.4～0.8mを測る。埋土は暗褐色・黒褐色シルトを基調とするものが多く、土層断面の状況ではS K 436に柱痕が認められた。列の配置から想定した主軸の方向は、N - 29° - Wを示す。規模は梁間3.5m、桁行4.5mで、柱穴と思われる掘り込み間の間隔は1.4～2.3mを測る。推定面積は15.75m²である。土器、須恵器細片がわずかに含まれているもの以外は、各掘り込みに遺物は含まれていなかった。したがって掘削時期を確定するまでには至らなかった。0.5m北東側には、近似する方向性を持つS X 401が検出されているが、この周溝状遺構は、溝基底部、周内にやや不整ながら意図的な配置がうかがえる小穴が確認され、なんらかの上部構造が存在した可能性も考えられ、この建物との関連性も否定できない。

・土坑

S K 552 A区南東隅に位置する。平面形態は楕円形を呈するものと思われ、検出高は18.45mを測り、残存長径1.7m、短径1.2m、深さ0.2mを測る。埋土は暗褐色シルトを基調とし、西側は整地による削平によって残っていない。遺物は、土器、須恵器細片がわずかに出土している。

S K 801 C区南西隅に位置する。平面形態は楕円形を呈し、検出高は18.9mを測り、長径0.55m、短径0.4m、深さ0.4mを測る。埋土は黒褐色、暗褐色シルトを基調とし、遺物は、土器、須恵器、陶器細片がわずかに出土している。

S K 827 C区西側に位置する。平面形態は楕円形を呈し、検出高は18.9mを測り、長径0.7m、短径0.5m、深さ0.55mを測る。埋土は暗褐色シルトを基調とし、南西隅は、S K 826によって切られている。C区の中では、周辺の土坑と比較して掘削深度が深く、明確な目的を持って掘り込まれたものと思われるが、遺物は自然礫がわずかに出土しているのみである。

・溝状遺構

S D 101 A区東側に位置する。南北方向に伸び、断面形態は船底形を呈し、検出高は19.0mを測る。幅は0.6m、検出長9.3m、残存する深さは0.1mを測り、上部は削平されたものと思われる。重複関係では、S B 102に切られ、S B 105・108を切っている。平面形における主軸の方向は、N - 24° - Eを示す。埋土は暗褐色シルトを基調とし、遺物は土器、山茶碗の細片が出土している。

S D 103 A区西側の北端から、B区中央やや西側を南端に向かって貫く。南北方向に伸び、断面形態は船底形を呈し、検出高はA区北端で19.5mを測る。残存幅は最大1.8mで、検出長約30m、残存する深さは0.2mを測り、上部は削平されたものと思われる。重複関係では、S B 103・104・403～406を切っているが、基底部がとどいている程度であり、掘削深度は浅かったものと思われる。平面形における主軸の方向は、N - 27° - Eを示す。埋土は暗褐色シルトを基調とし、遺物は山茶碗が出土している。

S D 105 A区西側に位置する。北西から南東方向に伸びる。断面形態は船底形を呈し、検出高は北西で19.7mを測る。最大幅は0.3m、検出長3.95mで、残存する深さは0.1mを測り、上部は削平されたものと思われる。基底部には、0.7～1.0mの間隔で5基の小穴が確認され、堀など上部構造の基礎であった可能性も考えられる。平面形における主軸の方向は、N - 47° - Wを示す。埋土は暗褐色シルトを

小針遺跡

基調とし、遺物は灰釉陶器の長頸壺が出土している。

・不明遺構

S X 401 B区西側に位置する。平面形態は、南北軸がやや長い不整形形状を呈し、この形状で溝が全周し、「口」の字状に巡る。検出高は19.7mで、検出長は南北3.8m、東西3.6m、溝底部の内側下端間は南北2.4m、東西2.1mを測る。溝の断面形態は船底形を呈し、検出面での最大幅は1.3mを測る。残存する深さは0.25mを測り、上部は削平されたものと思われる。平面形における主軸の方向は、N－32°－Eを示す。埋土は暗褐色シルトを基調とし、遺物は須恵器、灰釉陶器、山茶碗等の細片がわずかに出土しているが、掘削時期を確定するまでには至らなかった。0.5m北東側には、近似する方向性を持つS B 1006が検出されているが、本遺構は、溝底部、周内に意図的な配置がうかがえる小穴が確認され、なんらかの上部構造が存在した可能性も考えられ、この掘立柱建物と並立した施設の可能性も否定できない。

第4項 戦国時代の遺構

・溝状遺構

S D 802 C区西側に位置する。調査区北端から南北方向に伸び、調査区中央付近にて南東方向に向きを変える。断面形態は船底形を呈し、検出高は北端で19.0mを測る。最大幅は1.6m、検出長は北端から南に10.0m、南東に方向を変えて5.8m、残存する深さは0.3mを測り、上部は削平されたものと思われる。重複関係では、S D 809、S K 882・869等に切られ、S X 802・808、S K 1043・1079等を切っている。平面形における主軸の方向は、N－11°－EからN－55°－Wに方向を変える。埋土は暗褐色シルトを基調とし、遺物は土器、山茶碗細片、土器羽釜片等が出土している。

S D 803 C区西側に位置する。南北方向に伸び、南側は整地行為による削平によって残ってない。断面形態は船底形を呈し、検出高は北端で18.8mを測る。最大幅は1.6m、検出長10.2mで、残存する深さは0.3mを測り、上部は削平されたものと思われる。重複関係では、S B 102に切られ、S B 108を切っている。平面形における主軸の方向は、N－33°－Eを示す。埋土はにぶい黄褐色シルトを基調とし、遺物はわずかな須恵器片と共に土器羽釜片が出土している。

S D 807 C区北東隅に位置する。調査区北端から南北方向に伸び、東肩を内側としてゆるやかに弧を描く。南側は大規模な削平によって残ってない。断面形態は船底形を呈し、検出高は北端で18.4mを測る。最大幅は2.3m、検出長5.1mで、残存する深さは0.4mを測り、上部は削平されたものと思われる。西隣にはS D 808が並行する。平面形における西肩の方向は、N－10°－Eを示す。埋土は褐色シルトを基調とし、遺物は陶器皿、土器内耳鍋が出土している。

S D 808 C区北東隅に位置する。南北方向に伸び、南側は大規模な削平によって残ってない。断面形態は船底形を呈し、検出高は北端で18.35mを測る。最大幅は2.25m、検出長2.2mで、残存する深さは0.3mを測り、上部は削平されたものと思われる。東隣にはS D 807が並行する。平面形における主軸の方向は、N－9°－Eを示す。埋土は灰黄色シルトを基調とし、遺物は内耳鍋、羽釜等の土器が出土している。

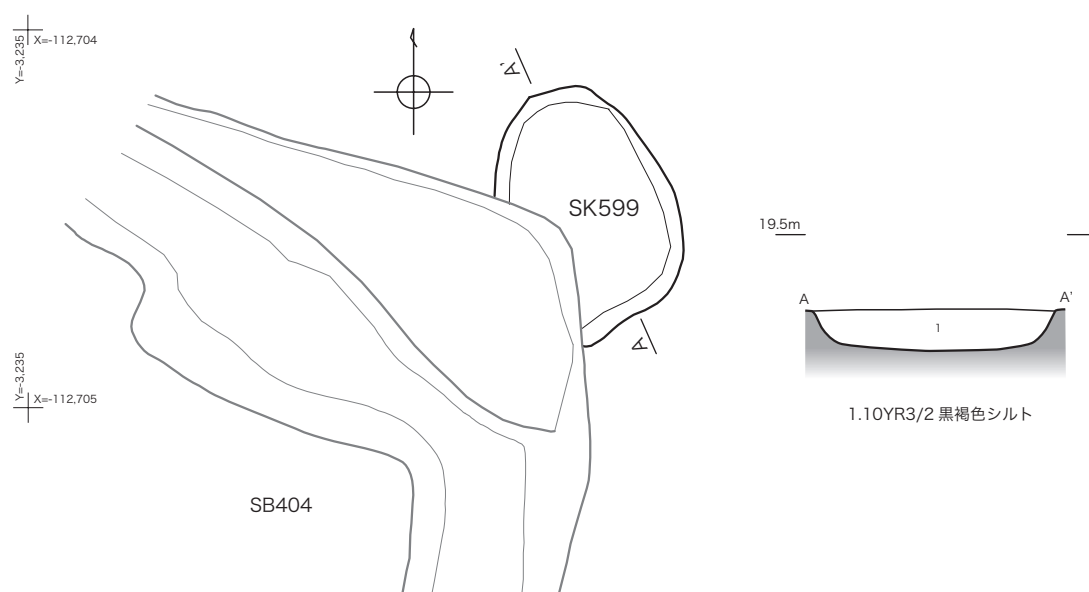
・墓墳

S Z 801 C区西側に位置する。平面形態は楕円形を呈し、検出高は18.8mを測り、長径1.2m、短径0.7m、深さ0.3mを測る。埋土は黒褐色極細粒砂を基調とし、焼土ブロックを多く含み、焼けた人骨の碎片を含む。遺物は摩滅の進んだ土器、陶器細片がわずかに出土している。基底部から南側の壁に向けて被熱痕が顕著で、火葬墓の可能性が考えられる。埋土から採取した炭化物では、 ^{14}C 年代測定（AMS法）の暦年代範囲は、A D 1455-1520（64.0%）を示した。

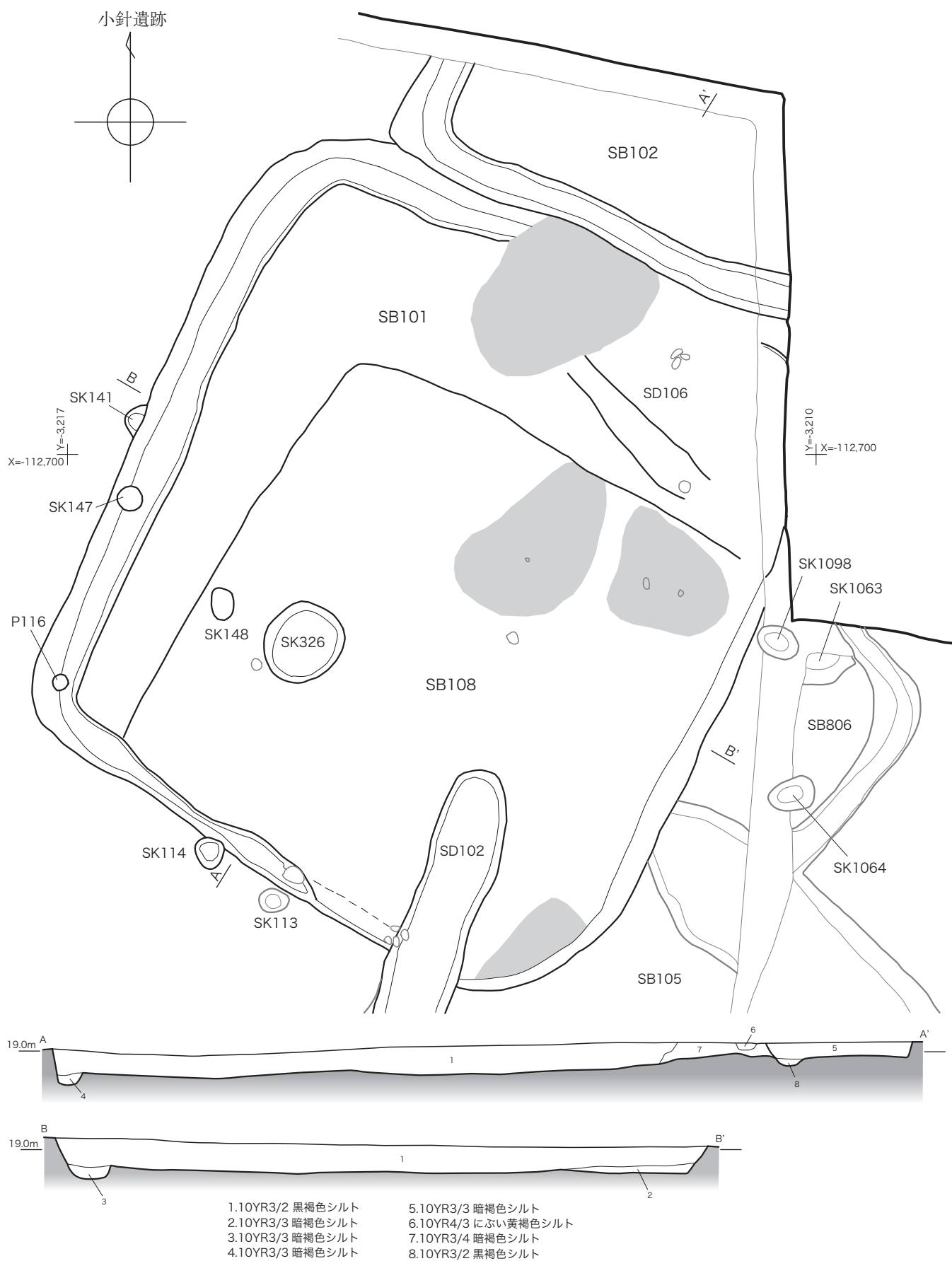
S Z 802 C区西側に位置する。平面形態は不整長方形を呈し、検出高は19.1mを測り、長径1.1m、短径0.8m、深さ0.1mを測る。埋土はオリブ褐色極細粒砂を基調とし、炭化した木片のほかに、わずかに人骨の碎片を含む。遺物は摩滅の進んだ土器、陶器細片がわずかに出土している。本遺構は、S Z 801とは違って被熱痕は認められなかった。埋土から採取した炭化物では、 ^{14}C 年代測定（AMS法）の暦年代範囲は、A D 1560-1630（65.2%）を示した。

・不明遺構

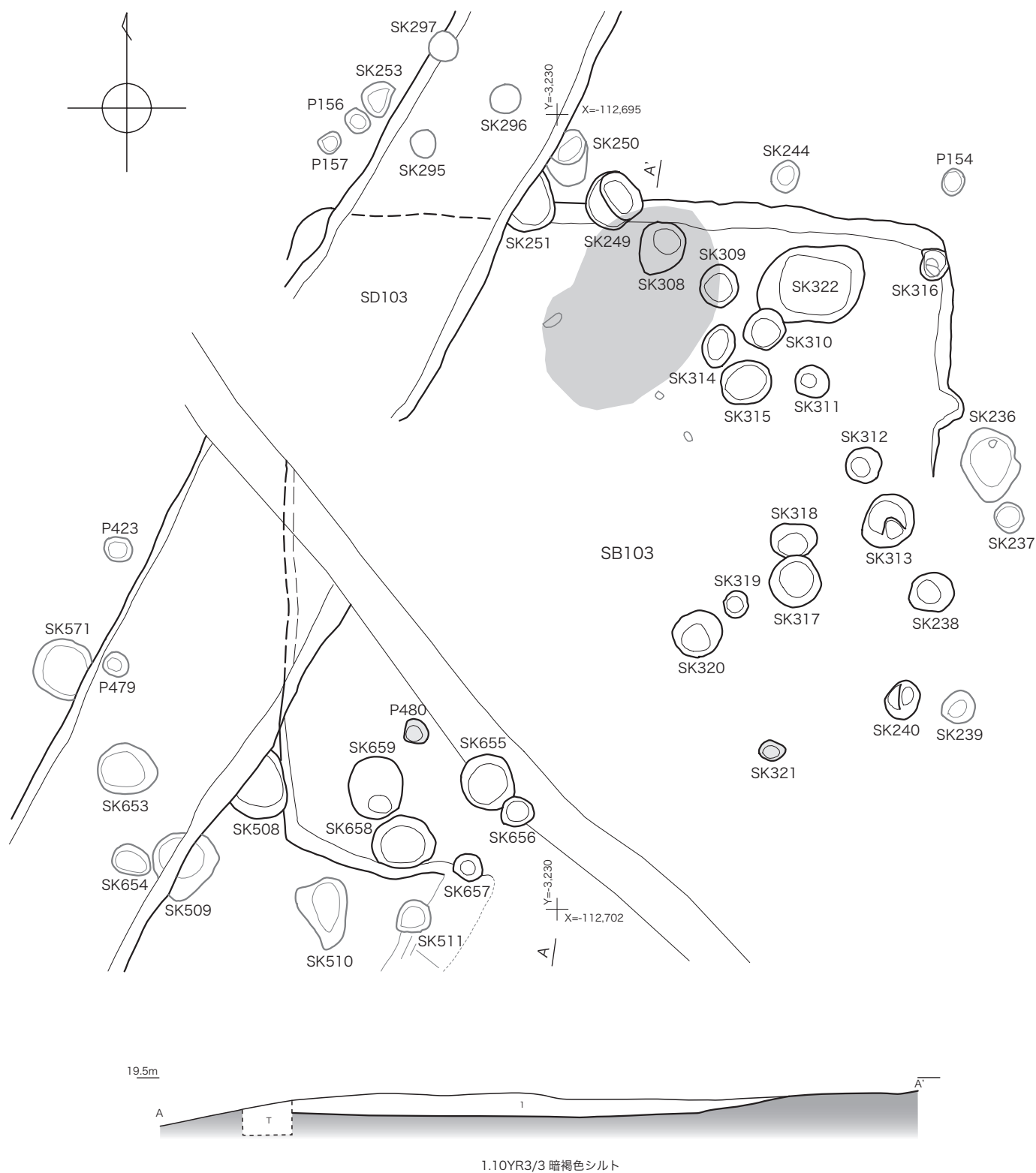
S X 811 C区北東隅に位置する。南北方向に伸びる溝状の遺構で、南側は大規模な削平によって残っていない。断面形態は船底形を呈し、検出高は北端で18.35mを測る。最大幅は4.7m、検出長8.6mで、残存する深さは0.45mを測り、上部は削平されたものと思われる。西隣にはS D 807が並行する。埋土は暗褐色極細粒砂を基調とし、遺物は須恵器、灰釉陶器、中世常滑製品の細片に混じって素焼きの羽釜が出土しているため、戦国期よりさかのぼらない時期の掘削と思われる。



第10図 S K 599平・断面図 (1/20)

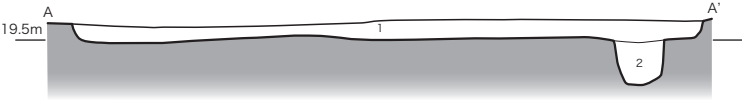
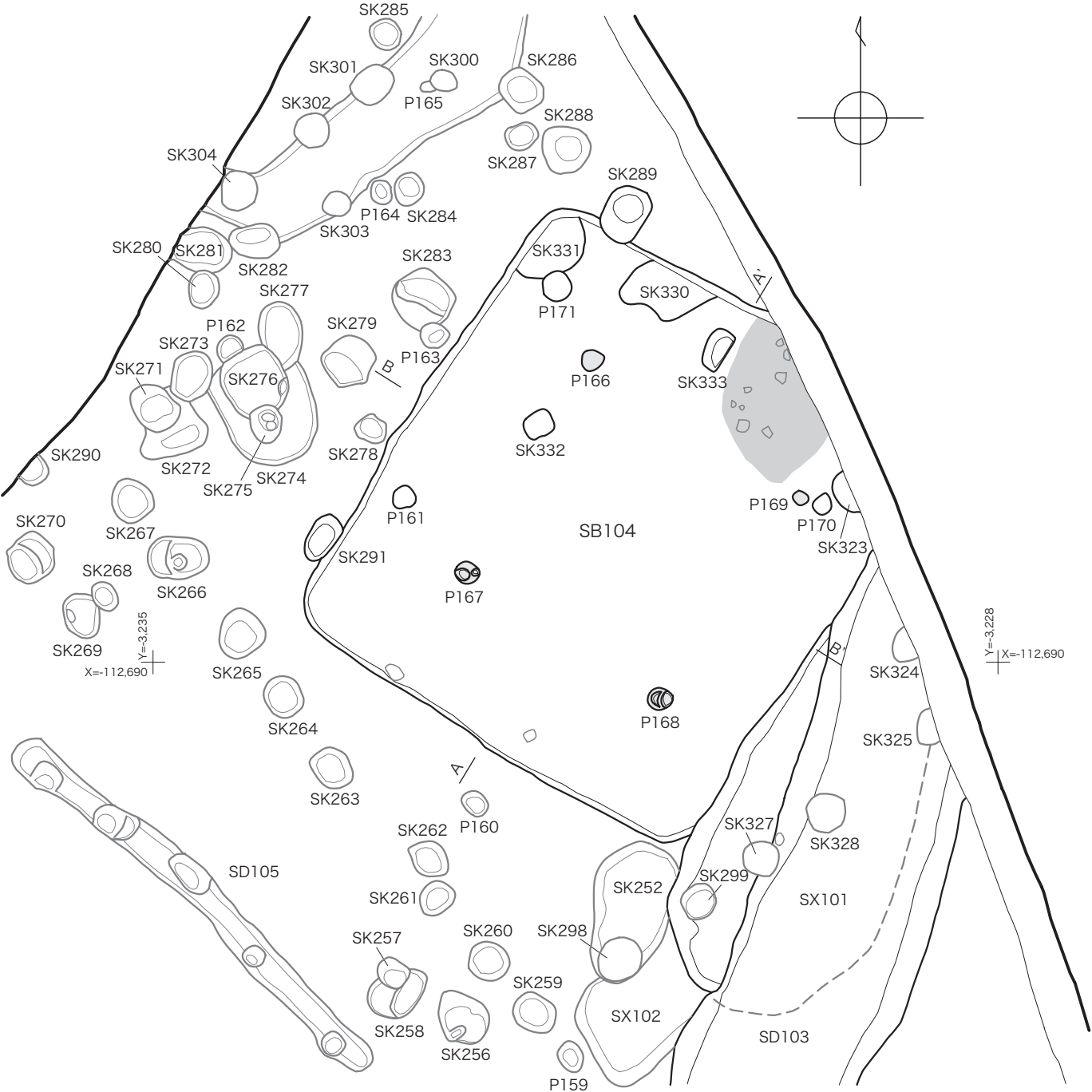


第11図 S B101. 102. 108平・断面図 (1/50)

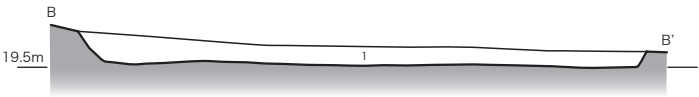


第12図 S B103平・断面図 (1/50)

小針遺跡

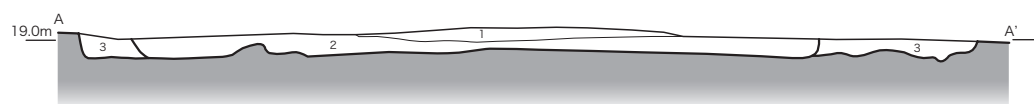
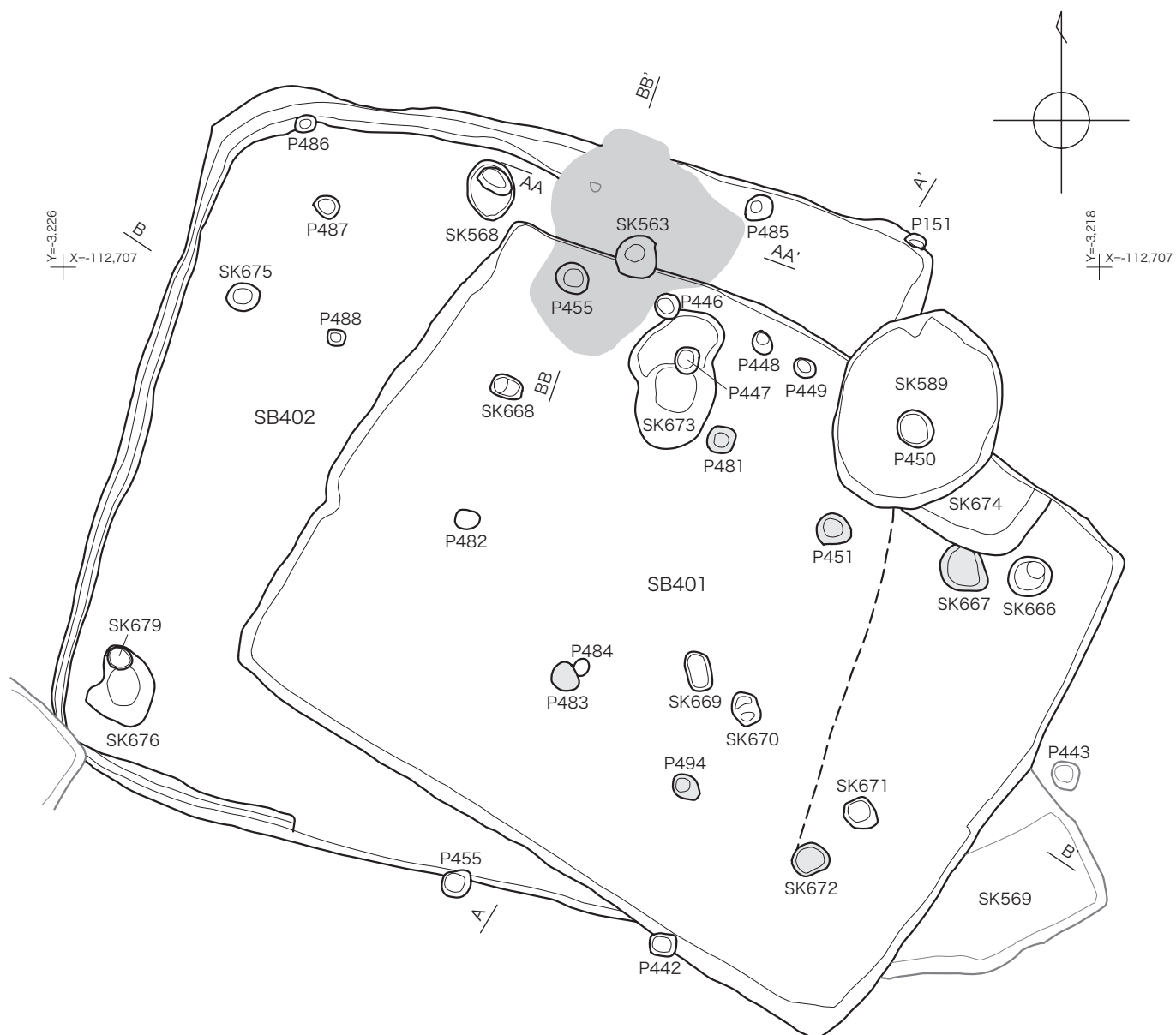


1.10YR3/2 黒褐色シルト
2.10YR3/3 暗褐色シルト

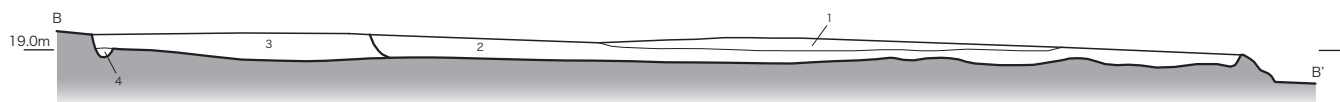


1.10YR3/2 黒褐色シルト

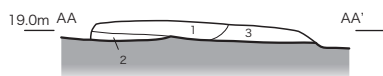
第13図 S B104平・断面図 (1/50)



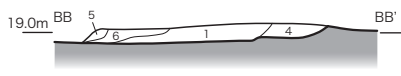
1.10YR3/3 暗褐色シルト 3.10YR3/4 暗褐色シルト
2.10YR2/3 黒褐色シルト 4.10YR4/3 にぶい黄褐色シルト



1.10YR3/3 暗褐色シルト 3.10YR3/4 暗褐色シルト
2.10YR3/2 黒褐色シルト 4.10YR4/3 暗褐色シルト

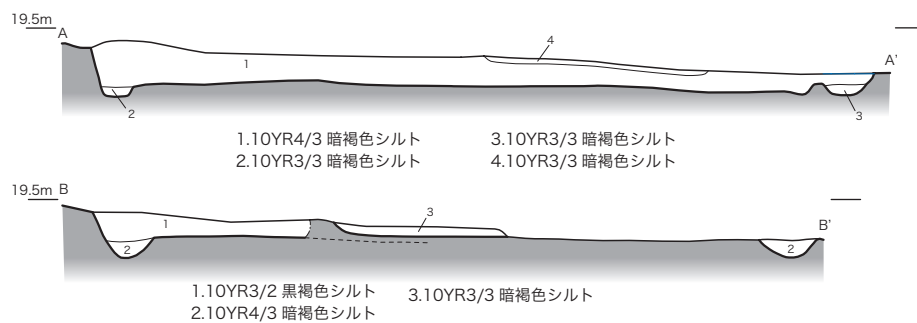
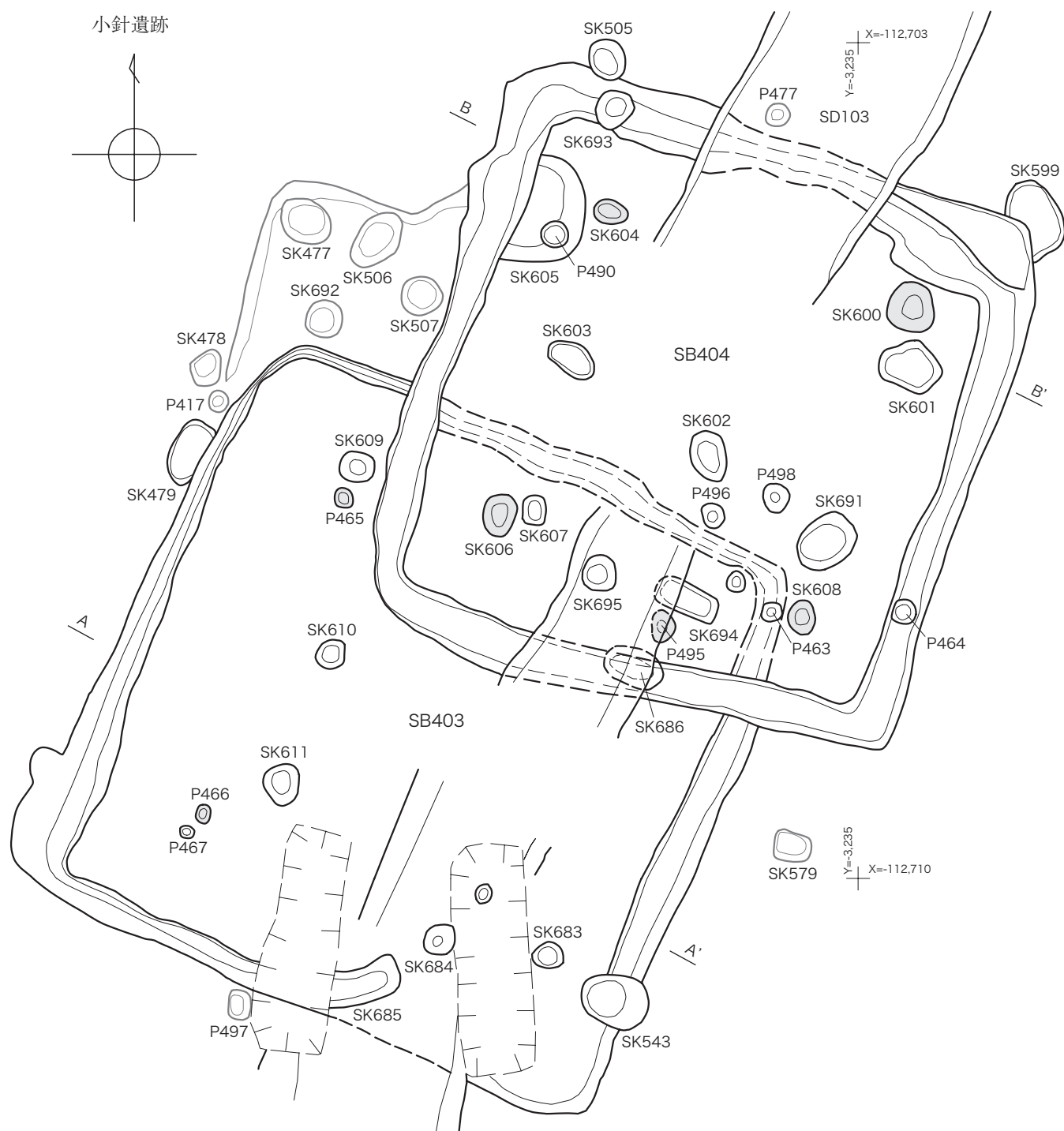


1.10YR3/2 黒褐色シルト
2.10YR3/3 暗褐色シルト

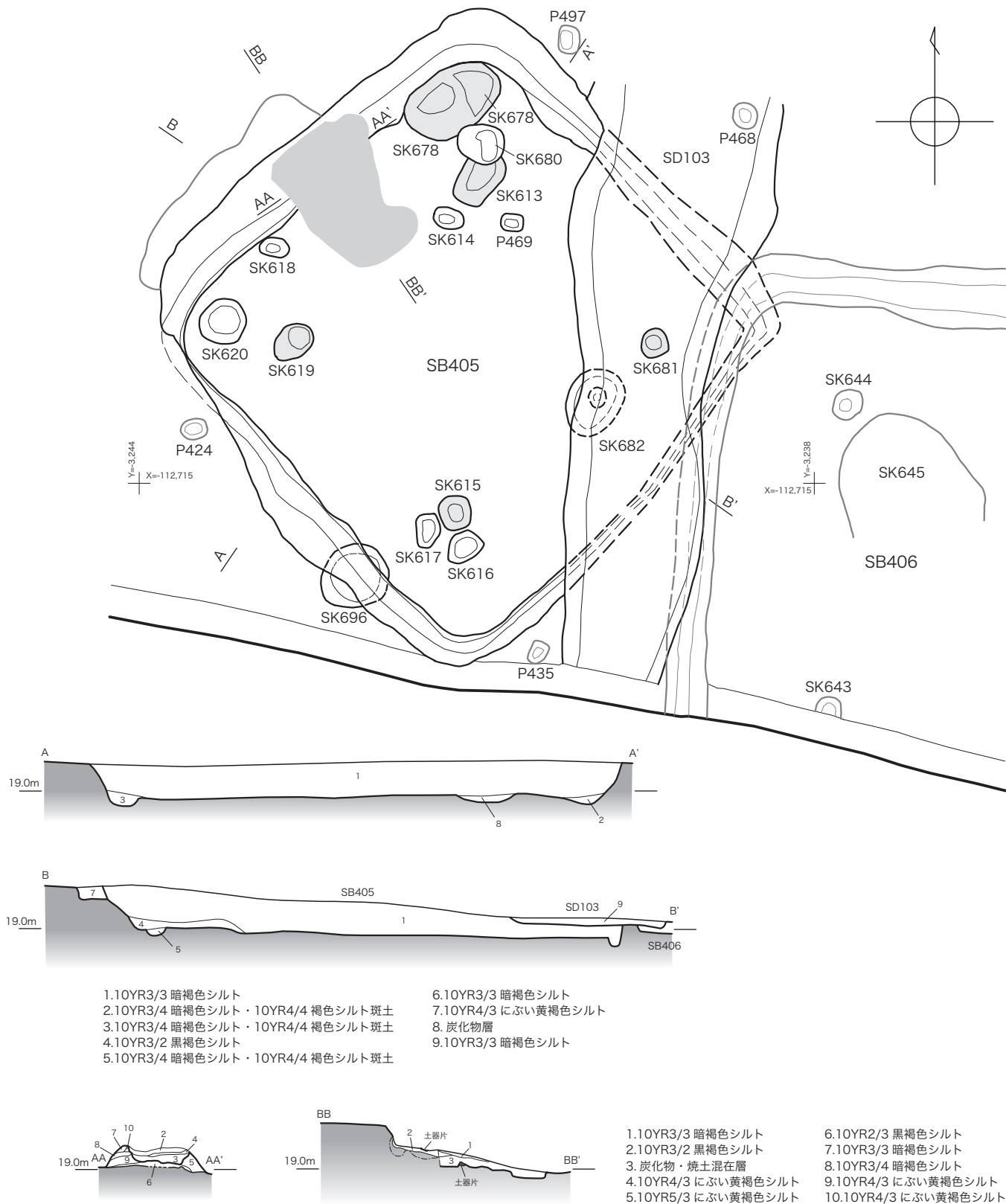


3.10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 5.10YR4/4 褐色シルト
4.10YR2/3 暗褐色シルト 6.10YR3/3 暗褐色シルト

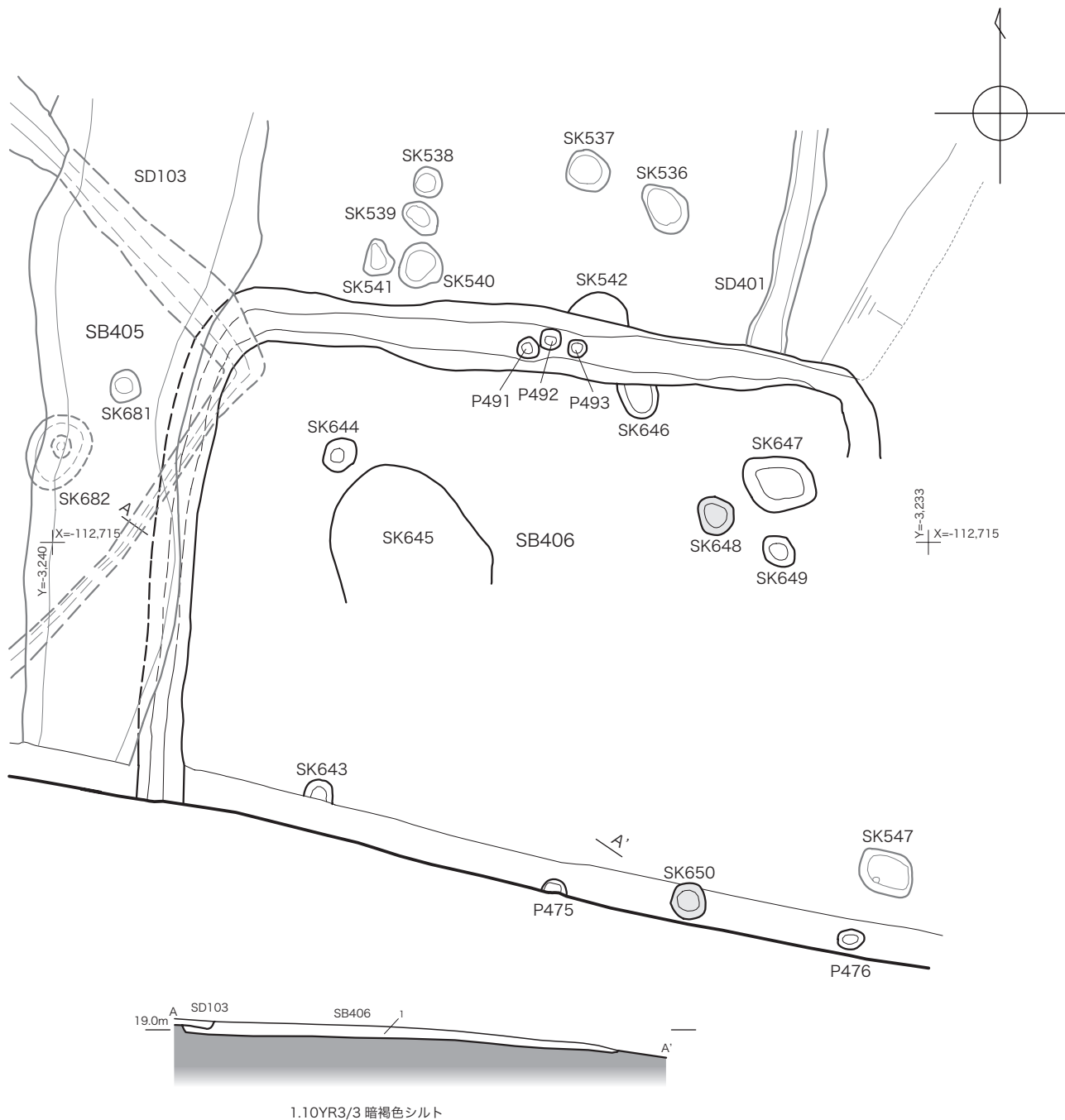
第14図 S B 401. 402平・断面図 (1/50)



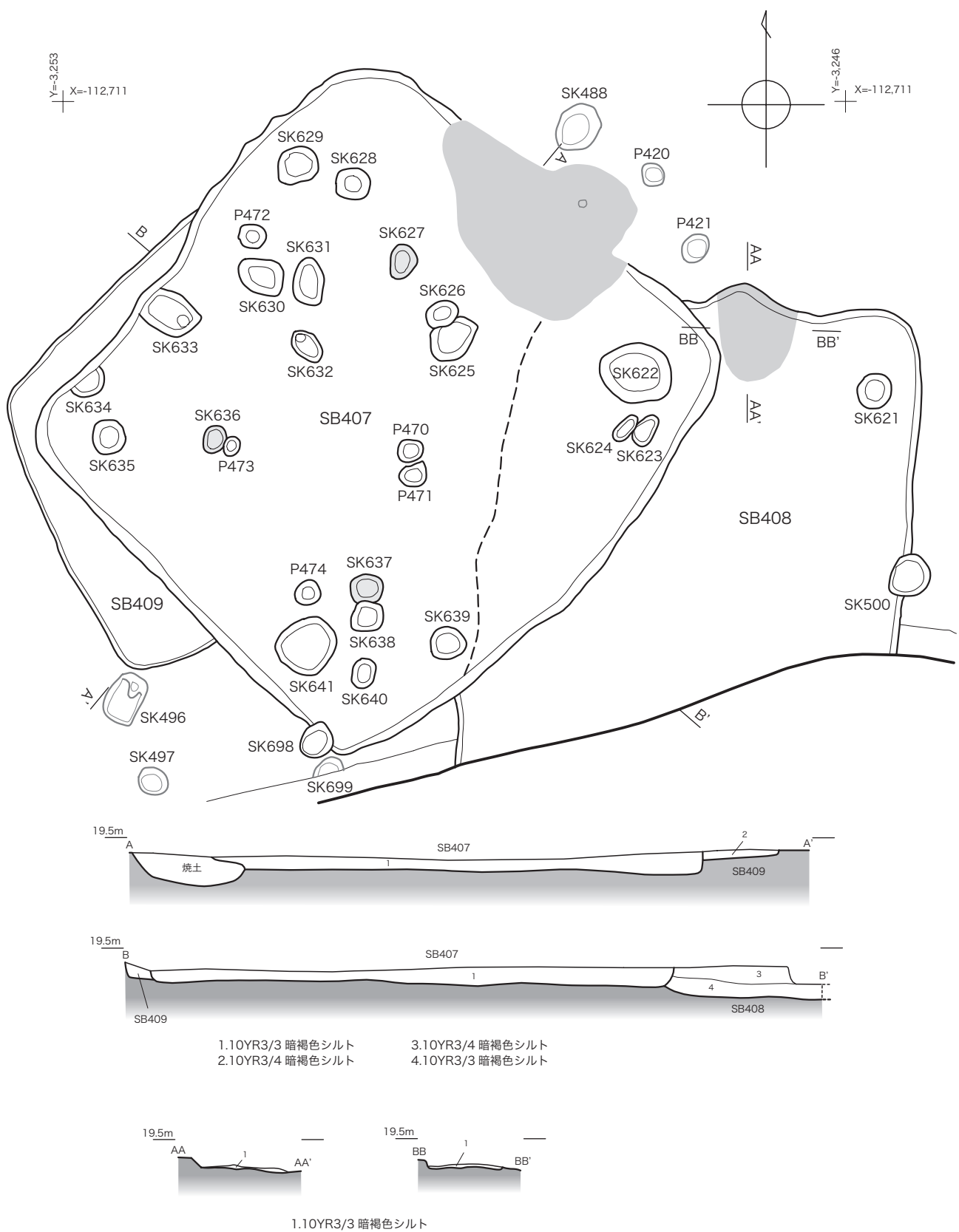
第15図 S B 403. 404平・断面図 (1/50)



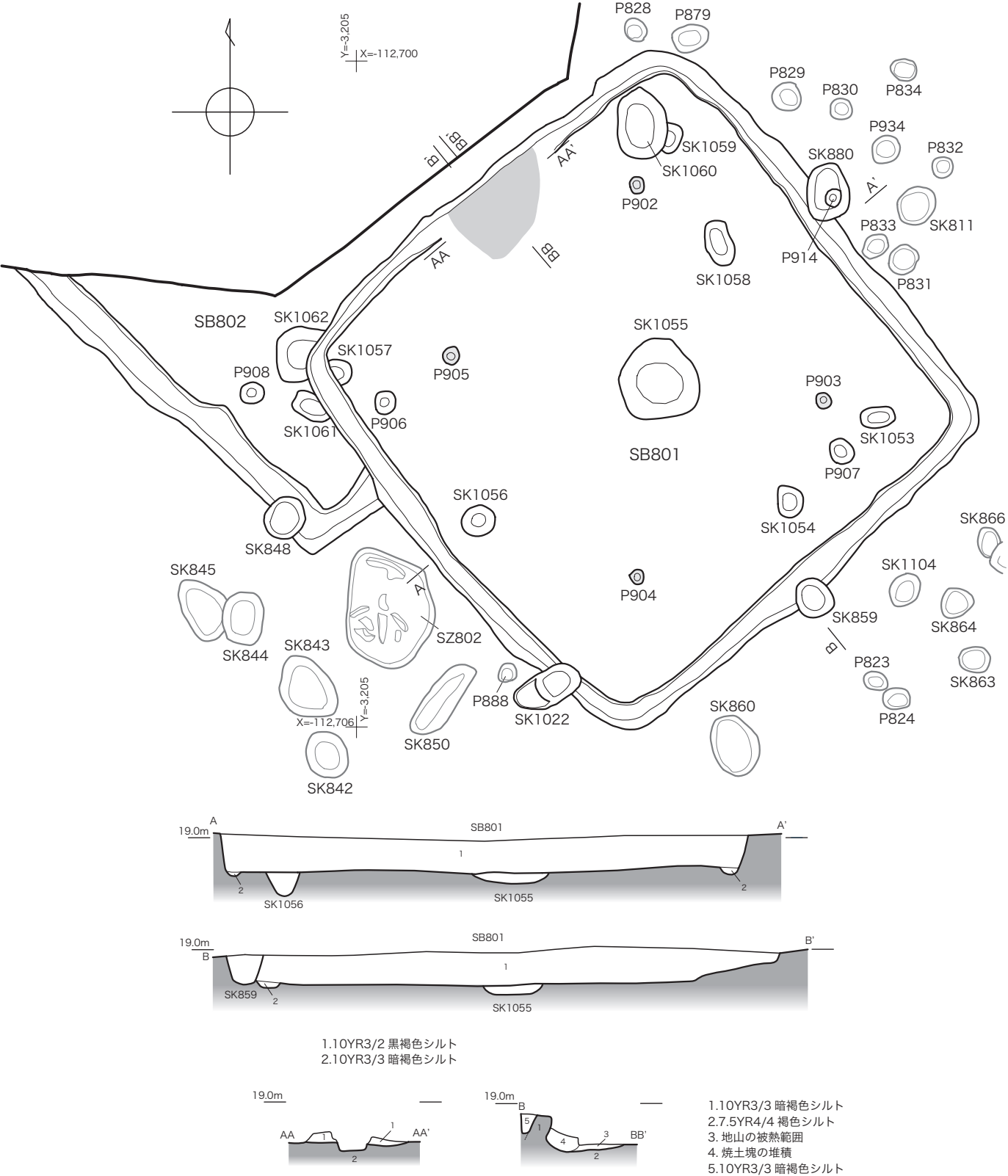
第16図 S B 405平・断面図 (1/50)



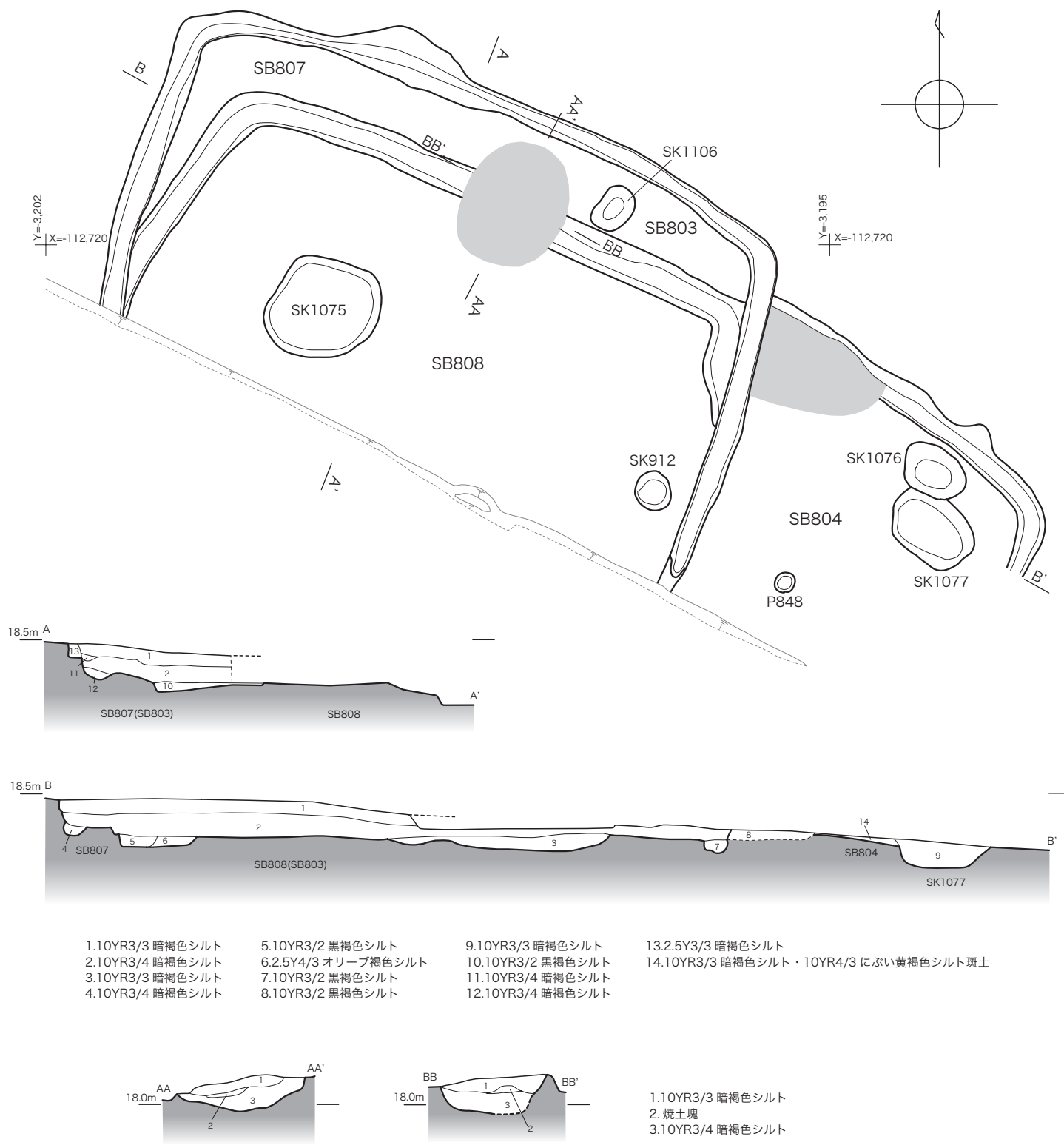
第17図 S B 406平・断面図 (1/50)



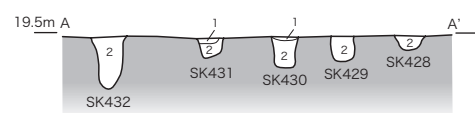
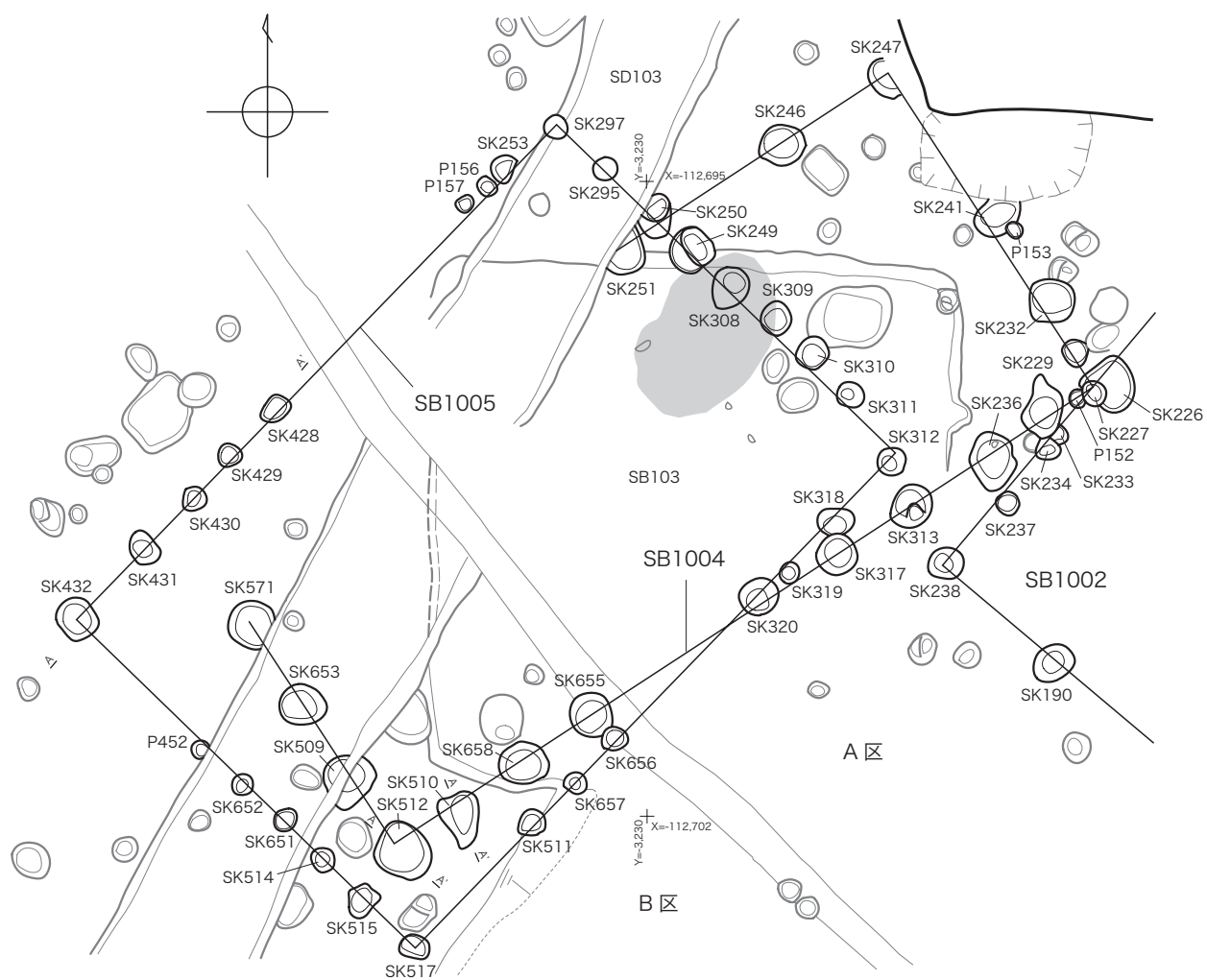
第18図 S B 407. 408. 409平・断面図 (1/50)



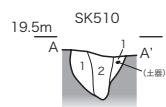
第19図 S B 801. 802平・断面図 (1/50)



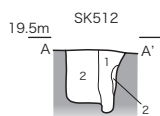
第20図 S B 803. 804. 807. 808平・断面図 (1/50)



1.10YR2/3 黒褐色シルト
2.10YR3/2 黒褐色シルト

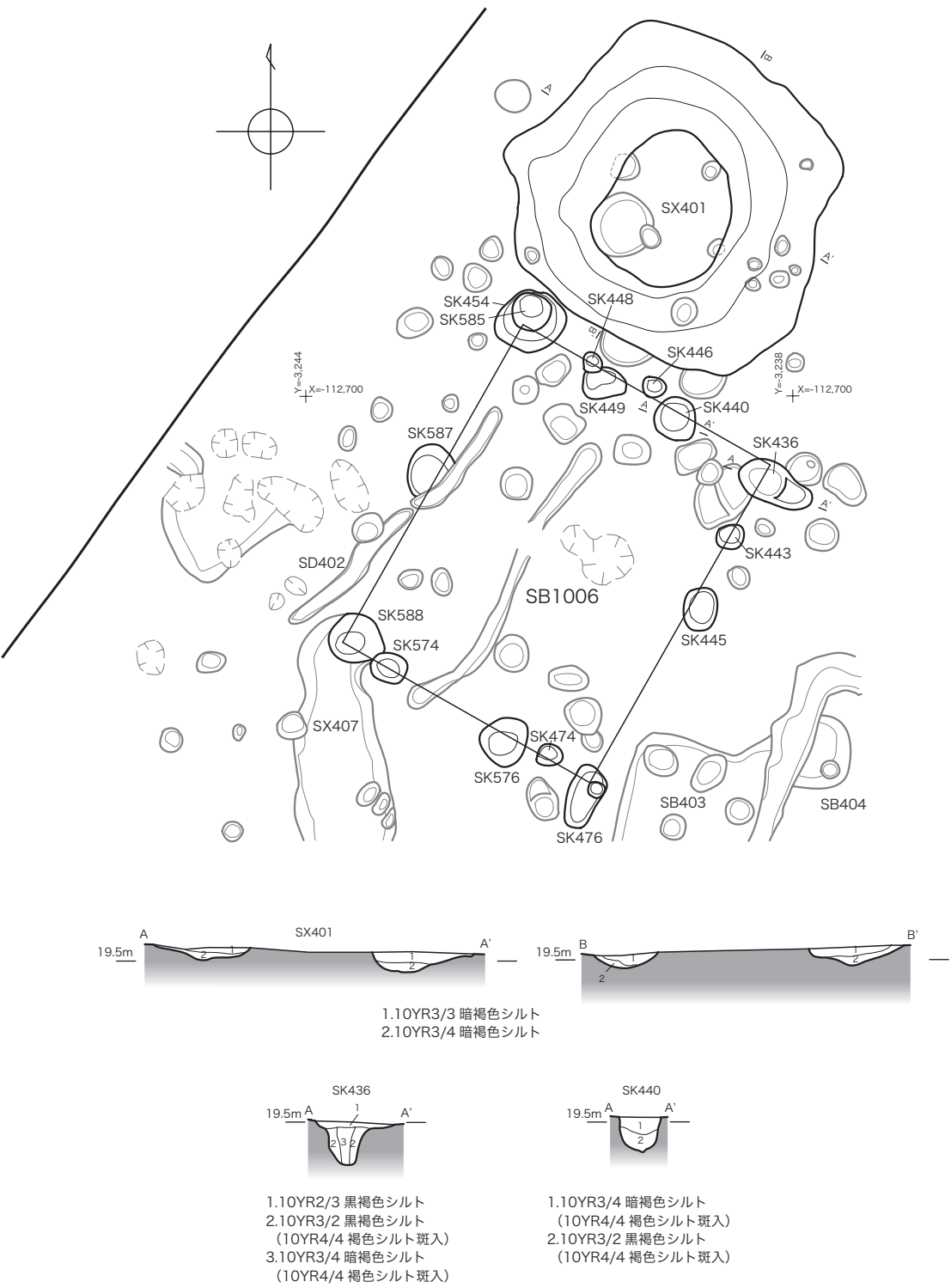


1.10YR2/3 黒褐色シルト
2.10YR3/2 黒褐色シルト

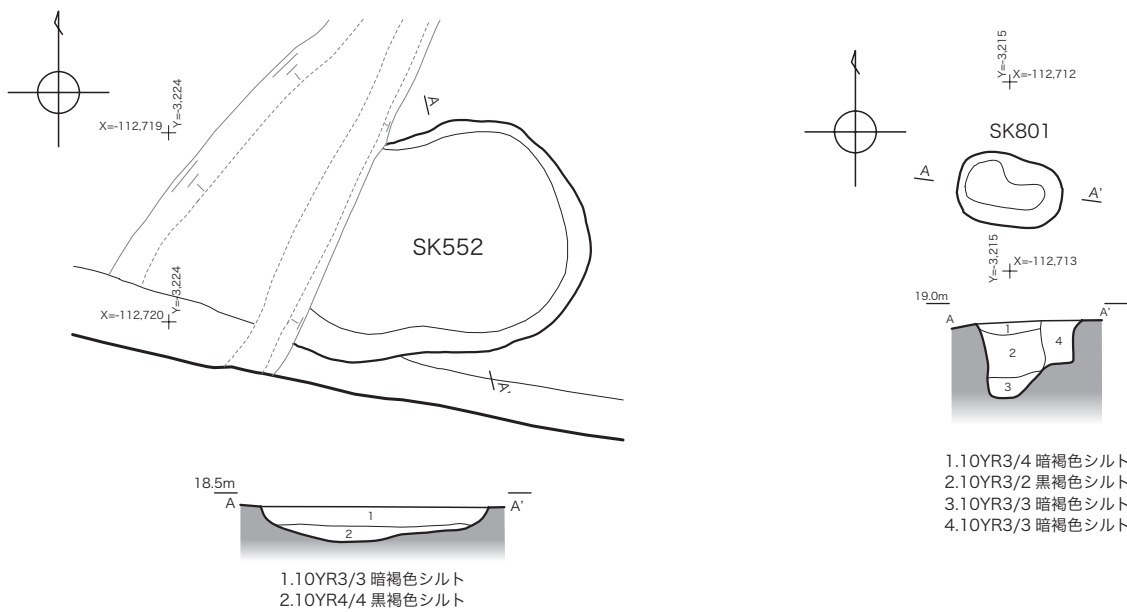


1.10YR3/2 黒褐色シルト
2.10YR2/3 黒褐色シルト・10YR4/4 褐色シルト斑土

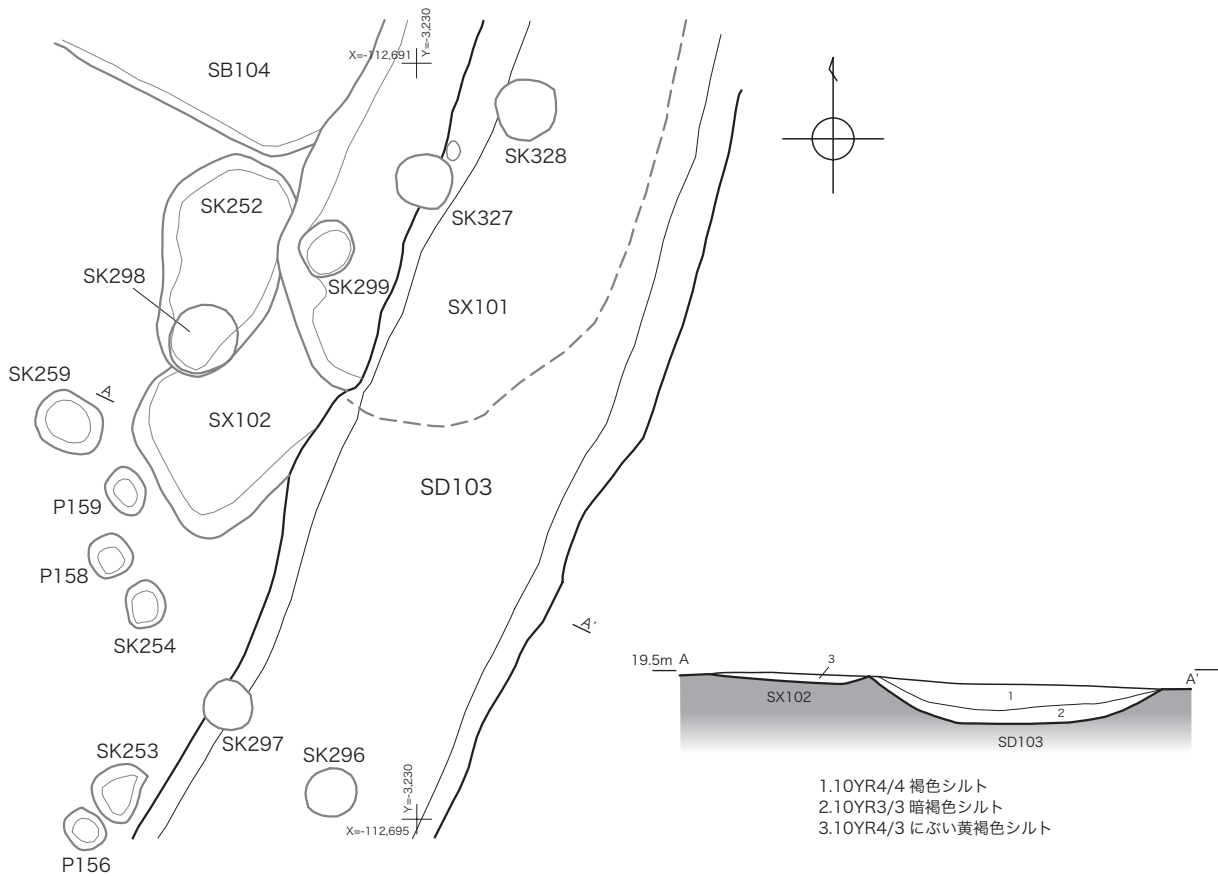
第23図 S B 1004・1005平面図及びS K 510・512断面図 (1/80)



第24図 S B 1006・S X 401平面図及びS K 436・440断面図 (1/80)

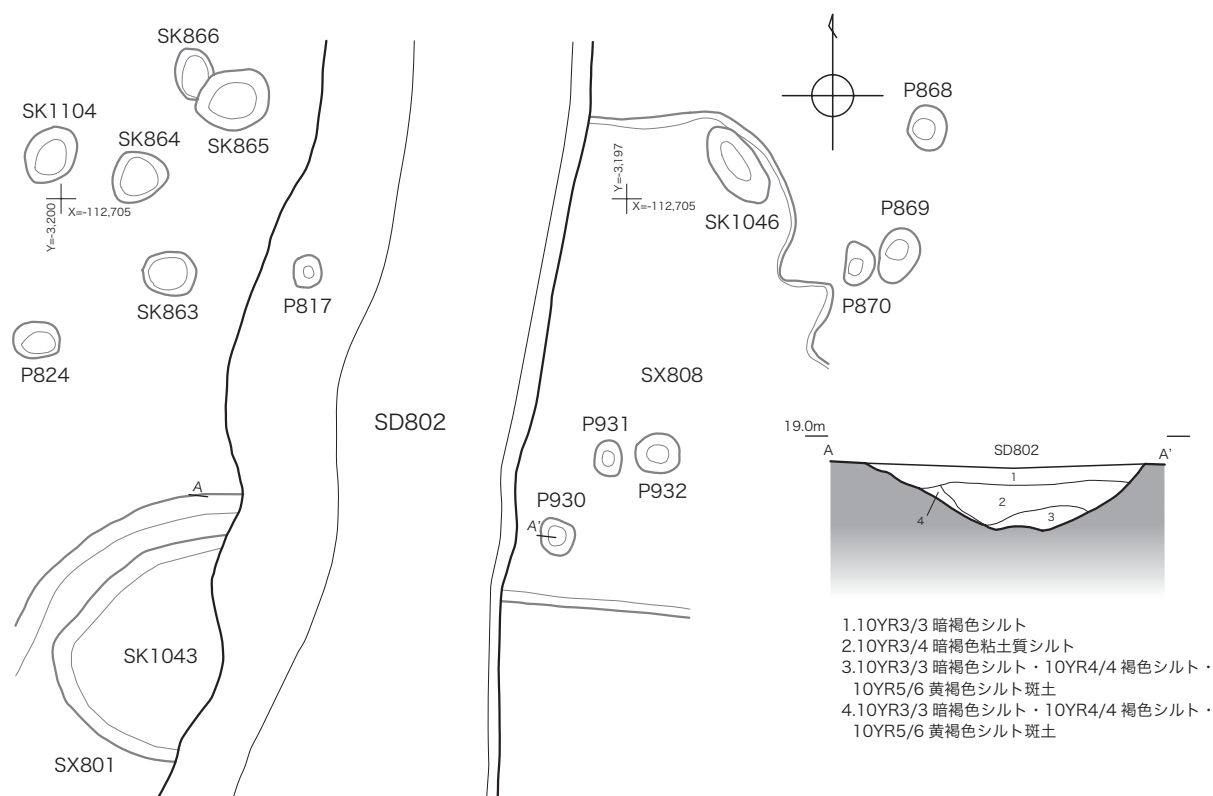


第25図 S K 552. 801平・断面図 (1/40)

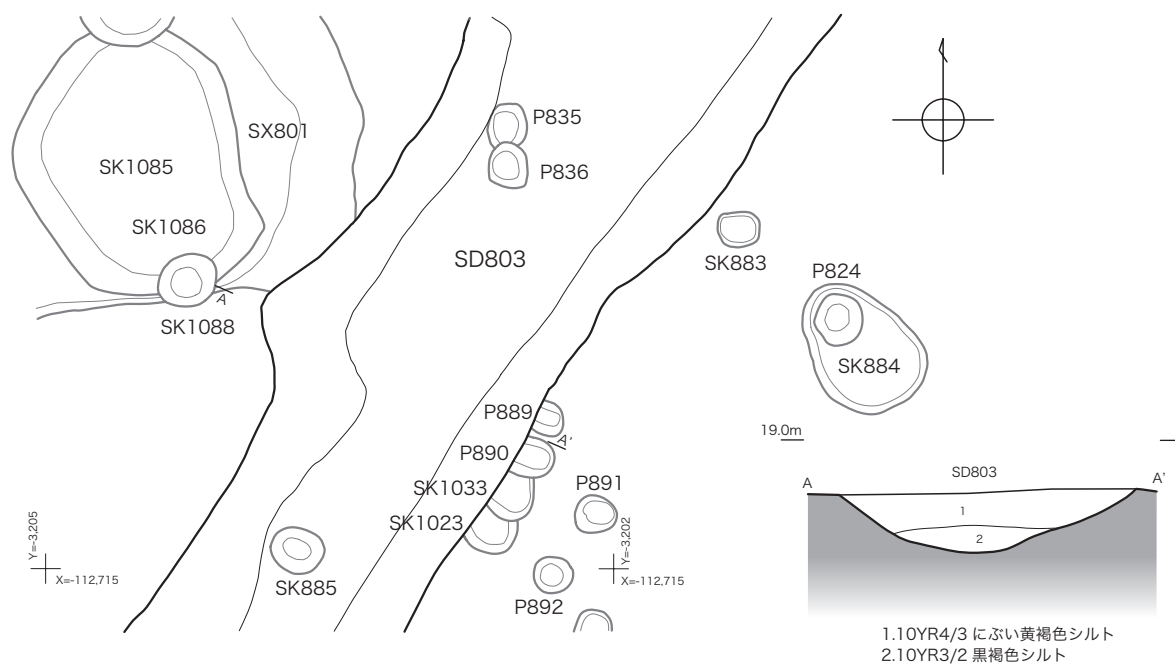


第26図 S D 103平・断面図 (1/40)

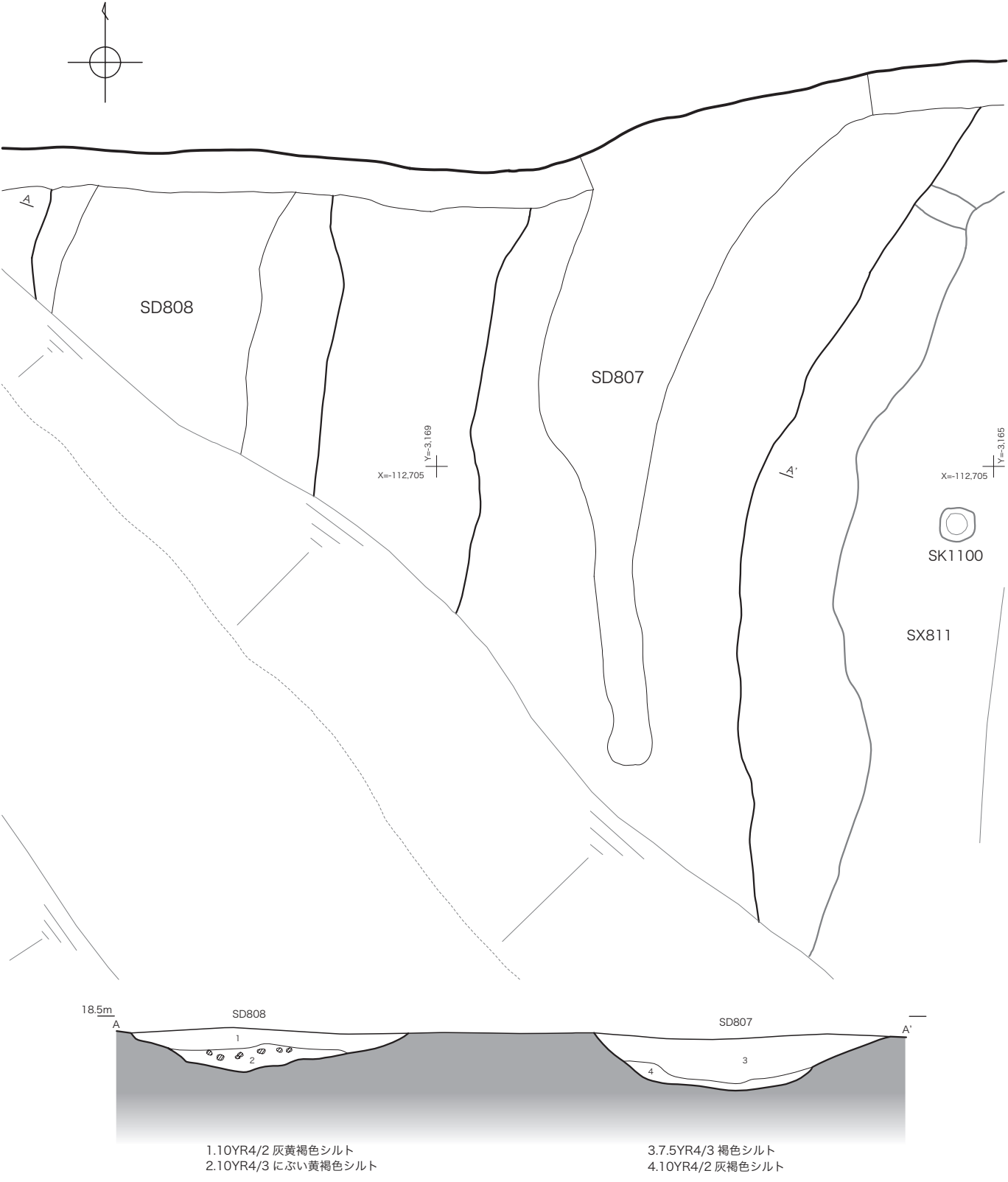
小針遺跡



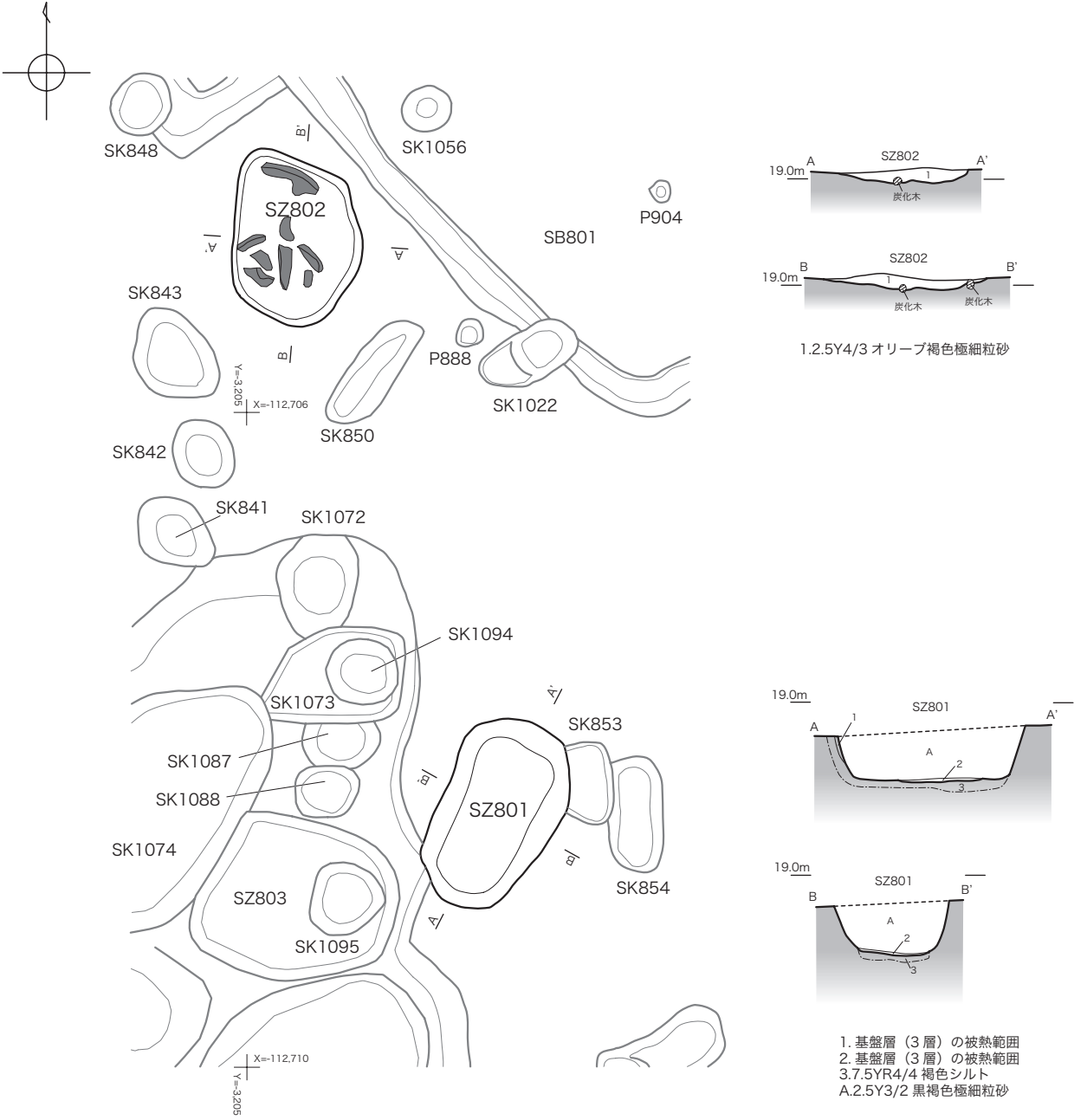
第27図 S D802平・断面図 (1/40)



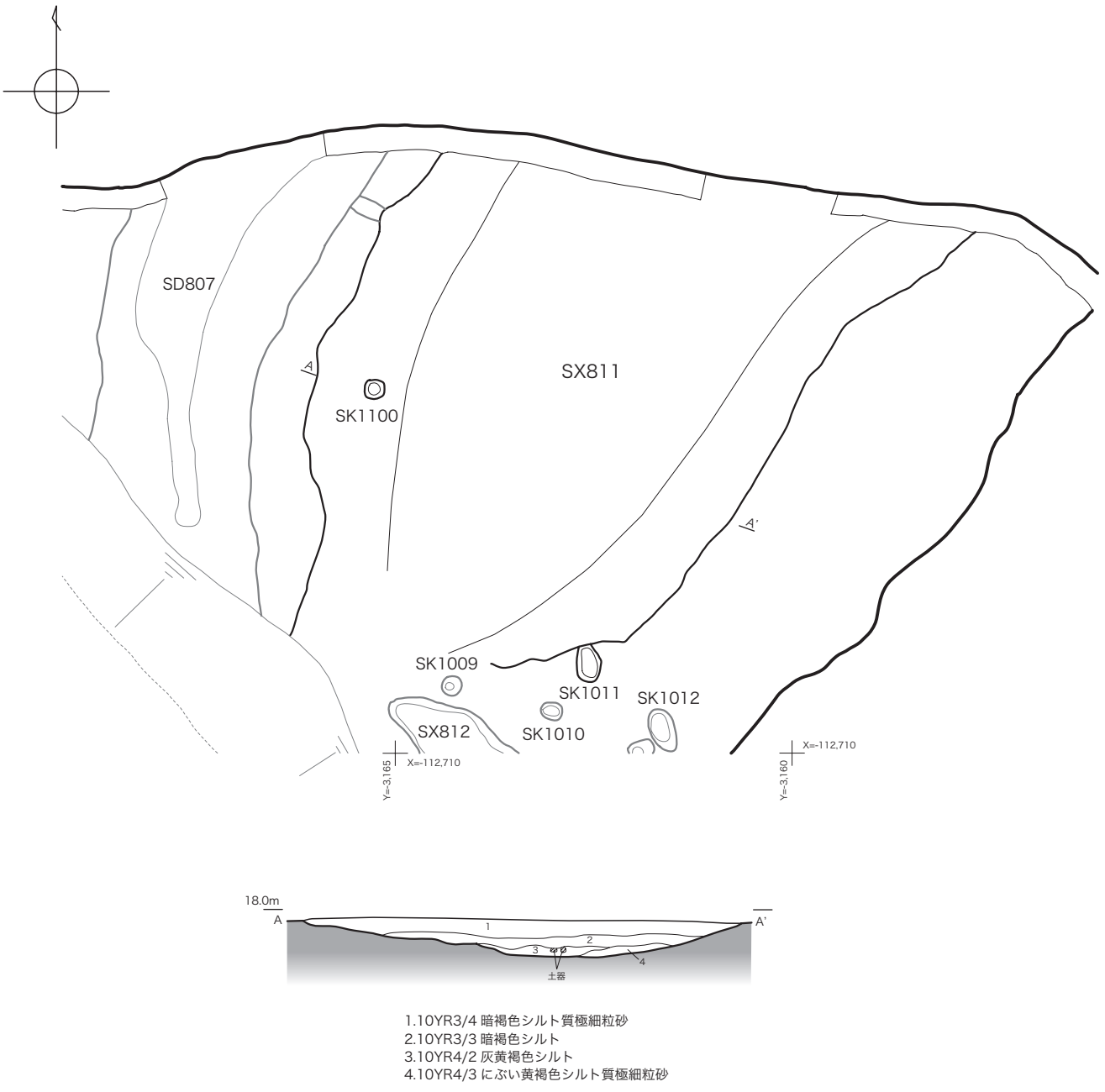
第28図 S D803平・断面図 (1/40)



第29図 S D807. 808平・断面図 (1/40)



第30図 S Z 801. 802平・断面図 (1/40)



第31図 SX811平・断面図 (1/80)

第V章 遺 物

第1節 概要

今回の小針遺跡における調査では、前述のように、出土遺物がかなり少ない調査結果となった。原因として、小針遺跡の集落範囲内では中心を成す空間ではないと思われること、碧海台地の落ち際にあたり、ゆるい斜面が平坦地を確保するために削平され続けたことなどが考えられる。この調査地点における遺物の出土量は、調査面積2100㎡で、P27コンテナにして50箱程度である。

出土遺物の時期的な比率では、7世紀代に属するものが最も多く、続いて平安時代、中世、戦国時代の遺物が少ないながら一定量含まれ、わずかに縄文時代のものが認められたが、これは比率が比較できる量とは成り得なかった。

縄文時代の遺物がみとめられたのは、土坑2基および、後世の竪穴住居跡埋土からの混入品であったが、深鉢と思われる土器片がわずかに出土した程度である。

古墳時代、古代の遺物では7世紀代に属するものを主体とし、須恵器、土器片等が出土しており、わずかに製塩土器片もみとめられ、やや時期が下って、灰釉陶器も少ないながら確認できた。

中世の遺物は、灰釉系陶器（以下山茶碗類）が出土しており、土器もみとめられたが、出土状況は散逸的でまとまりはみられなかった。

戦国時代の遺物は、少ないながらも土器、陶器が、調査区北東端にて一定のまとまりをもって出土しており、限定された遺構ではあるが時期の把握が可能であった。

ここでは、時期の把握がある程度可能な遺構出土遺物について、遺構ごとのまとまりを考慮しながら時代別に説明する。なお、出土遺物における記述は、各時期における遺構の種別で説明するが、竪穴住居及び一部の比較的遺物がまとまって出土した遺構については、各遺構ごとに出土遺物を説明する。

第2節 主要遺構別出土遺物

・縄文時代

S K696 縄文時代の遺構と判断できるものの中で、図示し得る遺物として取り上げたものが、1の深鉢である。断面形態はわずかに口縁に向かって肥厚しながら内彎し、口縁部は4ヶ所の頂部をもつ波状を成すものと思われ、二条の並行する凹線が口縁部外側下方に施されている。したがって、プロポーショナル的には中期的様相の後出形態と考えられ、縄文時代後期に属するものと思われる。

・古墳・奈良時代

S B101 今回検出された竪穴住居跡の中では、他と比べて比較的遺物が出土した遺構である。図示した2～13の中では、13の土器甕を除いて須恵器である。2・3は蓋で、2は断面形態が内彎して深く、

短頸壺に伴う蓋の可能性が考えられる。3は坏蓋で、天井部にはヘラ削りによる整形が認められ、沈線が残り、口径の大きさは最大の時期よりも縮んだものである。4～6は坏身で、いずれも蓋受け部は高めだが、断面は厚みをもたず、中サイズである。7～9は高坏で、9は口縁部が外反する。7・8は脚部で、どちらも縞状の粘土を原材として使用している。10は横瓶、11は甗、12は瓶類の脚部と思われる。13は土器甕の口縁部で、頸部にわずかに縦方向のハケ調整が観察できる。各須恵器における特徴から、猿投窯編年における東山50号窯式期の様相が観察できる。

S B 102 14～16は、S B 101を切っているS B 102出土遺物である。14・15は須恵器で、16は土器甕である。14の坏蓋は、ヘラによる器面調整が雑である。15の坏身は、器高が浅く、口径はやや小さい。16の土器甕は、頸部から口縁部がゆるやかに外反する。須恵器坏身・蓋における特徴から、東山50号窯式期よりもやや後出と思われ、岩崎17号窯式期の古相が観察できる。

S B 103 17～19はS B 103出土遺物である。いずれも土器甕で、摩耗が激しいが、17は外面に縦方向のハケ調整が観察できる。大型品の19、中型品の17、小型品の18と、サイズの違いがみられる。

S B 104 20～25はS B 104出土遺物である。20・21は須恵器坏身で、21は器高が低く、口径もやや小さい。22は須恵器坏類である。23～25は土器で、23・24は甕である。24に比べて23は、頸部が直立してからの外反がやや強く長い。24の体部外面上半部には、やや細かいハケ調整が観察でき、口縁部から頸部にかけては、横方向に強くナデ調整されているため、頸部下に稜がみとめられる。各須恵器の特徴から、東山50号～岩崎17号窯式期の様相が観察できる。

S B 401 26～31はS B 104出土遺物である。26・27・29・30は須恵器で、26・29の高坏はいずれも無蓋と思われ、26はケズリ調整がくびれ部に向かう。27は瓶類の、30は甕の口縁部で、27には外面の口縁部脇に突帯がめぐる。28・31は土器甕の口縁部で、いずれも摩耗が激しい。各須恵器の特徴から、東山50号窯式期の古相が観察できる。

S B 402 32・33はS B 402出土遺物である。82は須恵器高坏で、口縁部はわずかに外反し外面には自然釉がかかる。33は土器甕で、頸部から口縁部に向かってゆるやかに外反する。須恵器の特徴から、東山50号窯式期の古相が観察できる。

S B 403 34～36はS B 403出土遺物である。いずれも須恵器で、34は鉢、35・36は坏身である。35は口径が小さく、36は中サイズで底部にはヘラ記号が施されている。坏身の特徴からは、東山50号～岩崎17号窯式期の様相が観察できる。

S B 404 37～41はS B 404出土遺物である。37～40は須恵器で、37は坏蓋、38は口径が小さめの坏身である。39・40は高坏の坏部で、いずれも外面の中位に突帯がめぐる。41は、本遺構埋土に混入したと思われる縄文土器の深鉢である。外側口縁部脇には晩期縁帯文的な施文がみられるが、肥厚は明瞭にみられない。こうした特徴から、縄文時代後期末～晩期初頭の寺津下層式に属するものと思われる。

S B 405 42～46はS B 405出土遺物である。42～45は須恵器で、42・43の坏蓋は天井部が段状を呈している。44は甕で、45は甗と思われる。46は土器で、鍋または甑の把手である。須恵器の特徴から、東山50号窯式期の古相が観察できる。

S B 406 47はS B 406出土遺物である。出土遺物が少なく、図示できたものは須恵器の短頸壺のみであった。短く直立する口縁部下方の肩部に沈線が施され、底部にはヘラ記号がみとめられる。こうし

小針遺跡

た特徴から、東山50号窯式期の様相がみとめられる。

S B 407 48～55はS B 407出土遺物である。48～52は須恵器で、48の坏蓋は口径が大きめで、49の坏身はやや浅い形状を呈する。50～52は高坏で、51・52の坏部には、内側口縁部脇に1条の、外側体部中位には2条の沈線が、それぞれ施されている。53～55は土器で、53はわずかに頸部状の屈曲がみられる小形平底鉢である。54・55は甕でいずれも摩耗が激しいが、54は体部に部分的にハケ調整が残る。須恵器の特徴から、東山44号～50号窯式期の様相が観察できる。

S B 408 56・57はS B 408出土遺物である。いずれも土器甕で、短いながら頸部に直立部分が認められ、口縁部はゆるやかに外反する。三河地域では、7世紀代に比定される様相がみとめられる。

S B 801 58・59はS B 801出土遺物である。いずれも須恵器で、58の高坏坏部は直線的に浅く開き、59の無台坏身は、平底が明瞭に作られていない。須恵器の特徴から、岩崎17号窯式期の様相が観察できる。

土坑 60～75は土坑出土遺物である。60～62は須恵器蓋で、60のS K 252出土坏蓋は、天井部が段状を呈し、自然釉がかかっている、東山50号窯式期の古相がみとめられる。61・62はともにS K 673出土遺物で、61の坏蓋は東山50号窯式期の古相がみとめられるが、62の大形の坏に伴うものと思われる蓋は鳴海32号窯式期の様相がみとめられる。63～66は須恵器坏身で、63のS K 292出土坏身は受け部が直立気味に立ち上がるのに対し、64～66の受け部は内傾しやや短い。64はS K 130、65はS K 156、66はS K 251からの出土である。67はS K 449出土の須恵器高坏口縁部である。S K 1072出土の68、S K 1090出土の69は須恵器高坏脚部で、いずれも短く低い形状を呈し、端部の折り返しは弱い。S K 673出土の70は土器の甕で、器壁は全体的に薄手で、体部から口縁部に向かって頸部が強く屈曲する、いわゆる「三河型」の甕である。S K 546出土の71は須恵器鉢で、半球状の体部から口縁部に向かって短く直立する。S K 458出土の72は須恵器短頸壺で、肩の張りが弱い形状を呈する。S K 518出土の73は碗形の須恵器で、半球状の体部は脚を伴うものと思われる。S K 134出土の74は土器の把手で、甌または鍋に伴うものと思われる。S K 508出土の75は製塩土器の脚部で、小型で棒状を呈しており、知多式4類または渥美式D類に相当するものと思われる。

S D 105 80はS D 105出土の須恵器長頸壺である。溝の中のピット状小穴から完形で検出され、出土状況が特異である。大きさは中型品で、口縁部の折り返しが少ない。鳴海32号窯式期の様相を呈する。

S X 104 81～84はS X 104出土遺物である。81・82は須恵器坏蓋で、いずれも肩部の稜線が明瞭ではない。84は須恵器甕の口縁部で、口縁端部は明瞭に象られていない。口径が比較的小さいので、壺の可能性も考えられる。83は須恵器高坏の脚部で、透かしはみられず、径は比較的広めである。坏蓋、高坏脚部の特徴から、岩崎17号窯式期の古相が観察できる。

S X 402 86～88はS X 402出土遺物である。86は須恵器甕で、注口は下部のみが出る。外面体部には、ハケ状工具により刺突文が施されている。87は須恵器の脚部である。88は土器甕の口縁部で、摩耗が激しいが縦方向のハケ調整が痕跡的にみられる。須恵器の特徴から、東山50号窯式期の古相が観察できる。

S X 801 90～94はS X 801出土遺物である。90は須恵器坏身で、外面には自然釉が全面にかかっている。91は須恵器甕で、口縁部から頸部までの深さが充分とられ、屈曲しながら開く。92・93は須恵器

高坏脚部で、94は須恵器蓋である。

・平安・鎌倉時代

土坑ほか 95～100は灰釉陶器である。S K 176出土の95は碗の口縁部で、内側には被熱痕が残る。S K 305出土の20は碗の底部片で、高台の輪郭は比較的明瞭である。S K 510出土の97は、灰釉が口縁部から体部にかけてツケガケされた皿である。S K 852出土の98、S K 999出土の99、S X 405出土の100はいずれも碗で、98・99には灰釉のツケガケが施されている。底部の確認できない95を除いて、折戸53号窯式期の様相がみとめられる。

101～111・114～117は、灰釉系陶器、いわゆる山茶碗類の碗・皿である。101～111は土坑からの出土遺物で、114～117は円形小穴、溝からの出土遺物である。S K 111出土の101は、底部にわずかに高台の痕跡が認められる小皿で、器壁は厚めで、藤澤編年の第6型式に属する。103～111・114・116の碗は、体部が直線的に開き、高台の残るものには刳殻痕が認められ、高台内の底部は回転糸切り痕がみとめられ、藤澤編年の第6型式に属する。この中で、110・111・114・116は高台の幅が広めで、第6型式の中でも古相を示す。S K 306出土の112・113は非ロクロ成形の土器皿で、いずれも器壁は薄手で、口径は12cm程度、底部から口縁部に向かう立ち上がりはやや強い。

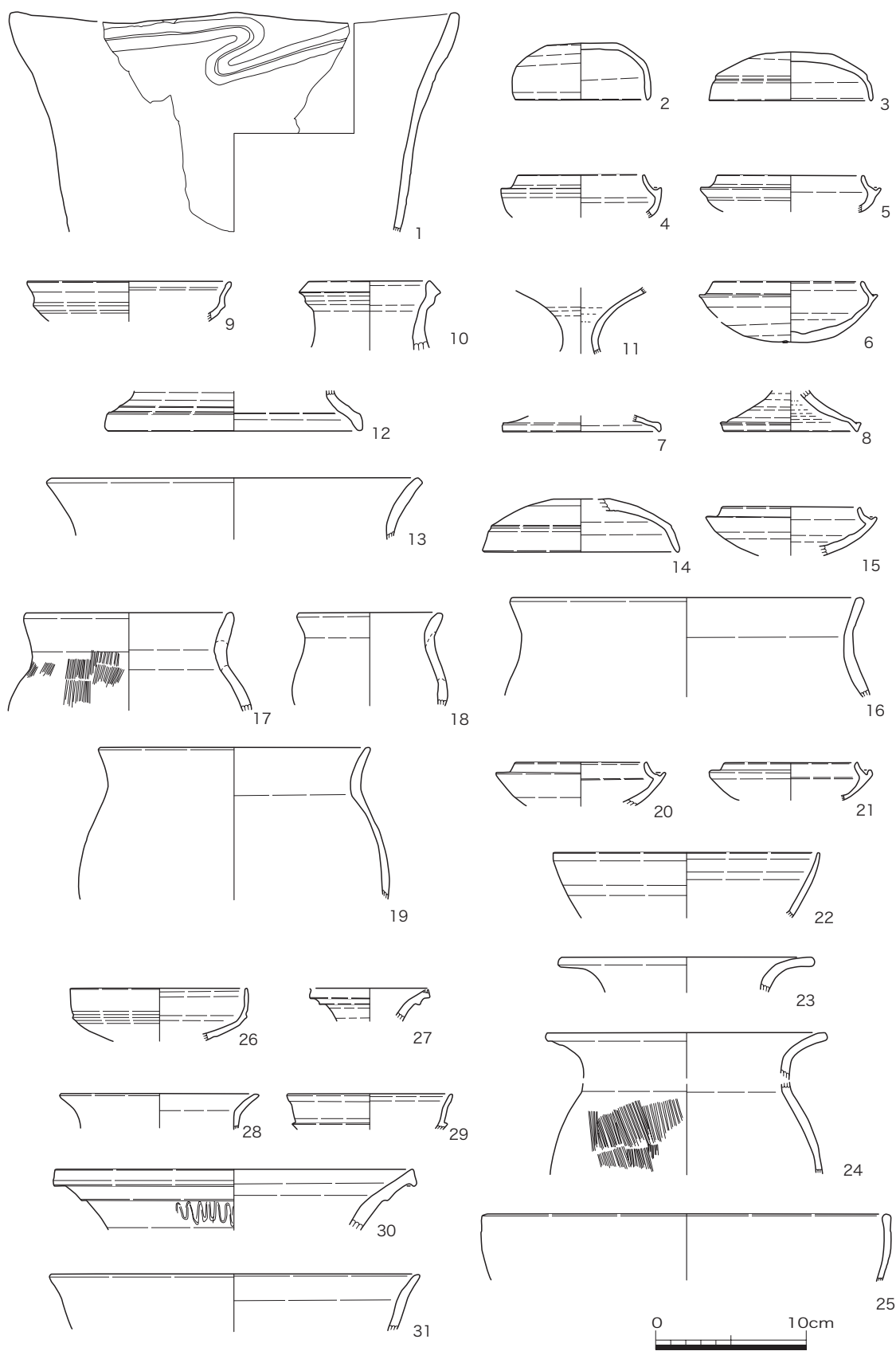
・戦国時代以降

S D 805 119・121～126はS D 805出土遺物である。121は土器羽釜で、羽部より口縁部までを欠く。羽部は摩滅がすすんでいて端面の処理が確認しづらいが、上面は指によりつまみ上げられた成形が施されている。122～124は土器内耳鍋である。いずれも半球形で、122・123は内耳のふくらみが少なく平らかで内耳下部の外面には沈線がみとめられるが、124は内耳がやや盛り上がる。125・126は、瀬戸産と思われる陶器摺鉢で、125は口縁部の折り返しが垂下し、口縁端部断面は箱形を呈する。126は口縁端部がつまみ上げられ、外側にくぼみがみられる。119のような灰釉陶器の長頸瓶底部もともに出土しているが、内耳鍋の特徴からは、16世紀前～中葉の様相がみとめられる。

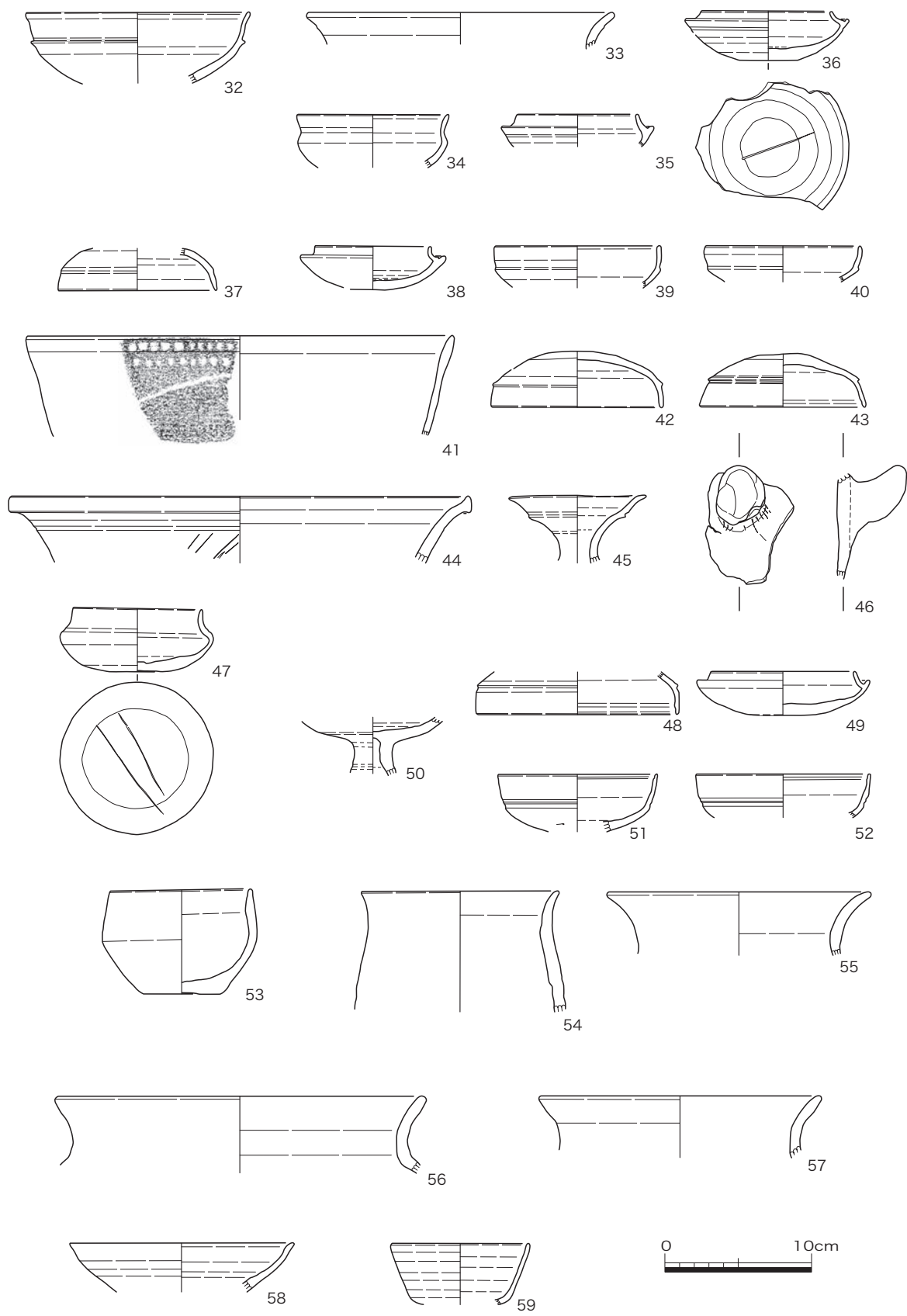
S D 807 127～133はS D 807出土遺物である。127～131は土器内耳鍋である。いずれも半球形の体部で、127・131は口縁端部の断面形態が内・外にわずかに張り出しており、128・130は内側に張り出しがみとめられ、129は張り出しが弱い。内耳のふくらみは128はやや盛り上がるが129はふくらみが少なく平らかで、129・130の外面部には沈線がみとめられる。132は、瀬戸産と思われる陶器摺鉢で、口縁部外側にくぼみがみられる。133のような古瀬戸後期の陶器縁釉小皿もともに出土しているが、内耳鍋の特徴からは、16世紀前～中葉の様相がみとめられる。

S D 808 134～137はS D 808出土遺物である。134・135は、いずれも半球形の土器内耳鍋で、134の体部は直立して立ち上がるがわずかに内彎ぎみで、135は内彎している。口縁端部は、いずれもわずかに内側が張り出している。136・137は土器羽釜である。139は羽部先端がナデがみとめられず、羽部から口縁端部までが直立して長い。137は羽部先端にナデ調整がなされていて、羽部から口縁端部までは短くわずかに内彎する。内耳鍋の特徴からは、16世紀前～中葉の様相がみとめられる。

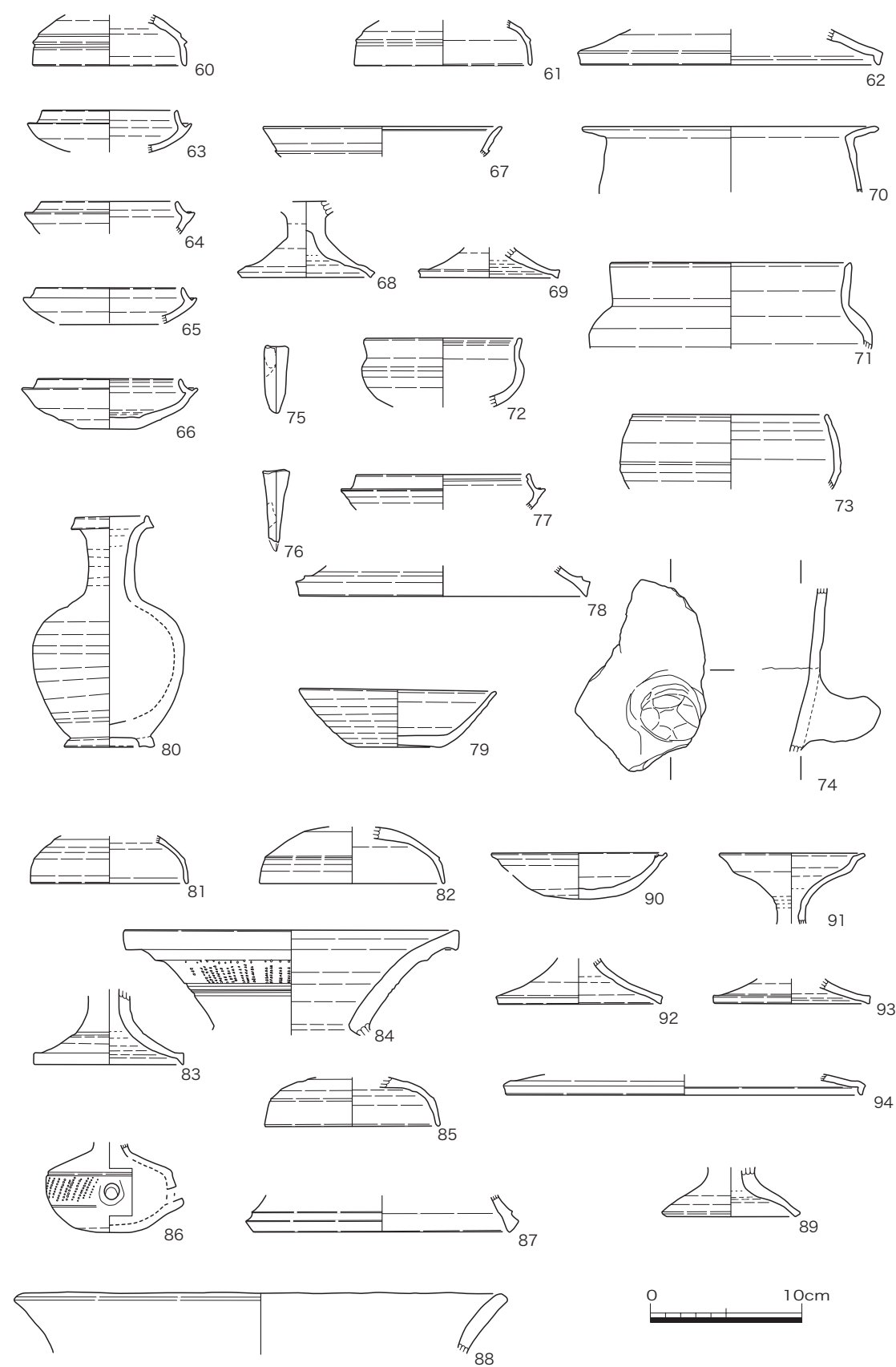
小針遺跡



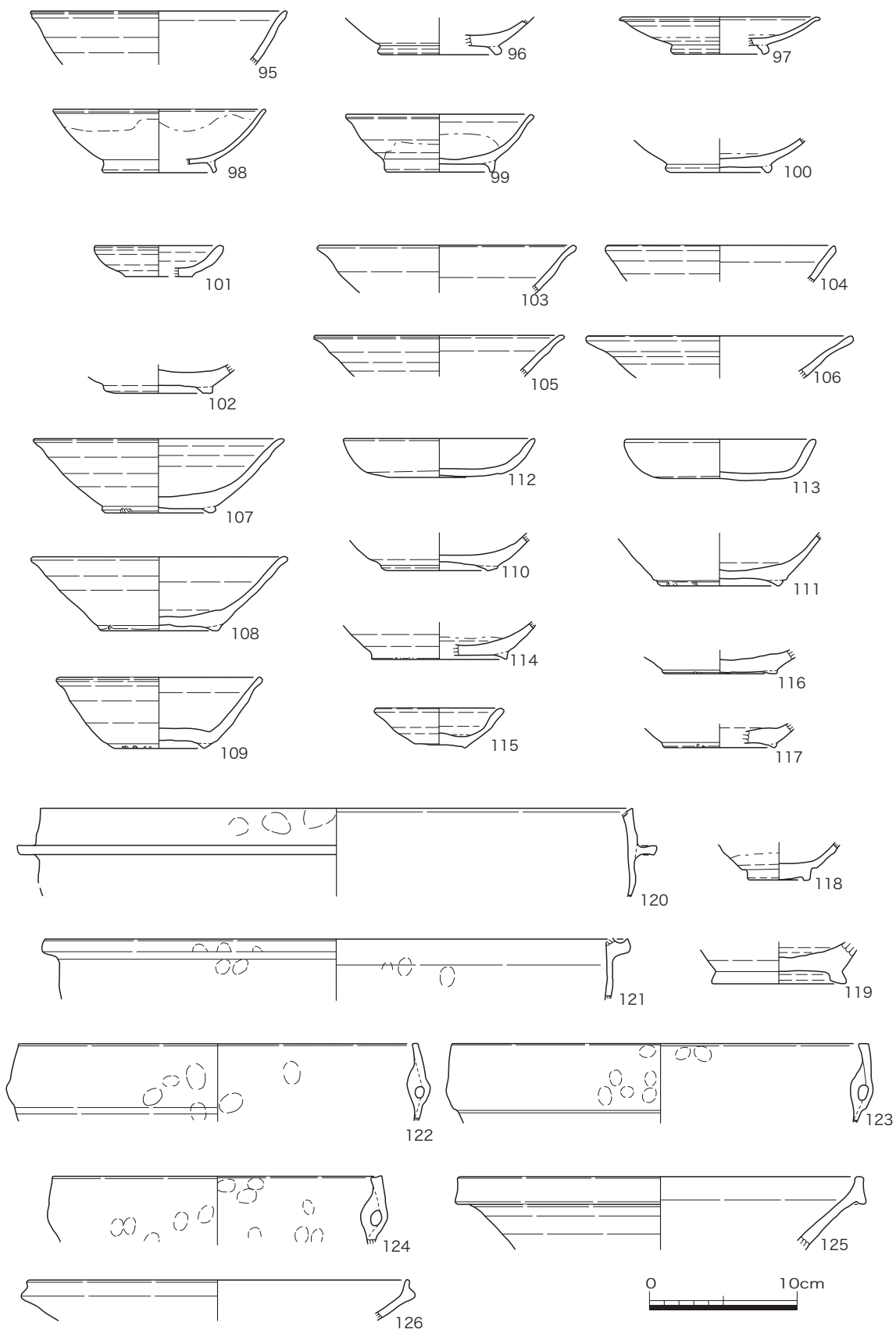
第32図 出土遺物実測図 (1)



第33図 出土遺物実測図 (2)

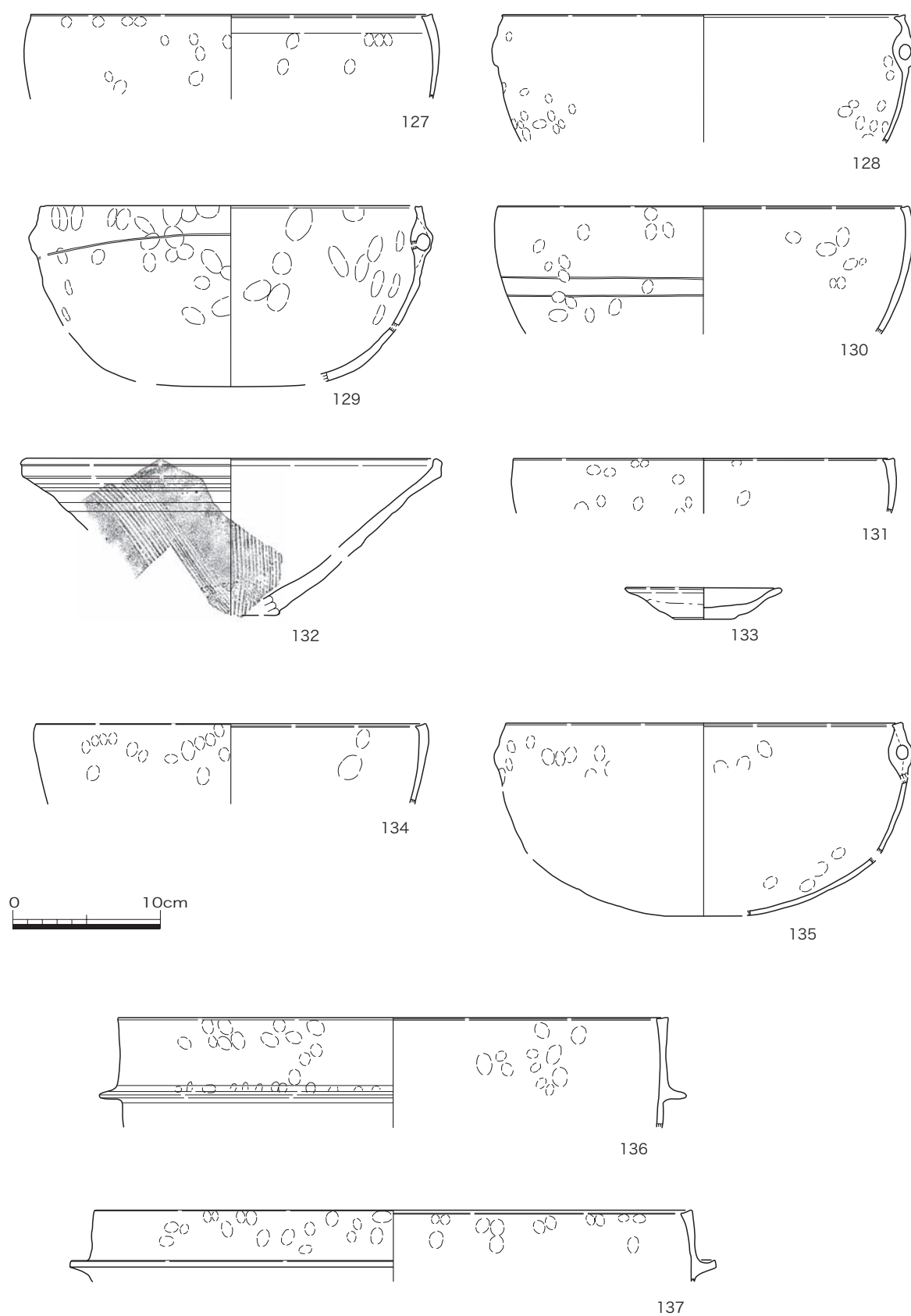


第34図 出土遺物実測図 (3)



第35図 出土遺物実測図 (4)

小針遺跡



第36図 出土遺物実測図 (5)

第Ⅵ章 自然科学分析

第1節 放射性炭素年代測定

山形 秀樹（パレオ・ラボ）

はじめに

小針遺跡より検出された炭化物の加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を実施した。

試料と方法

試料は、B区のS B 407かまど、S B 408かまどから採取した炭化物各1点、S B 403埋土から採取した炭化物1点、S B 405かまどから採取した炭化物2点、埋土から採取した炭化物1点、S B 406埋土から採取した炭化物1点、S B 402かまどから採取した炭化物1点、S B 401埋土から採取した炭化物1点、S K 552・421・599埋土から採取した炭化物各1点、C区のS B 801かまどから採取した炭化物1点、S Z 802・801・803埋土から採取した炭化物各1点の、併せて16点である。

これらの試料は、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨（グラファイト）に調整した後、加速器質量分析計（AMS）にて測定した。この測定した ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、補正した ^{14}C 濃度を用いて、 ^{14}C 年代を算出した。

結果

表2に、各試料の同位体分別効果の補正值（基準値－25.0%）、同位体分別効果による測定誤差を補正した ^{14}C 年代、 ^{14}C 年代を暦年代に較正した年代を示す。

^{14}C 年代値（y r B P）の算出は、 ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、計数値の標準偏差 σ に基づいて算出し、標準偏差（One sigma）に相当する年代である。これは、試料の ^{14}C 年代が、その ^{14}C 年代誤差範囲内に入る確率が68%であることを意味する。

考察

各試料は、同位体分別効果の補正および暦年代較正を行った。暦年代較正した 1σ 暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲に注目すると、それぞれより確かな年代値の範囲として示された。

小針遺跡

表2 測定および校正の結果

測定番号 (測定法)	試料データ	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に校正した年代	
				暦年代較正值	1 σ 暦年代範囲
PLD-2706 (AMS)	SB407かまど C-401	-25.8	1,505 ± 35	cal AD 560 cal AD 595	<u>cal AD 535 - 615 (100%)</u>
PLD-2707 (AMS)	SB408かまど C-402	-28.1	1,470 ± 40	cal AD 605	<u>cal AD 560 - 640 (100%)</u>
PLD-2708 (AMS)	SB403西区 C-403	-25.7	1,415 ± 35	cal AD 645	<u>cal AD 615 - 660 (95.5%)</u>
PLD-2709 (AMS)	SB405かまど C-404-1	-28.1	1,475 ± 35	cal AD 600	<u>cal AD 560 - 620 (85.9%)</u> cal AD 630 - 640 (11.7%)
PLD-2710 (AMS)	SB405かまど C-404-2	-27.1	1,435 ± 35	cal AD 625 cal AD 640	<u>cal AD 600 - 655 (100%)</u>
PLD-2711 (AMS)	SB405 C-405	-28.2	1,450 ± 35	cal AD 620 cal AD 635	cal AD 595 - 650 (90.7%)
PLD-2712 (AMS)	SB406北区 C-406	-26.5	1,445 ± 35	cal AD 620 cal AD 630 cal AD 635	<u>cal AD 595 - 650 (92.9%)</u>
PLD-2713 (AMS)	SB402かまど C-407	-28.4	1,465 ± 35	cal AD 605	cal AD 565 - 590 (32.8%) <u>cal AD 595 - 640 (67.2%)</u>
PLD-2714 (AMS)	SB401東区 C-408	-27.4	1,360 ± 35	cal AD 660	<u>cal AD 645 - 690 (100%)</u>
PLD-2715 (AMS)	SK552 C-409	-27.6	1,550 ± 35	cal AD 535	<u>cal AD 435 - 520 (81.6%)</u> cal AD 525 - 545 (16.6%)
PLD-2716 (AMS)	SK421 C-410	-27.9	1,385 ± 35	cal AD 655	<u>cal AD 640 - 675 (90.1%)</u>
PLD-2717 (AMS)	SK599 C-411	-25.1	2,805 ± 40	cal BC 970 cal BC 960 cal BC 935	<u>cal BC 1,000 - 910 (100%)</u>
PLD-2718 (AMS)	SB801かまど C-801	-28.0	1,355 ± 45	cal AD 665	<u>cal AD 645 - 690 (85.7%)</u>
PLD-2719 (AMS)	SZ802 C-802	-27.1	345 ± 35	cal AD 1,515 cal AD 1,595 cal AD 1,620	cal AD 1,490 - 1,525 (34.8%) <u>cal AD 1,560 - 1,630 (65.2%)</u>
PLD-2720 (AMS)	SZ801 C-803	-26.4	370 ± 35	cal AD 1,485	<u>cal AD 1,455 - 1,520 (64.0%)</u> cal AD 1,590 - 1,625 (36.0%)
PLD-2721 (AMS)	SZ803 C-804	-27.1	1,540 ± 35	cal AD 540	cal AD 440 - 455 (12.8%) cal AD 460 - 520 (50.6%) cal AD 525 - 560 (34.2%)

第2節 堆積環境

鬼頭 剛（愛知県埋蔵文化財センター）

はじめに

岡崎平野中央部、岡崎市小針町に位置する小針遺跡調査地点にて地下層序を観察する機会を得た。その層序解析、テフラ分析および表層地形解析から新たな知見が得られたので報告する。

試料および分析方法

小針遺跡の地下層序解析のため、調査区において遺構検出面からバックホーにより掘削し、層序断面を露出させ、層序断面図の作成とテフラ分析の試料を採取した。層序断面図の作成にあたり、層相・粒度・色調・堆積構造・化石の有無などの特徴を詳細に記載した。層序断面からはテフラ分析用試料を7試料採取した（図37）。断面図の作成と試料の採取は鬼頭が行なった。

テフラ分析の試料は洗浄・篩別し、極細粒砂サイズ（1/8～1/16）に粒度調整し、この粒度調整試料中の火山ガラスおよび自形で新鮮な角閃石や斜方輝石の含有率を測定した。粒子組成の把握には通常の200粒子の観察とともに、微量含まれる特徴的なテフラ起源鉱物を識別するため、2000粒子中のテフラ起源鉱物含有量も把握した。屈折率の測定には液浸の温度を直接測定して屈折率を求める温度変化型測定装置MAIOT（古澤, 1995）を使用した。測定精度は火山ガラスで ± 0.0001 、斜方輝石および角閃石で ± 0.0002 程度である。分析は古澤地質調査事務所に依頼した。

調査地周辺における現在の表層地形解析のため等高線図を作成した。作成には愛知県岡崎市発行の1/2,500「都市計画基本図」にプロットされた標高値を用いた。標高値は2002年（平成14年）に修正されたものである。等高線図上には小針遺跡の調査地点のほかに、新編岡崎市史編集委員会編（1993）や松田（2004）を参考にして調査地周辺の主要な遺跡をプロットした。図の作成は鬼頭が行なった。

分析結果

小針遺跡の深掘層序

調査区の北壁においてバックホーにより地表面（標高19.24m）から深度約3mまでの地下層序断面を得た（図37）。下位層より標高16.27～16.35mまでは細礫層からなる。粗粒砂を基質とする基質支持礫層であり、最大礫径6cmの亜円礫がみられる。全体の固結度は低い。標高16.35～16.62mは淘汰良好な極粗粒砂層からなる。標高16.62～17.06mは粗粒砂を基質とする中礫層からなる。平板（プラナー）型斜層理が確認される基質支持礫層で、最大礫径10cmの亜円礫を含む。標高17.06～17.45mは淘汰良好な極粗粒砂層からなる。標高17.45～17.95mは礫混じりの極粗粒砂～粗粒砂層からなる。まれに最大礫径3cmの亜円礫を含む。上記の標高16.27～17.95mでみられる礫層および砂層は全体に褐色～黄褐色を呈している。標高17.95～18.14mは赤褐色を呈する粘土層からなる。塊状で粘土層中には砂粒子が混じり、堆積構造は認められない。全体に酸化の程度がはげしく、著しく赤色化している。色調がほかの

小針遺跡

地層と明らかに異なり、下位層および上位層との境界は明瞭である。本層の上位層から考古遺物が検出されるようになるものの、本層からは考古遺物が検出されず遺跡の基盤層となっている。標高18.14～19.24mは灰色を呈する粘土層である。塊状で粘土層中には砂やシルトが混じり、堆積構造は認められない。本層が小針遺跡の遺物包含層にあたる。

テフラ分析

深掘層序断面の下位層から上位層まで計7試料を採取した。分析結果を図38に示す。深掘層序の下位でみられる礫層と砂層（標高16.27～17.06m）から採取した試料1（標高16.32m）、試料2（標高16.48m）、試料3（標高16.83m）からは微量の斜方輝石が含まれる。また、試料2には斜方輝石とともに微量の高温型石英が含まれる。標高17.06～17.45mにみられる極粗粒砂層の下底面より採取した試料4（標高17.09m）からは、テフラ起源と考えられる鉱物はまったく確認されなかった。標高17.45～17.95mの極粗粒砂～粗粒砂層の下底面より採取した試料5（標高17.47m）では微量の斜方輝石が含まれた。標高17.45～17.95mの極粗粒砂～粗粒砂層の上部から採取した試料6（標高17.85m）と、標高17.95～18.14mの赤褐色粘土層から採取した試料7（標高18.02m）からは斜方輝石にともなって火山ガラスが多産した。

調査地周辺の表層地形解析

一般に沖積低地では、低地部の単位面積内における高度差がきわめて小さく低平なため、国土地理院発行の地形図（1/25,000や1/10,000）には低地面の詳細な等高線はほとんど表現されず、考古遺跡を解析するのに適当な精度とは言い難い。そのため、より詳細な等高線図を得るため愛知県岡崎市発行の1/2,500都市計画基本図を用い、等高線図を作成した（図39）。等高線間隔は1.0mである。

東西約2.5km、南北約1.8kmの等高線図全体では標高14mから24mまでの等高線が描かれ、北および北西側で標高が高く、南ないし南西へ向かい徐々に低くなる傾向がある。標高18mを境にして、等高線の間隔が広いところと狭いところに分けられる。図の東および南側、北から岡崎市北野町、森越町、橋目町、舩越町、東大友町、西大友町、宇頭町にかけてひろがる標高14～17mまでの間隔は広い。いっぽう、小針町を含む図の北側では標高18～24mまでが狭く、とくに標高18m～20mには急傾斜の崖がみられる。標高18m以上に露出する地層は地質学的に上部更新統の碧海層に区分されている。ここで小針遺跡のある小針町の表層地形に注目すると、小針町には標高15mから21mにかけて南につきでた尾根地形がみられる。尾根を挟んでその東および西には谷地形が認められ、小針遺跡はつきでた尾根地形の東にみられる谷の斜面にあたっている。

考察

深掘層序に記録される堆積環境

小針遺跡で確認された深掘層序の堆積物は、その粒度から粗粒な部分と細粒な部分とに大きく2分される。標高16.27～17.95mには礫層および粗粒砂層といった粗粒な堆積物が、標高17.95～19.24mには粘土層からなる細粒な堆積物が覆った。粗粒な堆積物のとくに標高16.62～17.06mには中礫層からな

り、平板型斜層理がみられた。このことから、上部層に比べてより高エネルギー環境下で堆積したことがわかる。平板型斜層理は河川流路といった一方向流が流路の底につくる砂堆（デューン）の移動と累積によって形成されたものである。砂堆の形態には二次元と三次元のものがあり、二次元的なものが平板（プラナー）型、三次元的なものが舟（トラフ）型斜層理となる（Harms, et. al., 1975）。これらの特徴から堆積物は流路充填堆積物と考えられ、このような粗粒な堆積相が発達する環境としては扇状地や網状河川があげられる（Miall, 1978）。標高17.95～18.14mには赤褐色を呈する粘土層が、標高18.14～19.24mには灰色粘土層がみられた。この粘土層は砂などの粗粒な粒子と粘土の細粒な粒子が混然一体となっており、堆積構造はみられなかった。酸化の程度が著しいことから、酸素とふれる機会の多い離水環境を長期間経験していたことがわかる。この特徴から本層堆積時には低エネルギー環境へと変化し、活動的流路は別の場所へ移動し、調査地点は一時的な堆積の休止と離水とをくり返し、洪水時には上方へ堆積物を累積させたと考えられる。以上のように、調査地点では高エネルギー環境から低エネルギー環境への変化がとらえられた。表層地形解析からは標高15～21mにかけてみられる尾根地形の東に認められる谷の斜面に位置した。上位の粘土層が堆積するところには、すでに谷は埋積のみが進行する場所になっていたと思われる。

ところで、矢作川沿いには新生代新第三系と第四系が分布し（図40）、下位より新第三系中新統～鮮新統の瀬戸層群、第四系中部更新統の三好層、同じく中部更新統の挙母層、上部更新統の碧海層、最上部更新統の越戸層・第一礫層、第四系完新統に分けられる（町田ほか, 1962）。このうち完新統は下位より基底砂礫層・下部泥層・下部砂層・上部泥層・上部砂層・頂部泥層・頂部砂（礫）層に区分されている（森山・浅井, 1980）。深掘層序で確認された地層の堆積時期を推定するためテフラ分析を実施した。テフラ分析からは、標高16.27～17.06mまでに見られる深掘層序下部の試料1（標高16.32m）、試料2（標高16.48m）、試料3（標高16.83m）からは低い屈折率の斜方輝石が含まれた。この特徴から約8万～9万年前の大山生竹（DNP）テフラ起源と推定される。また、試料2からは斜方輝石にとまって高温型石英が含まれた。これから大山生竹（DNP）テフラに関わる鬼界-葛原（K-Tz）テフラ起源と考えられる。森山ほか（1996）は碧海層中に鬼界-葛原テフラを発見し、その火山灰層学上の意義を論じているが、小針遺跡の調査地点においても鬼界-葛原テフラが確認されたこととなる。砂礫層の上部、標高17.45～17.95mの極粗粒砂～粗粒砂層の試料6（標高17.85m）からは始良Tn（AT）テフラ、大山笹ヶ平（DSs）テフラと大山東大山（DHg）テフラ、鬼界アカホヤ（K-Ah）テフラ起源のものが検出された。なお、始良Tn（AT）テフラは約2万2千年前から2万5千年前、大山笹ヶ平（DSs）テフラと大山東大山（DHg）テフラは約2万数千年前、鬼界アカホヤ（K-Ah）テフラが約6300年前の噴出年代を示す（町田・新井, 1992）。試料6の下位の地層には始良Tn（AT）テフラの火山ガラスがまったく含まれず、鬼界アカホヤ（K-Ah）テフラ起源の火山ガラスの含有量も微量であることから、本層の堆積は始良Tn（AT）テフラ降灰以後と考えられる。標高17.95～18.14mの赤褐色粘土層の試料7（標高18.02m）からも試料6と同様に、始良Tn（AT）テフラ、大山笹ヶ平（DSs）テフラと大山東大山（DHg）テフラ、鬼界アカホヤ（K-Ah）テフラ起源のものが検出された。本層の堆積も始良Tn（AT）テフラ降灰以後と考えられる。このように深掘層序断面からは約8万～9万年前の大山生竹（DNP）テフラから始良Tn（AT）テフラ、大山笹ヶ平（DSs）テフラと大山東大山（DHg）テフラ、鬼界アカホヤ（K-Ah）

小針遺跡

テフラのそれぞれが検出でき、それらが確認された標高16.27～18.14mまでの地層が上部更新統の碧海層であるといえる。

碧海層を覆って標高18.14～19.24mには灰色粘土層が堆積した。本粘土層は堆積構造がまったくみられず、塊状を呈し砂やシルトを混じえる。大きさの異なるさまざまな粒子が渾然一体となって混じる状況は、堆積物が堆積後に動物や植物などの生物攪乱を被った結果である。また、本層が小針遺跡の遺物包含層であることから、人為的な攪乱も被っていることは想像に難くない。

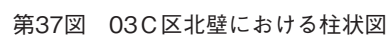
岡崎平野において、森山ほか（1997）は碧海層が分布する地域で実施されたボーリング地点をまとめている。それによると、知立市、刈谷市、安城市、碧南市など分布域の西部ないしは南部で多く、今回の調査地点がある北東部地域にはまったくない。当該地域の地質学的データはまだ今回の1地点のみであり、今後の新たなデータの蓄積が望まれる。

謝辞

本論を作成するにあたり、1/2500都市計画基本図の使用については岡崎市より承認をいただいた。岡崎市教育委員会生涯学習課文化財班の小幡早苗氏には都市計画基本図の入手に際してたいへんお世話になった。古澤地質調査事務所の古澤 明氏にはテフラの分析と完新統のテフラについてご教示いただいた。愛知県埋蔵文化財センター調査研究員の松田 訓氏には小針遺跡の考古学的情報を教えてくださいました。同調査研究員の永井宏幸氏には現場での試料採取をお手伝いいただいた。図面のトレース作業では同研究補助員の阿部佐保子氏と山口典子氏にお世話になった。分析試料の整理・保管と原図の作成では同整理補助員の服部久美子氏・村上志穂子氏にお手伝いいただいた。記して厚くお礼申し上げます。

・本節参考文献

- 古澤 明, 1995, 火山ガラスの屈折率測定・形態分類とその統計的な解析, 地質学雑誌, 101, 123-133.
- Harms, J. C., Southard, J. B., Spearing, D. R. and Walker, R. G., 1975, Depositional Environments as Interpreted from Primary Sedimentary Structures and Stratification Sequences, Short Course Notes, 2, SEPM, Dallas, 161p.
- 町田 洋・新井房夫, 1992, 火山灰アトラス-日本列島とその周辺, 東京大学出版会, 276p.
- 町田 貞・太田陽子・田中真吾・白井哲之, 1962, 矢作川下流地域の地形発達史, 地理評, 35, 505-524.
- 松田 訓, 2004, 小針遺跡, 平成16年度 専門委員会発表要旨, 愛知県埋蔵文化財センター, 12-15.
- Miall, A. D., 1978, Fluvial Sedimentology, Canadian Soc. Pet. Geol. Memoir 5, 859p.
- 森山昭雄・浅井道広, 1980, 矢作川河床堆積物と供給岩石の造岩鉱物との粒度組成関係, 地理評, 53, 557-573.
- 森山昭雄, 1996, 西三河平野の活断層と傾動運動, 愛知教育大学地理学報告, 82, 1-11.
- 森山昭雄・橋爪 厚・石原 秀, 1997, 化石ケイソウ群集による碧海層の堆積環境の変遷と油ヶ淵断層による変位, 愛知教育大学研究報告, 46 (自然科学編), 61-69.
- 新編岡崎市史編集委員会編, 1993, 新編岡崎市史 総集編20, 岡崎市, 736p.

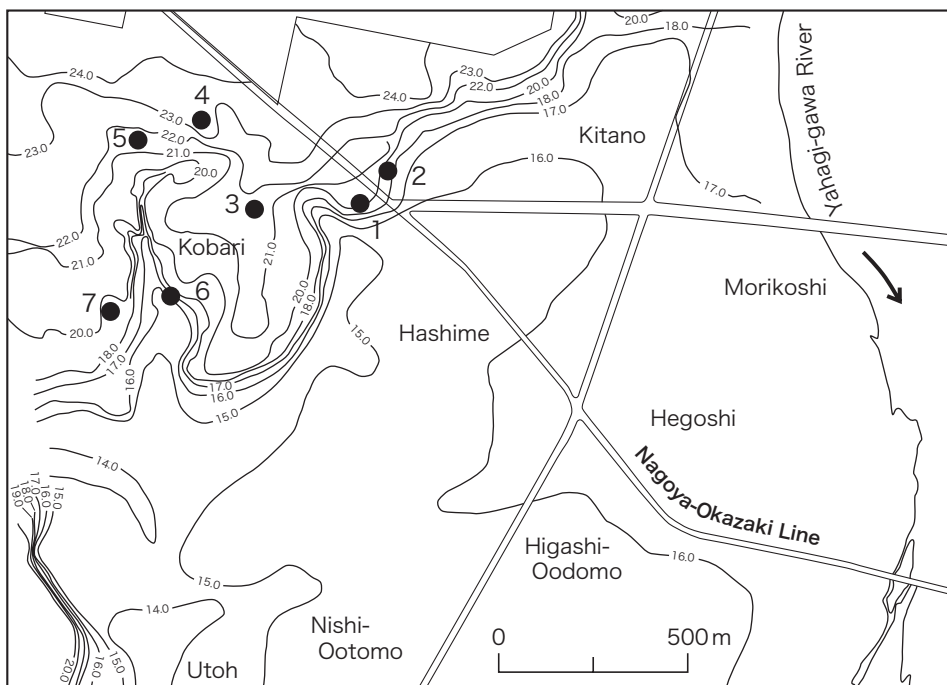


矢印はテフラ分析の試料採取層準,数字は試料番号を示す。

標高18.14～19.24mが遺物包含層にあたる。



小針遺跡



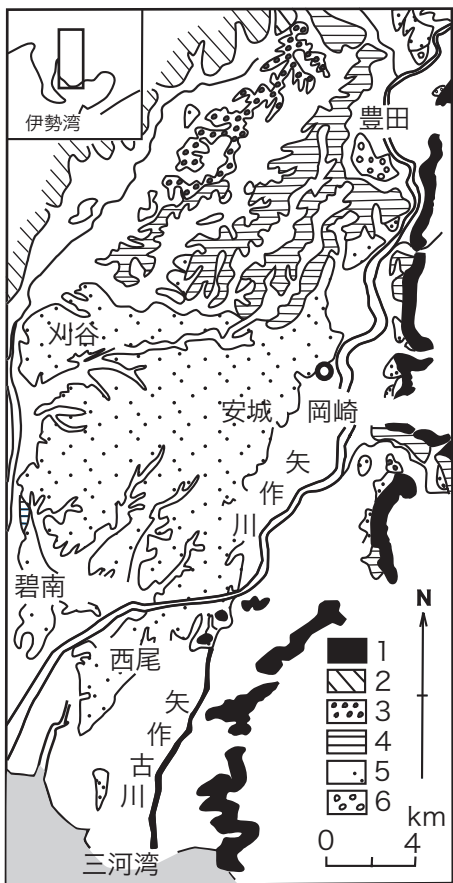
第39図 調査地点周辺地域の等高線図

黒丸●は調査地点と周辺の主な遺跡を示す。

1. 小針遺跡（今回の調査地点） 2. 猿投塚古墳 3. 小針遺跡（岡崎市による調査地点）
4. 小針2号墳 5. 小針1号墳 6. 小針東遺跡 7. 小針西遺跡

等高線（m）は岡崎市発行の「都市計画基本図（1/2500）」の標高値を基に作成。等高線間隔は1.0m。

Kitano: 北野町, Morikoshi: 森越町, Hashime: 橋目町, Hegoshi: 舢越町, Kobari: 小針町,
Higashi-Oodomo: 東大友町, Nishi-Oodomo: 西大友町, Utoh: 宇頭町



第40図 岡崎平野の地形と地質図

森山（1994）を基に一部改変，○は小針遺跡の位置を示す。

1. 山地 2. 丘陵 3. 三好層 (中部更新統) 4. 拳母層 (中部更新統)
5. 碧海層 (上部更新統) 6. 越戸層 (最上部更新統)

第Ⅶ章 まとめ

今回の調査では、出土遺物は少ないながらも、縄文時代後・晩期、古墳時代後期、古代、中世、戦国時代の人々の足跡として、遺構、遺物が検出できた。こうした検出資料の中では、縄文時代については情報量が少ないため、遺構の性格、空間的な特質について言及できるレベルではなかった。古墳・奈良時代については、これまでの岡崎市教育委員会などによる調査成果と照合することで、ある程度の推測が可能であった。

ここでは、各時期の検出遺構の中で、比較的遺物がまとまって出土したものを選定し、100～400m離れて位置する市調査地点の調査成果と比較しながら、当調査地点の空間的な位置づけがどのようなものになるのかを考え、出土遺物からどのような時間的流れがうかがえるのかについて推察する。

・空間的特質

今回の調査地点では、縄文時代の遺構、遺物の検出はごくわずかであった。縄文土器を確実に伴う遺構としては土坑2基のみで、いずれも古墳時代後期の竪穴住居によって切られていて、その全容はうかがい得ない。市調査地点と同様に、今回の調査地点でも住居跡は確認されていないが、市調査地点では中・晩期の土器、石器および土坑1基が検出されている。本地点では後・晩期遺物、土坑2基が確認されており、小針遺跡には併せて縄文時代中～晩期の生活が痕跡的に残されている。

古墳時代後期から奈良時代にかけての遺構、遺物は、今回の調査地点では主体的で、中でも竪穴住居は概ね7世紀代の各時期のものと思われる。出土遺物の実年代については、提唱者間で未だ統一の見解が得られていないため、概ねの年代以外は産地における窯型式名にて記述をする。竪穴住居から出土した遺物は、東山44～15号窯式期、東山50号窯式期、岩崎101～17号窯式期がみられた。この時期は、市調査地点の報告において設定されたⅢ-3～Ⅳ-1期にあたるものと思われる。市の報告においては、Ⅲ-3期よりも1世紀さかのぼるⅢ-1期からこの時代の竪穴住居が確認され、Ⅳ-1期よりも1世紀下ったⅣ-3期まで、約3世紀にわたる期間の竪穴住居が報告されている。報告では、Ⅲ-2期までは西側で確認された竪穴住居が、Ⅲ-3期からは調査域全体に広がる様相を呈している。したがってⅢ-3期の居住域拡大が今回行った調査地点まで波及したことが、東山44～50号窯式期の竪穴住居からみてとれる。その後、今回の調査地点では、東山50号窯式期、岩崎17号窯式期と竪穴住居跡が確認できるが、市調査地点で8世紀代として報告される、Ⅳ-2、Ⅳ-3期の竪穴住居跡は確認できなかった。この状況を踏まえて、現在までの調査成果をもとに小針遺跡の古墳時代～奈良時代の居住域変遷を概観してみる。最初に遺跡西側で確認された竪穴住居は、7世紀代になって居住域を拡大し、その東方向での先端が碧海台地の落ち際である今回の調査地点まで至った。さらに、8世紀代には、竪穴住居での居住の痕跡は、市調査地点では継続されるものの、今回の調査地点からは確認できなくなる。そして、今回の調査地点で確認された掘立柱建物は、竪穴住居より新しいということ以外に時期を判断できなかったが、これが市調査地点において8世紀代とされる掘立柱建物と同時期であるならば、今回の調査地点はこの時期

小針遺跡

に空間利用の形態が変わった、とも想定されよう。また、今回の調査地点では、この時期に小穴列を伴う溝が検出され、須恵器長頸壺の完形が出土していることも、竪穴住居による居住空間とは異質なものを想起させる。

平安時代、鎌倉時代の遺構、遺物は、今回の調査地点ではわずかに確認された程度で、濃密な生活の痕跡は確認できなかった。平安時代では、中期の灰釉陶器片が土坑からわずかに確認できた。鎌倉時代では、灰釉系陶器（山茶碗類）がA区の南東部から検出された。しかし、いずれも小土坑からの出土で、これら遺構間の相対関係、上部構造などは、想定できなかった。同じA区南東部からは、非ロクロ成形の土器皿が完形で2点出土したS K306がある。この皿は成形技法、断面形状を、矢作川対岸の資料を対象にした鈴木編年に照合すると、第4～5段階にあたるものと思われ、時期的には13世紀中～後葉に比定されている。山茶碗類、土器皿が検出されたこの地点での土坑は、13世紀代の集落まで想定できるものではない。しかし、小針遺跡の中世像は、市調査地点でわずかに確認されたこの時期の土坑、溝や、今後の追加資料も含めて、どのように相対するか検討する必要があるであろう。

戦国時代の遺構、遺物は、市調査地点では確認されていない。今回の調査地点では、C区北東部にのみ確認され、いずれも溝状遺構であった。調査区はA・B区からC区にむかって東西に設定され、台地の落ち際である東側は比高約1mと、大きく削平されていた。C区の削平手前部分と、北東隅に残った基盤面から数条の溝が検出され、これらからは16世紀代を中心とした土器、陶器が確認された。遺物の内容としては、土器内耳鍋、羽釜、陶器摺鉢といった食生活関連の器種が主体を成し、生活の痕跡が顕著である。調査区の中ではこの時期の建物はとらえられなかったが、溝はいずれも北側から南流しているものと思われ、16世紀には北側に集落が存在した可能性がうかがえる。

・年代測定と出土遺物

今回の調査では、竪穴住居跡、土坑、土坑墓から採取した炭化物を試料として、AMS法による放射性炭素年代測定を実施した。特に住居跡試料に関しては、かまどと思われる部分の炭化物が半数以上含まれる。これらは、住居跡埋土中の炭化物に比べて、その住居が機能した年代を測定する上で、信頼性が高い。時期判断には、科学的測定値を絶対視する危険は避けなければならないが、出土遺物にも混入、サンプリング・エラーの可能性が含まれるため、同様に絶対視できない。ここでは、竪穴住居跡のかまどから採取した試料の測定値と、出土遺物からうかがえる時期的特徴を比べてみる。

S B402では、出土した須恵器高坏の特徴は、東山15号窯式期の様相がみとめられたが、測定値では595-640（67.2%）であった。カッコ内の数値は、1 σ 暦年代範囲における確からしさの確率で、100パーセントではない。数値幅の中では、7世紀前葉にあたると判断したい。

S B405では、出土した須恵器高坏の特徴は、東山50号窯式期の古相がみとめられたが、測定値では560-620（85.9%）および600-655（100%）であった。確率も考慮して判断すれば、数値幅の中では7世紀前葉にあたると考えるのが妥当であろう。

S B 407では、出土した須恵器の特徴が東山44～50号窯式期のものであったが、測定値では535-615（100%）とやや幅の広いものであった。数値は、80年という幅がもたれているが、遺構の切り合い関係からみると、下記のS B 408よりも新しいことを考慮し、数値幅の中では新しい側の7世紀前葉にあたると判断したい。

S B 408では、図化可能な須恵器が出土しておらず、2点の土器甕の特徴は三河地域で7世紀代に比定されるものであった。測定値では560-640（100%）と、S B 407と同様にやや幅の広いものであった。しかし、遺構の切り合い関係ではS B 407よりも古いことを考慮し、数値幅の中では、6世紀後葉にあたると判断したい。

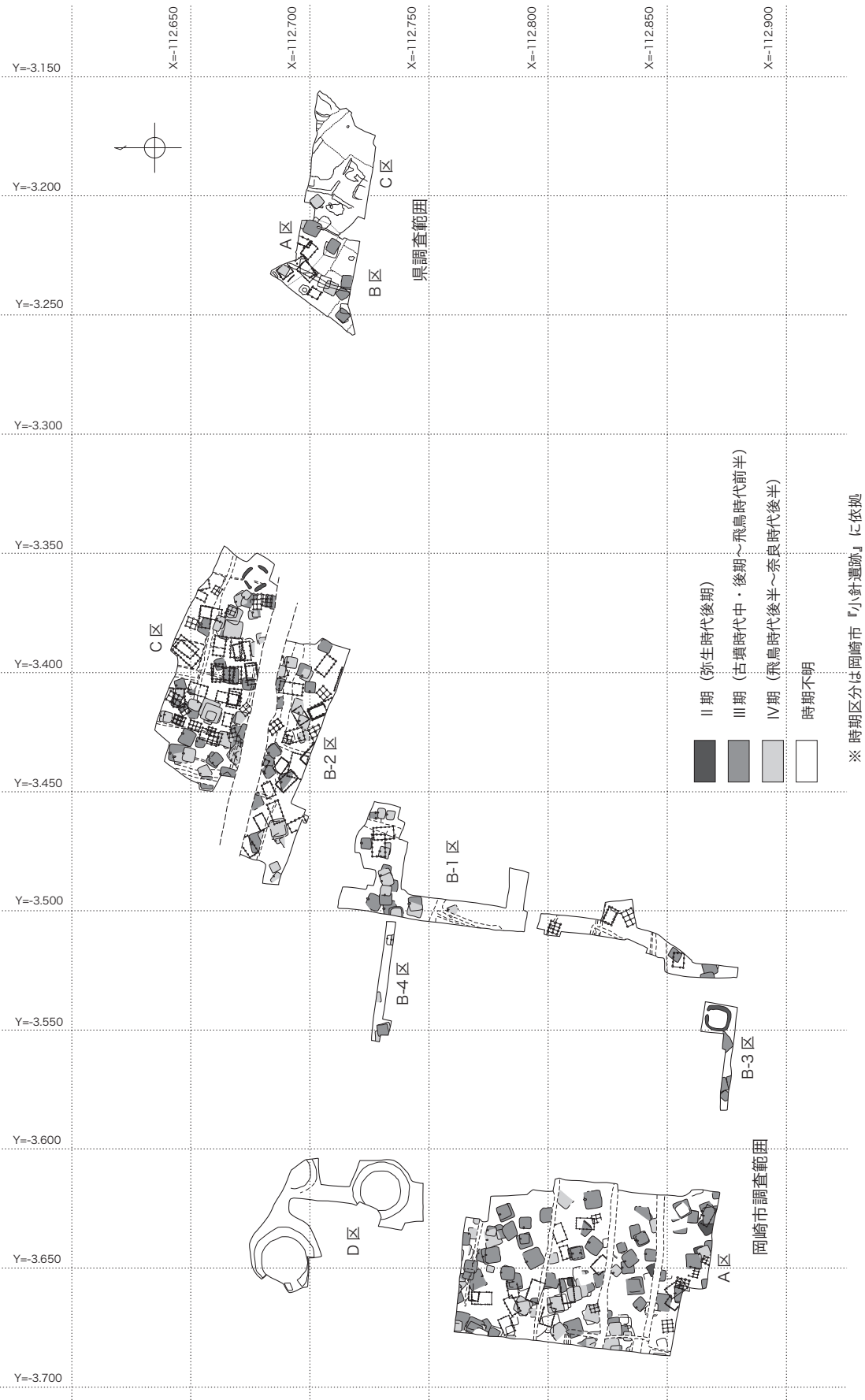
S B 801では、出土した須恵器の特徴が岩崎17号窯式期のものであった。測定値では645-690（100%）と、やや幅の狭いものであった。したがって、数値幅の示す値から7世紀後半にあたると判断したい。

今回の調査で、AMS法による年代測定を行った試料の中から、竪穴住居のかまどから採取した炭化物を抽出し、その測定数値と出土遺物との時期的な対比を記した。ここで窯型式による説明を行った須恵器等は、生産址出土遺物ではなく、あくまでも集落遺跡出土の消費資料である。遺物の伝世は考慮する必要があるであろうし、年代測定値については、暦年代較正された範囲のさらなる精査が必要と感じられる。しかし、こうした対比を重ね、出土遺物の年代観をさらに検討してゆくことは、統一的な見解を構築する一助となる。ここで現れた年代測定結果は、生産址の資料により提示されているものと、大きく異なることはなかった。換言すれば、このことは、AMS法による放射性炭素年代測定が、有効であることを示している。今後、さらなる成果の積み重ねが、期待されよう。

・ 結語

小針遺跡は、継続的ではないまでも、縄文時代の中～晩期、弥生時代後期、古墳時代、古代、中世、戦国時代の人々が足跡を残す複合遺跡である。その中でも、6～8世紀代に継続して営まれたと思われる集落跡は、先の岡崎市教育委員会による調査、報告でも指摘されているように、当該期の西三河地域では最大級である。確認された竪穴住居の総数は、今回の調査地点で検出された24軒を加えると298軒を数え、掘立柱建物は、同様に今回の5棟を加えて90棟を数える。遺跡の広がり方を考慮すれば、これらの検出済み遺構は、集落全体のごく一部のものだと思われる。6～8世紀代に、それだけの規模をもって継続された集落は、何らかの役目を持ち、何ものかを支えるための集団が居住していたと考えて差し支えなからう。この地は、『和名類聚鈔』に記載された三河國碧海郡16郷のうち、鷺取郷に比定された場所である。小針遺跡の大規模な集落跡は、この郷の中心的集落というだけでなく、7世紀代に成立したと言われる近隣の北野廃寺との関係なども含めて、調査成果の蓄積から居住した集団の性格を検討する必要があるであろう。

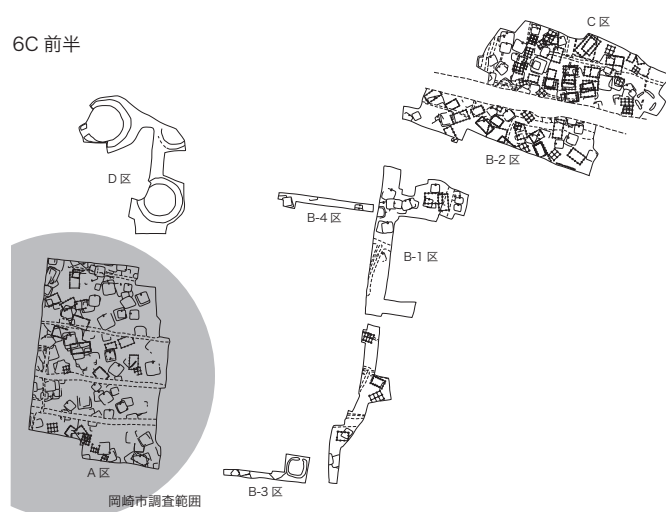
小針遺跡



※ 時期区分は岡崎市『小針遺跡』に依拠

第41図 小針遺跡主要遺構図 (1/2500)

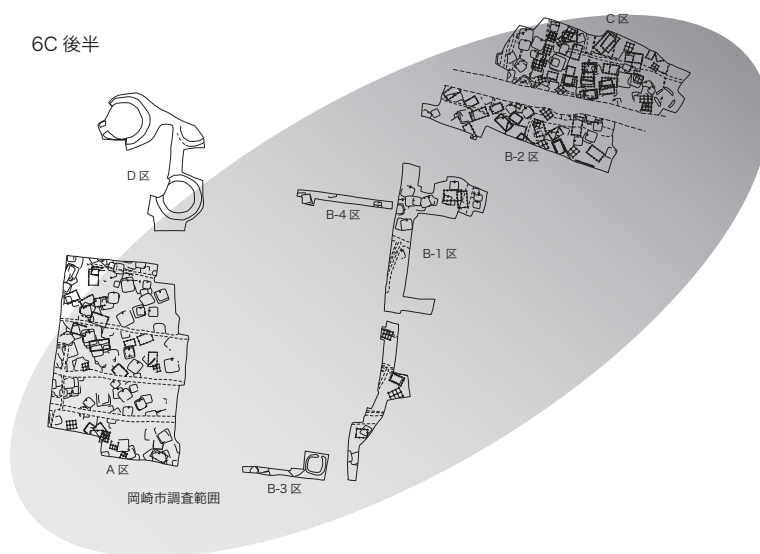
6C 前半



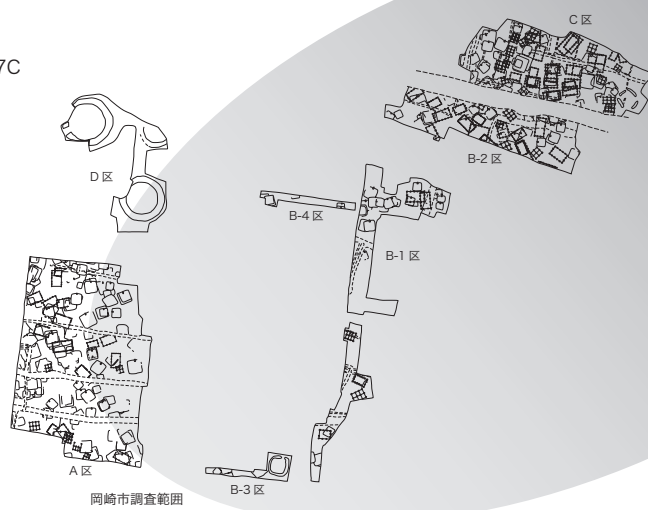
まとめ



6C 後半



7C



※ 時期区分は岡崎市『小針遺跡』に依拠

第42図 小針遺跡遺構変遷図 (1/4000)

小針遺跡

参考文献

斎藤嘉彦 編 1999 『小針遺跡』 岡崎市教育委員会

岡安雅彦 編 1996 『御用地遺跡』 安城市教育委員会

新編岡崎市史編集委員会 編 1992 『新編岡崎市史 原始・古代』 新編岡崎市史編さん委員会

新編岡崎市史編集委員会 編 1989 『新編岡崎市史 中世』 新編岡崎市史編さん委員会

新編岡崎市史編集委員会 編 1987 『新編岡崎市史 史料 考古 上』 新編岡崎市史編さん委員会

新編岡崎市史編集委員会 編 1989 『新編岡崎市史 史料 考古 下』 新編岡崎市史編さん委員会

斎藤孝正 1995 『須恵器集成図録 第3巻 東日本編1』 雄山閣出版

城ヶ谷和広 1993 「尾張猿投窯と尾北窯～飛鳥時代に見られる須恵器生産の様相～」『年報 平成4年度』（財）愛知県埋蔵文化財センター

永井宏幸 1996 「尾張平野を中心とした古代煮炊具の変遷」『鍋と甕 そのデザイン』
東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会

藤澤良祐 1982 「瀬戸古窯址群1」『瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要1』 瀬戸市歴史民俗資料館

鈴木とよ江 2002 「西三河南部地方の中世土師器皿について-その1-」『考古学フォーラム14』
考古学フォーラム

川崎みどり 1995 「御用地遺跡をめぐる問題」『安城市歴史博物館研究紀要2』 安城市歴史博物館

遺
構
図
版

遺構図版目次

遺構図－ 1

遺構図－ 2

遺構図－ 3

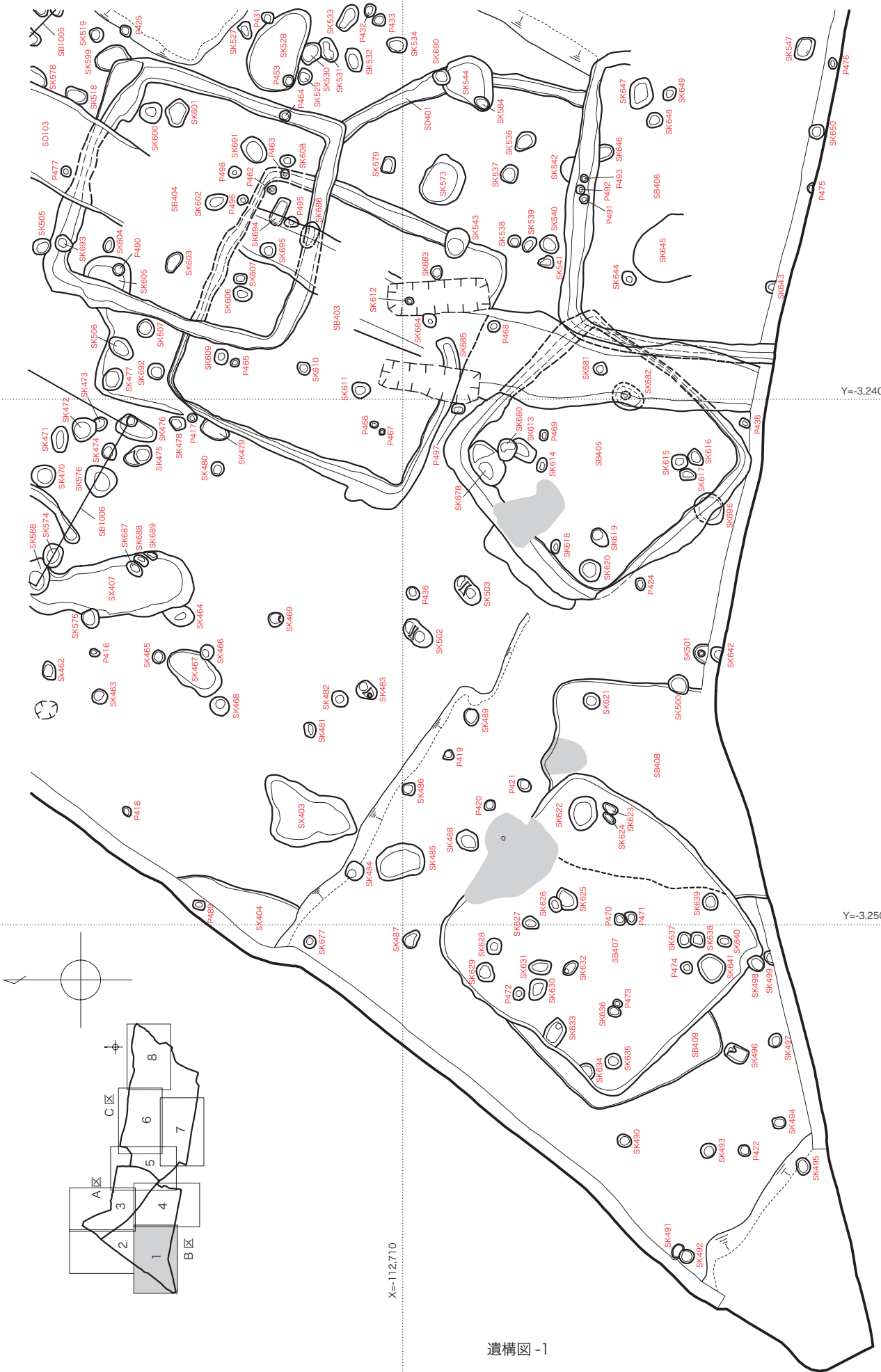
遺構図－ 4

遺構図－ 5

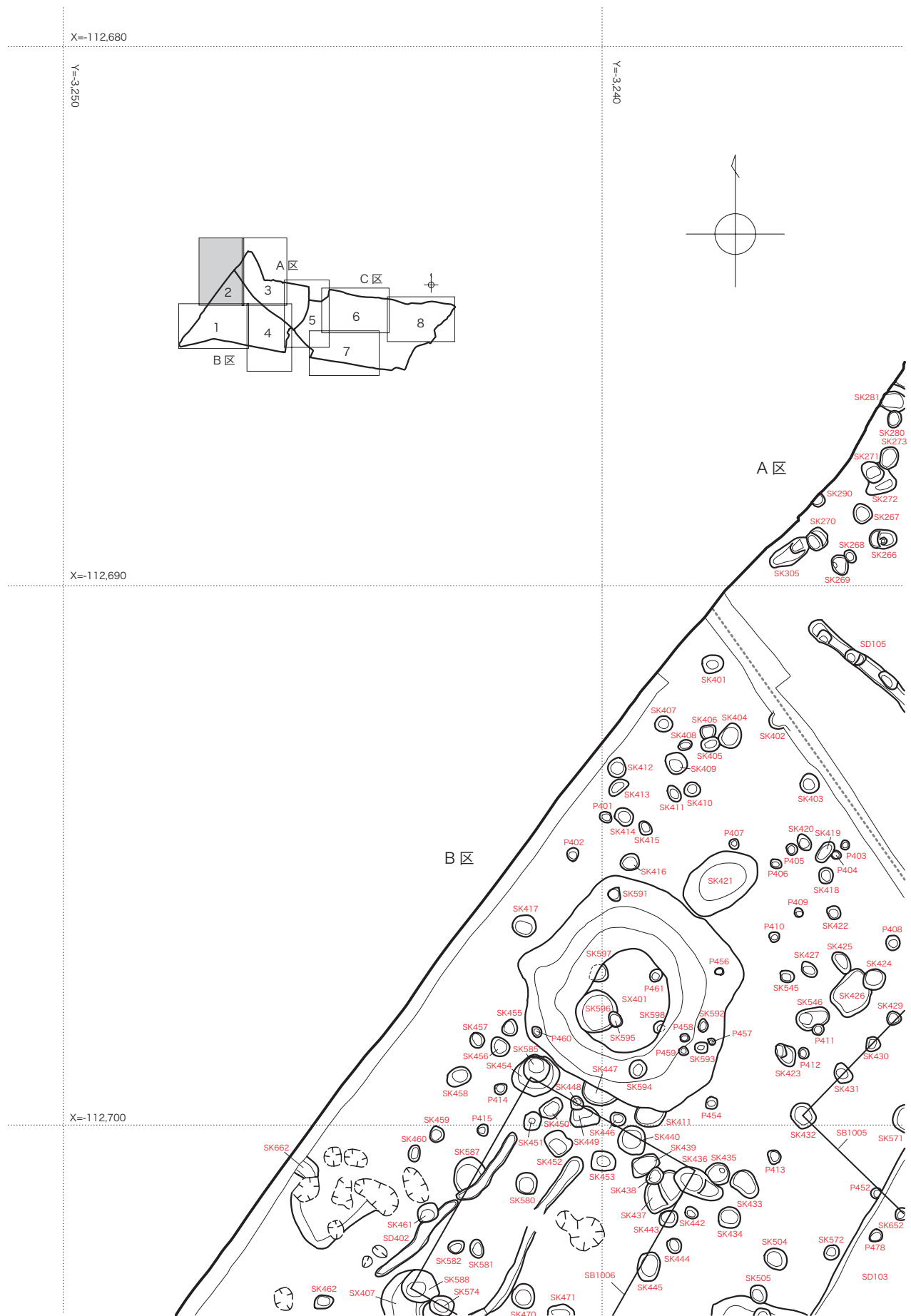
遺構図－ 6

遺構図－ 7

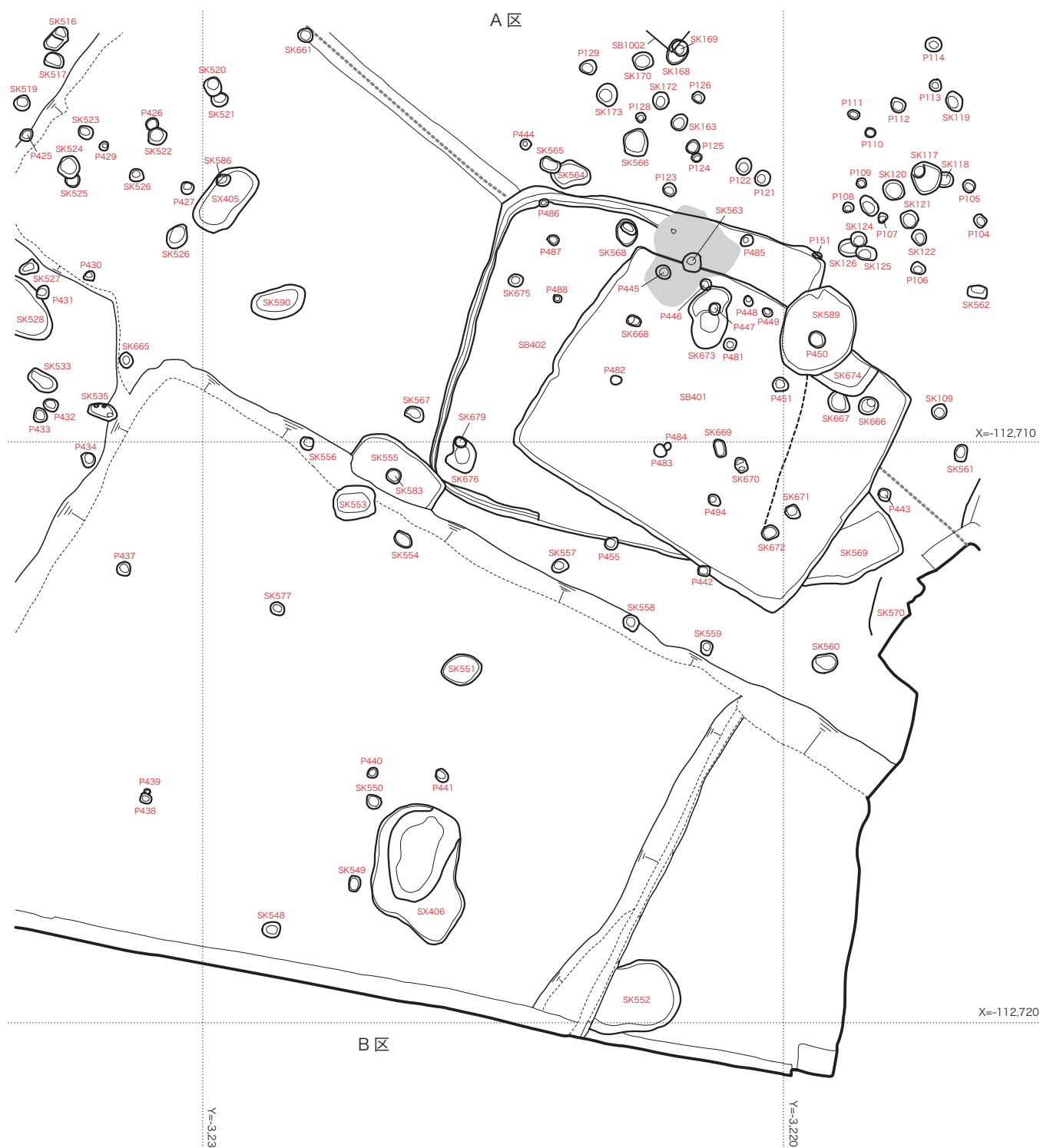
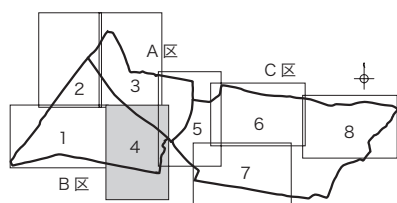
遺構図－ 8



遺構図-1

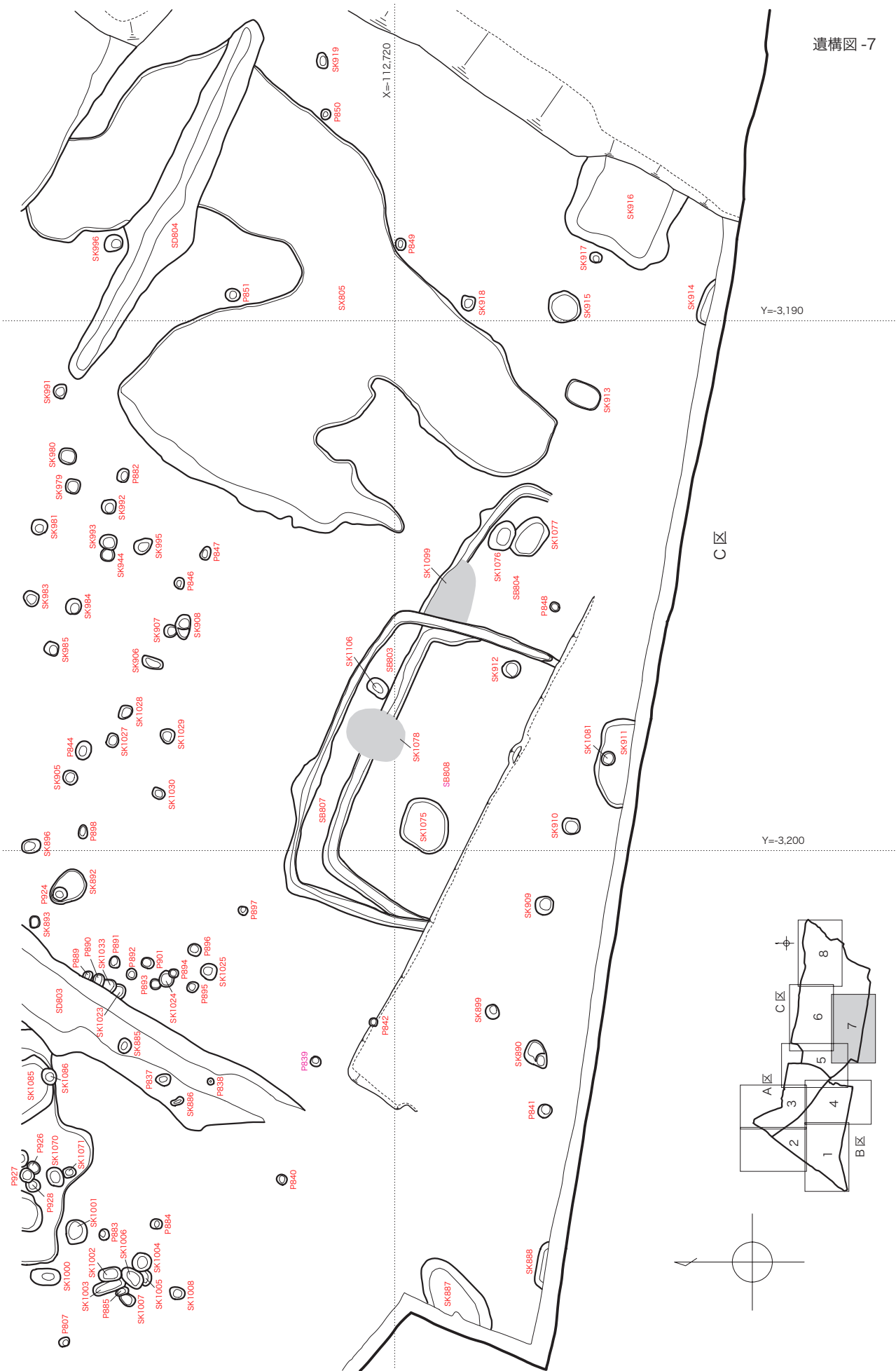


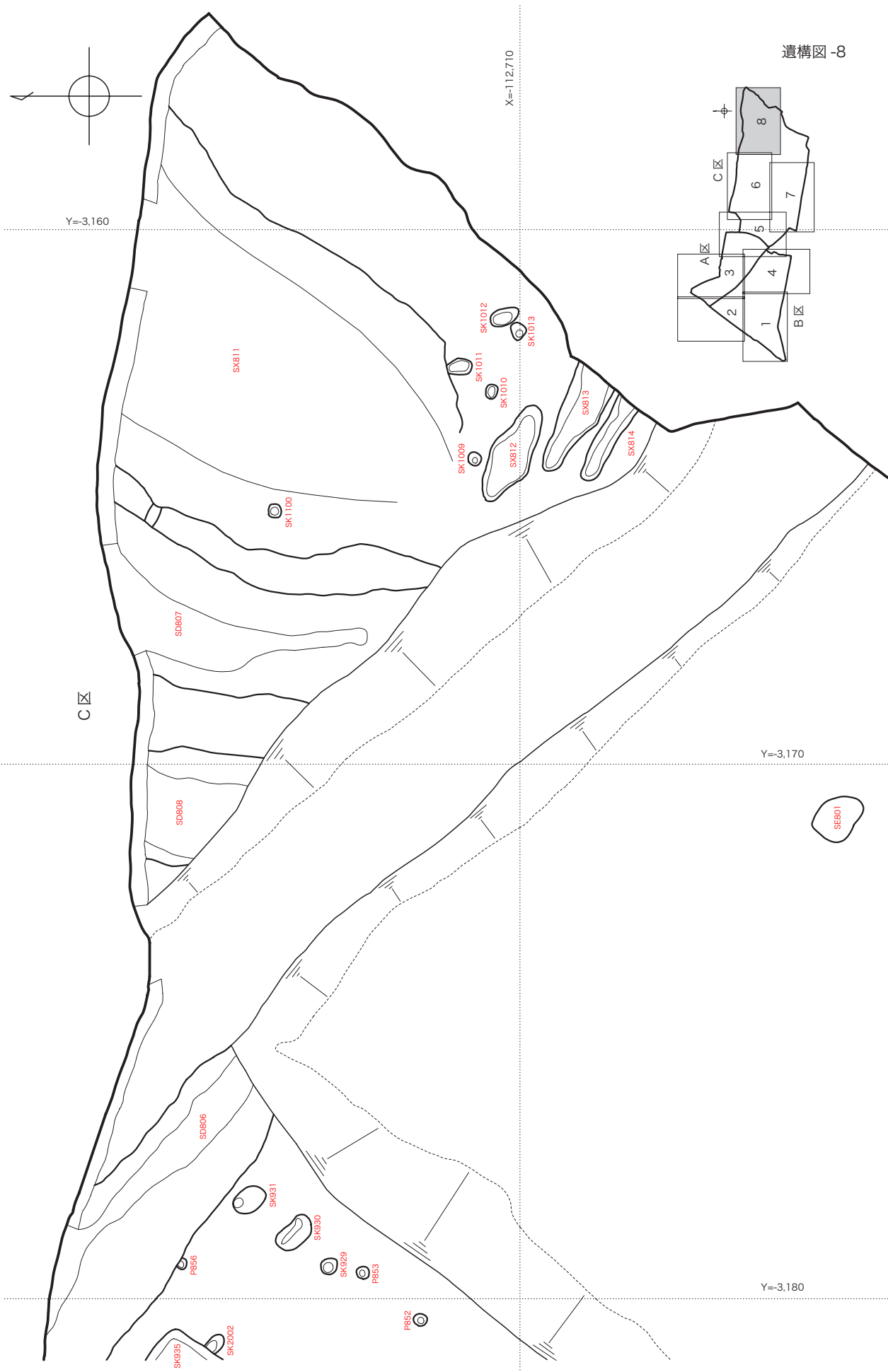
遺構図-2



遺構図-4

遺構図-7





遺構図-8

写真図版

写真図版目次

図版 1

- (1) A区全景（北東より）
- (2) A区全景（南より）

図版 2

- (1) B区全景（東より）
- (2) B区全景（俯瞰）

図版 3

- (1) C区全景（西より）
- (2) C区全景（俯瞰）

図版 4

- (1) A区遺構検出状況（東より）
- (2) A区全景（東より）
- (3) A区西部（西より）
- (4) A区S B101・102・105（南より）
- (5) A区S B101カマド検出状況（南より）
- (6) A区S B103（南より）
- (7) A区S B104（南より）
- (8) A区S D105（西より）

図版 5

- (1) A区S D103（南より）
- (2) A区S D103断面（南より）
- (3) B区遺構検出状況（南東より）
- (4) B区全景（東より）
- (5) B区S B401・402（北東より）
- (6) B区S B403～406（北東より）
- (7) B区S B403（東より）
- (8) B区S B404（東より）

図版 6

- (1) B区S B405（南東より）
- (2) B区S B405カマド（南東より）
- (3) B区S B406（南東より）
- (4) B区S B407～409（北西より）
- (5) B区S B407出土状況（南より）
- (6) B区S B407出土状況（南東より）
- (7) B区S D103（北東より）
- (8) B区S B1005柱穴列（北東より）

図版 7

- (1) B区S K510断面（南西より）
- (2) B区S X401（西より）
- (3) B区S X401断面（北西より）
- (4) B区S X401断面（南西より）
- (5) C区北東部（東より）
- (6) C区北西部（西より）
- (7) C区S B801（南東より）
- (8) C区S B801カマド（南東より）

図版 8

- (1) C区S B803・807・808（南西より）
- (2) C区S D802（南より）
- (3) C区S D803（北東より）
- (4) C区S D807断面（南より）
- (5) C区S D808断面（南より）
- (6) C区S X811断面（南より）
- (7) C区S Z801出土状況（北西より）
- (8) C区S Z802（北東より）

図版 9

- 遺物写真（1）

図版10

- 遺物写真（2）



(1) A区全景（北東より）



(2) A区全景（南より）



(1) B区全景（北東より）



(2) B区全景（俯瞰）



(1) C区全景（西より）



(2) C区全景（俯瞰）



(1) A区遺構検出状況（東より）



(2) A区全景（東より）



(3) A区西部（東より）



(4) A区S B 101・102・105（南より）



(5) A区S B 101カマド検出状況（南より）



(6) A区S B 103（南より）



(7) A区S B 104（南より）



(8) A区S D 105（西より）



(1) A区SD103 (南より)



(2) A区SD103断面 (南より)



(3) B区遺構検出状況 (南東より)



(4) B区全景 (東より)



(5) B区SB401・402 (北東より)



(6) B区SB403~406 (北東より)



(7) B区SB403 (東より)



(8) B区SB404 (東より)



(1) B区S B405 (南東より)



(2) B区S B405カマド (南東より)



(3) B区S B406 (南東より)



(4) B区S B407~409 (北西より)



(5) B区S B407出土状況 (南より)



(6) B区S B407出土状況 (南東より)



(7) B区S D103 (北東より)



(8) B区S B1005柱穴列 (北東より)



(1) B区SK510断面 (南西より)



(2) B区SX401 (西より)



(3) B区SX401断面 (北西より)



(4) B区SX401断面 (南西より)



(5) C区北東部 (東より)



(6) C区北西部 (西より)



(7) C区SB801 (南東より)



(8) C区SB801カマド (南東より)



(1) C区S B 803・807・808 (南西より)



(2) C区S D 802 (南より)



(3) C区S D 803 (北東より)



(4) C区S D 807断面 (南より)



(5) C区S D 808断面 (南より)



(6) C区S X 811断面 (南より)



(7) C区S Z 801出土状況 (北西より)



(8) C区S Z 802出土状況 (北東より)



1



2



3



6



17



19



36



41



42



43



45



46



47



49



51



53



54



66



74



76/75



86



102



89



97



113



108



112



133



115



129



135

報告書抄録

ふりがな	こばりいせき							
書名	小針遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第136集							
編著者名	松田 訓、鬼頭 剛、山形秀樹（株式会社パレオ・ラボ）							
編集機関	財団法人愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター							
所在地	〒498-0017 愛知県海部郡弥富町前ヶ須新田野方802-24							
発行年月日	西暦 2005年8月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °、′、″	東経 °、′、″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
こばりいせき 小針遺跡	あいちけん おかざきし 愛知県岡崎市 小針町一シキ	23190	51286	34度 59分 2秒	137度 7分 53秒	7/15/03 ～ 12/12/03	2100㎡	県道名古屋岡崎線建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
小針遺跡	集落跡	縄文～戦国	竪穴住居 掘立柱建物		須恵・土師器 戦国時代土器		小針遺跡の集落東端確認	

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第136集

小 針 遺 跡

2005年 8 月31日

編集・発行

財団法人愛知県教育サービスセンター
愛知県埋蔵文化財センター

印刷

西濃印刷株式会社